

続ソドムの飽食（前編）

惨劇の舞台再び

「突然私たちをお茶にご招待したいと、お誘いがあったのは、どういう風の吹き回しかしら？」

金田伯爵家の白亜の豪邸に向かって、姉の聖子と並んで歩きながら、浦川侯爵家の末娘の明子が、屈託のない笑顔で母親の晴子に問いかけた。

「なんでも、進駐軍の払い下げ品を販売する事業が軌道に乗って来て、余裕が出て来たので、久しぶりにお会いしたいと云うことらしいわよ」

と、品の良い笑みを見せながら晴子が応えた。

四度目の終戦記念日を間近にする暑い夏の日であった。

三人で並んで歩く旧貴族の母娘に八月の陽光は容赦なく照りつけていた。

戦前の優雅な生活をおくっていた頃なら、お抱え運転手の運転する自家用車で直接乗り付ける所であるが、戦後の様変わりした世の中で没落した浦川家には、最早、運転手付きの自家用車を維持するだけの財力は無く、最寄り駅を降りた後は、暑い夏の日差しの下であっても日傘だけを頼りに、自分の足で訪問するしか無かった。

金田邸に続く緩やかな登り坂をトボトボと歩みながら、時々ハンカチを取り出しては、額に滲み出た汗を吸い取ったりしたが、流石に貴族の身嗜みか、そこいらの庶民の様に、暑いからといって、だらしく服を着崩したり、袖を捲り上げて肌を風に晒すような下品な様は無く、母親の晴子は瀟洒な夏用の訪問着を優雅に着こなし、寄り従う二人の娘達も艶のあるシルクの清楚なワンピースを上品に着こなしていた。

母の晴子は40歳を幾つか越えていたが、まだ肌の張りは残されており、体型の崩れも無く、染み一つ無い練り絹の様な滑らかな白い肌をしていた。

黒く長い髪を優雅にアップに結い上げ、訪問着の襟足から覗くほっそりとしたうなじは、成人した娘を持つ母とも思われないような色香を醸し出し、たまに通り過ぎる男達目を釘付けにした。

姉娘の聖子は、成人した貴族の娘としての自覚からか、すっかり優雅な淑女としての所作を身に着けて歩を進めていた。

母と似てほっそりとした流麗なスタイルが夏物の薄いクリーム色のワンピースを通して見

て取れた。

ワンピースと併せたクリーム色の帽子を載せた長いストレートな黒髪がそよ風に優雅にそよぎ、襟首から覗き見える雪の様に白いほっそりとした首すじには、本日のため精一杯めかし込んで真珠のネックレスをしていた。

妹の明子は、まだ姉の様に淑女として目覚める歳には達しておらず、また浦川家に迫りつつある生活困窮への危機も知らないのか、久しぶりの母とのお出かけが嬉しくて仕方無いと言うように、子犬がまとわり付く様に母の袂を握って少女然とした愛くるしい快活な笑顔を振りまいていた。

この美しい母娘の一行に、道行く人々も暫し足を止めて、その優雅な姿を目に焼き付けるのであった。

金田家の白亜の豪邸はもう目の前に近づいていた。

かつては、周囲に幾つも在ったお屋敷の多くは、敗戦により多くの特権を失った没落貴族や、敗戦で破産した資産家達には維持できなくなり、人手に渡ったり、空き家となり、取り壊されて更地になってしまった物も多く、戦争前のお屋敷街の面影は最早なくなっていた。

以前ならそこかしこの豪邸に植えられた樹木が陽光を遮り、街路を吹き抜ける風も、樹木で冷やされ、夏でも涼やかな感じがしたものであるが、今はそのような自然環境も姿を変えてしまい、荒涼とした景色で、一層暑さが身に滲みるように感じられた。

戦禍を逃れ奇跡的に残されていた古くからの豪華な町並みが、平和が訪れた途端に破壊されてしまったことに何か皮肉な因縁を感じるのであった。

そのように様変わりしてしまったこの辺りで、順子の稼ぎだけで、この豪邸を維持できているのは、奇跡のように浦川家の母娘には思えた。

「順子様は英語が大変お上手でいらっしゃるから、進駐軍相手にそのような交渉が出来て羨ましいわ。」と、姉の聖子が羨むように言った。

特に何の事業を興すだけの才覚もなく、戦後の混乱期の中で家財を切り売りするだけで日々の生活を送り、今やめぼしい物も売り尽くしてしまい、返済出来る当ての無い借金を繰り返すだけとなってしまった家庭の事情に薄々気付いている聖子は、この荒涼とした景色を眺めながら、破産して住む家を追われたこの街の住人の姿に、今まさに破産の危機に瀕している自分達の状況を重ね合わせて溜息を吐くのだった。

「そのようなことを言うものじゃありませんわ。金田伯爵家には終戦の日に脱走兵に強盗に入られ多くの財産を奪われたあげく、お父様と古くから仕えていた執事や家政婦も殺されて、そのショックでお母様とお姉様はご病気で寝たままになられ、順子様一人で大変苦勞をなされてここまで来たのよ。」と、侯爵夫人がたしなめるように言った。

その様な災難に遭遇して家族を失った金田家に比べれば、家族全員無事で戦争を乗り越えた自分達の幸せに感謝しなければいけないとの意味を込めて娘達に諭すのだった。

「まあ、可哀想な順子様！ねえ、私たちに出来ることがあれば、何でもお手伝いして上げたいわ！ねえ、そうでしょう？」

と、明子が母親の手を取って、潤んだ目を瞬かせ、じっと覗き込むように母親の目を見詰めるながら言った。

その明子の真摯な表情に突き動かされたように、「ええ、本当にそうね・・・」と、晴子も肯くのだった。

三人の貴婦人は浦川侯爵家の母娘であり、浦川侯爵家は金田伯爵家と同じく二人の娘を持っていた。

母親の晴子は現在43歳、姉の聖子は22歳、妹の明子は18歳であり、金田伯爵家の母娘と歳も近く、その母娘の美貌は戦前のまだ貴族や名士の交流が盛んな頃は、金田侯爵家の母娘と並び賞されていたものであった。

日本が敗戦を迎え、貴族もその特権的地位を失い、旧貴族といえども、その日の生活に汲々する状態であり、もうすぐ敗戦から4年が経とうとしていたが、その間没交渉のままであったのだった。

ところが、このあいだ順子の方から久しぶりに合いたいと誘いが来たのだった。

それで、今回の母娘での訪問となった訳であった。

終戦から久しく会っていないが順子も既に20歳を越えているはずであった。

最後に在った時は、まだ順子は女学校の学生であった。

あの長いお下げ髪を三つ編みにしていた順子が成人して、今はどの様な立派な貴婦人となっているかと思いをはせるのであった。

三人は金田邸の門をくぐり、敷地に脚を踏み入れた。

戦後の大変な経済状態の中で奇跡的にこの豪邸を保持していたが、この豪壮な邸宅を万全

に維持するほどの余裕は無いと見えて、かつては召し抱えていた多くの使用人により常に綺麗に磨かれていた白い石壁は風雨に汚れ、庭は目に付く雑草こそ詰み取られてはいるものの、手入れが行き届いているとは云えず、かつての美しかった庭園の面影は最早無かった。

玄関に取り付けられたノッカーを晴子が叩くと、暫くしてから、大きな扉を薄く開いて、扉の隙間から若い男が顔を出した。

「お待ちしておりました。どうぞお入り下さい。」

と、男は半開きの扉から顔だけ出して応えた。

侯爵夫人は、客人を招き入れるに際して、この使用人の礼儀の悪さに鼻白む様な物を感じていた。

よく見ると、男は汗を浮かべた上半身に直接白い開襟シャツを着ているようであり、下は黒い木綿のズボン姿で靴下も穿かず直接薄汚れたズック靴を履いただけであった。

油断のならない怪しい目つきをした人相の悪い黒く日に焼けた顔は、まるでその辺の露天商にいるような得体の知れないゴロツキのような印象であった。

時代が変わったものだー昔はこんな品の無い男など、使用人には雇わなかったものなのに・・・と、残念な思いが込み上げ、男をジロツと上から下まで一瞥した後、その使用人風の若い男の前で露骨に顔を顰め溜息を吐いた。

蛙の面に小便という言葉があるが、侯爵夫人の侮蔑を込めた態度に何も気付かないのか、男はぎこちない態度で伯爵一家を中に迎え入れた。

それは戦前に仕えていた良く躰けられた使用人の洗練された所作とはほど遠いものであり、夫人はもう一度深く溜息を吐いた。

そして、さつきからこの男の無様な態度を見ていて、この使用人は少し頭が弱いのではないかと訝る夫人であった。

大扉をくぐり大理石に覆われた玄関ホールに入ると、八月の陽光を完全に遮り、天然石が熱気を吸収するのか、ヒンヤリとした空気に包まれて少し呼吸も楽になったように感じた。贅を尽くした玄関ホールの吹き抜けの天井からは見慣れた巨大なシャンデリアが吊り下げられており、昔と変わらない様子に三人は少しホッとしたものを感じた。

男に案内されて、廊下を幾つも進み、ある部屋の前に連れて来られた。

こちらですと、扉を開くと中に入るように言われた。

浦川侯爵家も戦前の上流社会の交流が華やかな頃は、幾度か金田伯爵家を訪問したことがあり、その部屋がシャンデリアの吊された広い食堂である事を知っていた。

室内には厚いカーテンが引かれており、真夏の強烈な陽光に慣れた目には、にわかには中の様子が見えないほど薄暗かった。三人の女を通すと男が背後でドアを閉めたので、室内は真っ暗となった。

女達は、この若い使用人が少し頭が弱いので、気が回らず、お客を部屋に通す前に灯りを点けるのを忘れてしまっただけで、次に当然、部屋の灯りを点けて貰えるものと思ったが、何時までも男は灯りを点ける素振りは無かった。

それよりも、自分たちの背後で不気味な気配を立てる男に不安なものを感じ初めていた。堪り兼ねてこの若者に、灯りを点けて下さらない？と言おうとした時、この室内の異様な雰囲気が伝わって来て言葉を発するのを忘れた。

薄暗い室内には自分達の他に何人かの人がいる気配を感じた。

そして、それらの人間から発生する生臭い体臭が鼻腔に伝わって来るのだった。

突然の異様な状況に遭遇して三人の女は其処を動くことも声も上げることも出来ずにいた。

暫くすると、カーテンの隙間から差し込む僅かな明かりに目が慣れて来た。

闇に目が慣れてくると、部屋の奥に多くの男が集まっているらしい様子がぼんやりと見えてきた。

その男達の様に、母娘は思わず息を呑んだ。

信じられないことに、どうやら男達は全員裸のようであった。

そして浅黒い全裸の男達の集団の真ん中に、白い体が浮かんで来た。

それはどうやら全裸の女の様であった。

そして、その女は床に伏した一人の男の上に俯せに身を預け、その女の背後から別の男が覆い被さっているようであった。彼らは淫靡に体を蠢かせていた。

今や男達のくぐもった声と女の発する低い喘ぎ声が、はっきりと聞こえるように成って来た。

自分たちが突然異常な部屋に連れ込まれてしまった事を理解した母娘は、ヒエッと悲鳴を上げ、その場にへなへなと力なく崩れ落ちた。

大理石の床に仰向けになった男の上に俯せに重なり、前門を刺し貫かれながら、更に自分

達に覆い被さるように上になった別の男から後門を突き立てられ、順子は激しい苦痛と、苦痛から転化した得体の知れない快感により、ともすれば意識が飛びそうになる中で、浦川侯爵の母娘がこの部屋にやって来たことが分かった。

「ここに復讐が始まる・・・」

苦痛と快感が入り交じった心の底からどす黒い欲望が沸き上がるのを感じながら順子は心の中で呟いた。

全裸にされた順子は、両腕を麻縄で高手小手に縛り上げられ、余った縄尻を前に回して、豊かに育った乳房の上下を何本もの麻縄で括り上げられ身動き出来ない状態で、男達に得も言われぬ快感を紡ぎ出すであろう前後の穴を二人の男の逞しい物に委ねていた。

薄い肉壁一枚を挟んで、前後に動く逞しい肉塊に搔き立てられ、順子の心は二つの女性の器官が発する苦痛と入り交じった快感の激しい刺激に翻弄されてた。

そんな順子の心身の状態など斟酌することも無く、ただ自分達の快感に没入するだけのために荒々しく、柔らかく繊細な筋肉が形作る二つの秘孔を抉り立てる男達に、抵抗も出来ず思う存分責め立てられる順子であった。

浦川侯爵家の母娘が訪れる一時間以上前から、何人もの男に入れ替わり立ち替わり、犯され続け、イカされ続け、既に心も体も極限の状態にのたうち回っていたのだった。

下に伏す男が、今はすっかり成熟した順子の豊かな乳房を強く揉み上げ始めた。

それと呼応するように、背後から犯す男が順子の長い髪を驚掴みにして、力任せに自分の方に顔を引き寄せると、乱暴に順子の口を吸った。

男のタバコ臭い唾液が順子の口内に流れ込んだ。

男達に犯されて朦朧とする意識の中で、これまでの出来事が、走馬燈のように順子の心に浮かんでは消えた。

あれは終戦を迎える僅か数日前の夜のことであった。その時から私たち家族の地獄は始まったのだ・・・

突然屋敷に乱入して来た三人の憲兵達は、お父様と長年仕えた執事と女中頭を殺して、私たちの肉体を思うがままに虐待し、更に洗脳にかけようように私たち母娘を互いに疑心暗鬼に追い込み家族の心の絆までズタズタに引き裂いてしまった。

更に何人かの憲兵が加虐の輪に加わり、私たちの体を思う存分蹂躪し、いたぶり尽くし、終戦の日から数日してから、加虐にも飽きたのか屋敷内の金品や金目になる物を奪うと何

処へとも知れず姿を消してしまった。

残されたお母様は、獣の様な男達から思う存分蹂躪され、この世の女が味わった事の無いような辱めを受けたショックが未だ癒えず、それ以来心が鬱ぎ込んでしまい、今は軽井沢の別荘でほとんど一日中寝たきりの生活をしている。

可哀想なお姉様は、残忍な憲兵から面白半分に体内に高圧電流を注ぎ込まれ、精神が完全に破壊されてしまい、今は精神病院に入院したままとなってしまった。

お父様を殺された上、金品を男達に強奪され、更にお父様が投資していた満州や朝鮮にあった会社は全て消失して、それらの株券も唯の紙切れとなってしまうていた。

その上、貴族としての特権も優遇も無くなってしまった戦後の世の中で、寝たきりのお母様や入院中のお姉様を私一人の力で支えて生きて行くには、最早この体を占領軍の兵士に売るしか方法はなかった。

既に残忍な男達から、世界中のどの女も味わったことが無いような汚辱の数々をこの身に染みこまされ穢された私にとって、この身を売ること自体には最早何の抵抗は無かった。

ただ、私が幸いだっただのは、お父様が英国滞在時代に生まれて、英国の上流婦人の間で可愛がられて育てられた事だった。

英語が碌に喋れなければ、そこいらのパンパンと蔑まれる女のように下級の黒人兵の愛人になるくらいしか無かったろうが、田舎出の方言丸出しの米軍兵が、自分の酷いなまりを思い知らされて、思わず顔を赤らめるような流麗な英国 ^{クイーンズイングリッシュ} 英語 を話すことが出来る私は、程なく進駐軍のある高級将校の愛人に収まる事が出来た。

その男はアメリカ陸軍の大佐であり、戦時中に病気で奥様を亡くされており、子供も無く孤独な身の上であった。

私は、その男の家で昼は奥様の代わりとなって身の回りの世話をし、夜はこの身を捧げたのだった。

しかし、私に関係する男は何時もそうなのか、それとも男とは皆そうであるのか、この男の性欲も異常なものであった。

夜になると、私をガーターとストッキングだけの裸にすると、俯せにベッドの四隅に四肢を縛り付けて身動き出来ないように大の字に固定して、哀れな元貴族の娘のお尻を赤くなるまで鞭打つ事を好んだ。

さんざんお尻を打ち据えた後、熱を持って赤くなったお尻や剥き出しの陰部を優しく撫で回しながら、その後でベッドに縛り付けられ身動き出来ない私を隆起した肉塊で背後から

突き立てるのだった。

しかし、この男の行為は、あの憲兵達のように残忍なものでは無く、慈しみのあるものであった。

私が鞭打たれる度に上げた悲鳴も彼に対するサービスのようなものであり、その後の彼の愛撫も優しさが込められていた。

強烈な鞭打ちとそれに続く行為の後には、本能に駆られるままに、互いに体を貪りあった。

しかし、この私たちの愛ある生活も長く続かなかった。彼が韓国駐留軍への移動を命じられたためであった。

正式に籍の入っていない私を新たな赴任先に連れて行くことは出来なかったのだ。

しかし、彼は私が一人残された後も生活に困らないよう、部下に手配しておいてくれた。

ロジスティクス

兵 站 担当で自分のサイン一つで大砲からバターまで何でも揃うと常日頃から豪語していた彼は、自分がいなくなった後も、絶えることなく食料品や日用品を、部下を通して渡すことが出来るように手筈をしておいてくれたのだった。

その量は一人で消費するには、余りにも大過ぎる量であったので、闇市に持ちこみ金銭に換える事が出来た。

それらの高級な米国産の製品は物不足の日本では驚く程高く売れ、生活を安定させた。

そして、出入りする闇市で、横浜の方で最近メキメキと力を伸ばしている新興の闇販売組織の噂を耳にした・・・

快感に洗い流されそうになる意識の片隅でここまで思い出した時、上下から責め立てる男達が限界に達したことを示す大きな呻き声を上げた。

私もさっきから快感の限界を彷徨っており、男達が最後のあがきのように、一層体の動きを激しくするのに煽られて、快感が一気に頂点に達した。

男達の焼けるように熱くて粘い樹液の放出を前後の深奥に感じて、そのまま意識が白くなった。

それからどれくらい時間が経ったのか分からないが、恐らく体の温もりの感触から、僅かな間しか経っていないようであったが、肉欲に狂った男達は絶頂を極めて、ぐったりした女をゆっくり休ませるだけの優しさは持ち合わせておらず、再び別の男達が自らの獣欲を

満たすべく疲れ切った女体を求めてやって来た。

今度はさっきとは逆に仰向けになった男に尻を預け、大きく広げられて両脚を割って別の男が前から挑み掛かってきた。

先ほど極めた男女の愛欲の末の絶頂の姿が、恐らく余りにも凄まじいものであったのであろう。浦川侯爵家の母娘は、目を見開いたまま、体をブルブルと震わせて蒼白になり、声も上げられず、血走った目でこちらを注視している姿が映った。

再び前と後ろの穴に男達の巨大な肉塊に突き立てられ、息も止まるような激しい苦痛と快感に揺さぶり立てられた。

別の男がいきり立つ怒張を振り立てながら、近づくと口をこじ開けて、その太く生臭い物を口内に押し入れて来た。

浦川侯爵母娘が引きつった悲鳴を上げて体を震わせる様子を、男のモノを口内に含みながら横目でチラリと盗み見た。

・・・その横浜で勢力を伸張して来た三島組と云う新興闇組織の倉庫兼事務所を私が訪れたのは1ヶ月ほど前のことであった。

突然訪ねて来て、社長に会わせて欲しいと言う妙齢な女の出現に、若い組員は驚いた様子を見せたが、兎に角社長には取り次いでくれた。

闇市での販売組織と言っても、その商品の入手手段は勿論合法的な物では無く、他の闇組織を襲っては暴力で物資を強奪するような荒っぽいやり方で、申し上がって来たような組織であるから、他の組の襲撃を恐れて、まるで出入りに臨む暴力団の組のような緊張した様子で組事務所を守っている様子がありありと判った。

私を見つめる若い組員も敵意の籠もった目で、油断無く睨み付けていた。

「社長が会うと言ってます。」と、先ほど取り次ぎを求めた男が戻って来て、順子を倉庫の中に招き入れた。

事務室に向かう倉庫には色々な物資が入った木箱や段ボール箱が天井まで堆く積み上げられており、その積み上げられた物資の山が作る狭い迷路のような通路を通り抜けると、20畳程の広さの事務室に達した。

事務室の中には、何人かの男性社員が居て、申し訳程度の机が並べられていた。

一番奥の一際大きな机を前に、椅子に反っくり返って脚を机の上に投げ出して座る社長の姿があった・・・

口内に怒張を突き立て、本能に煽られるままに腰を振り立てていた若い男が、突然口内に激しく精液を放出したことにより、現実に戻された。

まだ女性経験も余り無いような若い男であったので、無意識に私が口技を使う間に煽り立てられ、自制が出来なくなって射精したのだろう。

口内に残された夥しい濃厚な粘液を咽を鳴らして飲み下した後、舌の根元に力を込めて口内にねじ込められたままの怒張を強くしごき上げ、尿道に残る精液を搾り上げて啜り、舌先を丸めて鈴口を撫でて男の苦い残り汁を舌先で絡め取ると、唾液と共に最後の一滴まで咽の奥に流し込んだ。

念入りの舌先の愛撫を敏感な箇所を受ける若い男の顔が感激に歪むのが目に映った。

若い男の生臭い肉塊の匂いが鼻腔を突き刺すが、朦朧とする意識の中で快感への誘う一つの刺激のように感じ始めていた。

ともすれば薄れそうな意識の中で走馬燈のように回想が続いていた。

・ ・ 正面に脚を投げ出して座る社長の顔は忘れようとしても忘れることの出来ないあの憎い憲兵中尉の中島であった。

その両隣には自分の処女を奪った小島と大島が机を並べて座っていた。

この部屋にいる男達の半数近くは、あの時の憲兵隊の男達であった。

「お久しぶりね・ ・ 、あなた達のことは、あれ以来一度も忘れた事はなかったわ・ ・ 」
静かに中島の目を見つめながら言った。

最初中島には誰か思い出せないようであった。

無理もない、あの時は長い髪を両側に三つ編みのお下げにした18歳になったばかりの幼さの残る少女であったが、あれから4年の間に、幾度かの男女の愛を経験した、すっかり成熟した大人の女になっていたのだから。

ふと、中島が電気に打たれたかのように驚いた声を上げた。

「お前は、あの時の金田伯爵家の末娘か! ?」

小島も大島も同時に思い出したのか、まじまじと順子の顔を見つめた。

「その元伯爵家の末娘が何の用があって、のこのこやって来た?まさか復讐に来たのじゃないだろうな?」

中島が驚きの隠せない顔で聞いて来た。

「そうよ、復讐に来たのよ。」

順子がきっぱりと言うのを聞いて、青くなって小島達と互いに顔を見交わした。

中島達の闇組織は暴力で他の闇組織が隠匿した物資を強奪したりしていたので、他の組から烈しい恨みを買っていた。

いつ他の組織から襲撃を受けても不思議では無く、順子が他の組を手引きしてやって来たのでは無いか、あるいは金田伯爵と使用人を殺害した悪事を暴くため警察を引き連れて自分達を逮捕しに来たのではないかと、不安にかられ、表を警戒するように若い組員に命じた。

一渡り表を見張ってきた組員が、おかしい様子はないと報告すると、中島達は余裕を取り戻したようであった。

そして、事務所にいる全員で取り囲み襲いかかれば、こんな小娘一人を捌りものにするのは、造作も無いと薄笑いを浮かべて椅子から立ち上がった。

順子を輪のように取り囲む男達の中には、順子の尻穴を拡張して弄んだ、牛田軍曹の姿があった。

牛田は隣に立つ若い男に、四本の指を根元まで易々と尻穴にねじ込むことが出来るまで順子の肛門を拡張したことがあることを卑猥な笑い声を上げて自慢げに話していた。

もうあと少し時間があれば、拳を肛門の内部に突き入れることが出来ていただろうと話したが、肛門性交癖のある牛田にとって、再び順子の肛門を思う存分拡張出来るかも知れないと云うチャンスが訪れて、粘っこい目付きでジロジロと眺め回しながら舌なめずりをした。

その話を聞かされた、順子の見覚えの無い若い男は、この華奢な体つきの女が、男の肉棒を易々と受け入れるような柔軟な肛門を持っているなんて信じられないという顔つきで順子の顔をじっくりと見て、次に良く熟れた尻をまじまじと見つめた。

順子を取り囲む男達の包囲の輪がジリジリと狭まってきた時、突然順子がブラウスのボタンに指をかけてボタンを外し始めた。

男達は順子の意外な行動にあっけにとられたように身動きを止めて、順子の次の行動を見守った。

ボタンを全部外し終わり、前が開いたブラウスの下から白いシュミーズが露出した。

盛夏を間近に迎え、白い半袖のブラウスを脱ぎ捨て、床に落とすと下は膝までのタイトスカートとシュミーズだけの姿となった。スカートのホックを白く長いしなやかな指で外す

と、腰から滑るようにスカートが流れ、足下に落ちた。

後には白いシュミーズを纏うだけの若い女の姿があった。

薄い生地を通して順子の白い体がうっすらと透けて見えた。

男達は生唾を飲み込んで若い女の半裸姿を穴が開くように見つめていた。

順子は挑発するような目つきで男達を眺めながら、シュミーズの肩紐に手を掛けた。

ゆっくりとした動作で、最初に右肩の肩紐を外し、次に左肩の肩紐を外すと、支えを失ったシュミーズは滑らかな若い女の柔肌を滑るように落下して行った。

男達がオオッと驚きの声を上げて、剥き出しとなった裸身を見つめた。

シュミーズの下は最近の日本の若い女もアメリカ女をまねて身に着け始めたと言う、薄いピンク色のブラジャーとパンティと呼ばれる下着を身に着けていた。

着痩せして見えた洋服姿からは想像出来なかった、生クリームのようなしっとりとした柔らかな脂肪を置いた意外にも豊満な裸身を隠すには、それは余りにも小さな布切れであり、はち切れるような若い体のラインを強調する下着姿を見慣れぬ男達は、ある意味、全裸姿を見るより扇情的な欲望を煽り立てられた。

終戦の時に蹂躪した順子はまだ幼さの残る小娘であったが、四年の歳月の間に、固い蕾は美しい大輪の花に開花したように、体はすっかり成熟し、豊かな胸や腰の張りは母親の静江夫人を思い出させた。

中島には静江夫人の柔らかく脂肪の乗った肉感的な肉体を思う存分犯した時の感情が戻って来ていた。

続いて順子は躊躇うことなく、背中に手を回してブラジャーのホックを外した。

僅かばかりの布に押し込められていた豊かな乳房がはじけるように男達の目の前に現れた。

固唾を飲んで見守る男達が思わずオオッと低い声を上げた。

洋梨を思わせるような豊かな重そうな乳房の先に可憐なピンクの乳首が上を向いてツンと屹立していた。

男達の熱い視線を全く無視しているのか、それとも獣じみた飢えた視線で睨み付ける男達をわざと挑発するかのよう、羞恥の素振りも見せず、続いてパンティに手を掛けると、そのままゆっくりと太腿までズリ下げた。

剥き出しになった股間に目をやった男達がエエーッ！と驚きの声を上げた。

豊かに脂肪を載せた真っ白い股の間には、それを覆い隠すべき春草は無く、ふっくらと盛り上がった柔かな丘の真下からたっぷりと蜜をたたえた白桃の様な秘肉を割るように縦に

一文字の蠱惑的な溝が刻まれていたのだった。

以前金田伯爵家の母娘を犯し、面白半分に股間の毛を剃り上げたことはあったが、順子も本来その部分は春草で覆われているはずだ？・・・もしかするとここに来る前に自分で剃り上げたのか！？と、艶々と輝くような若い女のスベスベした股間の柔肉のたたずまいを注視しながら中島達は訝った。

男達の哑然とする表情を無視するように、順子は立ったまま片脚を上げてパンティを抜き取った。その際に、瞬間ではあったが、擡げた大腿の^{あわい}間からピンク色をした成熟した性器の内部が男達の目に映った。

今や男達の輪の中で、黒いハイヒールを履いただけの糸纏わぬ全裸となった順子は、剥き出しの乳房や股間を手で隠そうともせず正立し、艶々と輝くような裸身を男達の鑑賞に晒していた。

そして、その後、中島を睨み据えるような目をして、さっと顔を振って長い黒髪を後ろにやると、ゆっくりとした足取りで豊かに熟した大きな尻を振りながら中島の方に全裸の体を隠すことなく歩み寄った・・・。

突然、浦川侯爵家の母娘が甲高い悲鳴を上げたので、順子は再び現実に戻された。

女を貪る20人ほどの男が蠢く部屋は、人いきれで異常に暑くなり、絶えかねた男達がカーテンを開けて窓を開き、外の風を取り込んだのであった。

明るい日の光が突然室内に差し込み、そのため今まで薄らボンヤリとしか見えなかった、凄まじい男女の交合の姿があからさまに浦川侯爵家の母娘の目に焼き付くことになったのだ。

そして、まさかと思っていた、男達に挟まれ蹂躪され犯されている女が、この家の主人である順子であることが分かり、浦川侯爵家の母娘は「順子様！順子様」と悲鳴のような声を立てた。

突然キューと怪鳥が鳴くような甲高い声を上げて、明子が後ろに仰け反った。あからさまに目の前に見る露骨な男女の愛欲図にショックを受けて、貴族の令嬢育ちの弱い心が絶えかねたのか、意識を失ってしまったようだった。慌てて母親と姉が妹の体を支えた。

「これ位で気を失うのは早すぎる、お前達はこれから私たちが味わってきたような地獄の苦しみを味わうのだ・・・」

順子は三人の男に同時に責められ、朦朧とする意識の中で明子が気を失う状況をうっすらと見ていた。

苦痛と快感に煽り立てられ今や本能だけで蠢く肉体の朦朧とする意識の中で、再び回想が蘇って来た。

「お前は復讐するためにやって来たと言ったな・・・」

中島が順子の覆い隠す物の無いスベスベの女肉に真下からおのれの肉塊を突き立て、リズムカルに腰を振り立て、甘美な肉壺に押し入れた分身を上下させながら聞いた。

「そうよ！復讐するためにやって来たのよ！」

順子は、革張りの大きな肘掛け椅子に腰掛ける中島の正面に大きく股を開いて跨っていた。そして、中島の腰の動きに呼応するように腰を振っていた。

順子の正面には中島の冷酷な顔があった。

「これで、復讐になるのか？お前は俺たちが憎いんじゃないか？」

真下から股間を突き立てられ苦悶の表情を浮かべる順子の顔をまじまじと見つめながら再び聞いた。

4年ぶりに中島の物を自分の秘孔奥深くに受けて、嫌悪感と共に不思議な快感のような物を順子は感じ始めていた。中島の物を胎内に含み思い切り食い絞め、豊かな愛液で濡らしつつ、気がそぞろになって行くのを感じていた。

あれ以来、戦後の荒廃した社会を生き抜くために多くの男達と接して身に着けた、順子の卓越したその部分の能力に時々中島が快感に顔を歪ませるのが見えた。

「そうよ、憎いわよ！あなた達は八つ裂きにしても飽き足らない・・・しかし、例え、あなた達を殺しても私の心は癒されることは無いわ！なぜ私たち家族だけがこんな酷い目に遭わなければいけないの！？・・・地獄を見せてやる！・・・世界中の女達に私たち家族が味わった地獄を味合わせなければ私の心が癒される事は無いわ！・・・」

呪いの言葉を吐き続けながら、憎み見ても余りある男に体を預けるという矛盾に満ちた不思議な陶酔感に巻き上げられ、中島の上に乗る、憑かれた様に腰を激しく振り立てる順子の姿がそこにあった。

順子が股間に力を入れて、中島の物を締め上げる度に、もたげた尻の奥に菊の花がヒクヒクと収縮を見せていた。

その様子に魅せられたように小島がフラフラと順子の背後に近づくと、いきなりズボンを

下ろし、おのれの分身を取り出すのももどかしく、そのいきり立った物を順子の後ろの穴に突き立てた。

前と後ろを深々と二人の男に突き立てられて、一瞬電流が流れたように目の前が真っ白になり、体を仰け反らせるとそのまま激しく絶頂を極めたー

半開きになった口から泡を吹くように白く粘っこい精液を垂らし、ぽっかりと大きく開いた股間の二つの穴からも何人もの男達に注ぎ込まれた粘っこい精液を溢れさせて、意識を失って床に倒れ伏す順子を見つめながら男達が呟いた。

「ふふ、元伯爵家のご令嬢も完全にグロッキーだな。」

「何しろ3時間近く穴という穴を全て突き立てられ通しだったからな。見ろよ二つの穴がパッキリ開いたまま閉じないぜ・・・」

激しい男達の責めを休むことなく一身に受け、動かなくなった順子の裸身を今や冷静な判断力も喪失してしまった浦川侯爵家の母娘が、恐怖に駆られた目で食い入る様に見つめていた。

意識を完全に失ってしまった順子は、女として絶対に人に見られたくない筈の柔らかな肉を置いた太股をしどけなく開いたまま大理石の床の上に横たわっていた。

そして、その大きく開いたままの股の間に在る最も女性を形作る部分は、それを覆い隠すべき春草が綺麗に剃毛されていたため、充血して赤く染まった微細な襞をさらけ出し、その奥に汗と淫液と精液に塗れて艶々と輝る粘膜が露出し、男達の言う二つの穴が、隠しようも無く無残な姿を晒し、自発的に閉じる機能も失われた様に大きく開口したまま、そのグロテスクな女の内部をマザマザと侯爵家の母娘に見せ付けていた。

死んだように身動きしない順子を見て、男達に責められ続けてそのまま死んでしまったのでは無いかと心配した母娘が、必死になって「順子様！、順子様！」と呼びかけた。

長時間連続して男達の太い物を受け入れていた、股間の二つの穴はすっかり弛緩して、閉じる気配も無く、ポツカリと開いた孔からは臓物の様な赤黒い内部構造を覗かせていた。そして大きく寛いだ虚ろからは絶えること無く、男達が注ぎ込んだ大量の白濁した液体を溢れさせていた。

綺麗に剃毛され、スベスベした股間の素肌を晒していたため、その二つの羞恥の器官の状態が覆い隠す物も無くはっきりと見て取れた。

「さて、筋肉がすっかり柔らかくなっている今の内にもう一仕事してしまおうか・・・」

と、一人の男が言うと、奥から何やら木で出来た踏み台のようなものを持って来た。それは跳び箱の上段の部分を少し小さくしたような形をした台であった。

男達は、完全に意識を失い、糸の切れたマリオネットのように、ぐにゃぐにゃになった順子の肩を掴み引き起こすと、その跳び箱のような台に俯せに覆い被さるように載せ、股を大きく広げさせた。

小さな台であるので、脚や上半身は床に着き、お尻だけが真上を向くような、女にとっては堪らない羞恥を呼ぶような姿勢で台に固定されてしまった。

殊更、浦川家の母娘に見せ付けるかのように、順子の尻が母娘の方に向くように台が置かれていた。

豊かなボリュームを持った順子の双臀が母娘の間近に位置し、その尻の割れ目には、未だ閉じることの無い二つの大きな穴が、複雑な内部の構造を見せ付けるように開花していた。

「よがりすぎて舌を噛まないよう、猿轡を噛ませておけ」

と、一人の男が命令したのを受けて若い男が意識の無い順子の口をこじ開けると短い棒状の物を噛ませた。棒の両端には革ベルトが付いており順子の後頭部で縛り上げた。

男が太くて長い木の棒のような物を手に取って、ニヤニヤと薄ら笑いを浮かべながら浦川家の母娘に見せ付けるように差し出した。

それは巨大なこけし人形であった。

胴の部分の直径は5センチ位、頭の部分の直径は6センチ以上有りそうであった。

浦川家の女達には、本来鑑賞のための民芸品である筈の、そのこけし人形が何を意味するのか理解出来ず、じっと男の動作を見守った。

男は女達の鼻先まで近づけて、その人形の巨大さを良く眺めさせると、次にその人形の頭を、台の上で大きく股を広げ双臀を天井に向けて横たわる、意識の無い順子の尻穴にあてがったのだった。

男達の意図を知った女達は、「止めて下さい！そんな事をしたら順子様が死んでしまいます！」と悲鳴のような声で叫び、手を伸ばそうとした。

母娘の背後に立つ男達が、身動きしないように女達の肩を押さえた。

大きく開いたままの順子の肛門であったが、こけしの頭の直径はそれ以上の大きさがあったので、容易には入らず、人形を手を持つ男は、力任せにこけしの頭を菊花に押し付け、ねじ回し、無理矢理挿入しようと努めた。

尻穴を襲う激痛に順子の意識が戻り、抗議するように猿轡を詰められた口から悲鳴を上げ、木台に固定された足を藻掻かせ、後ろ手に縛られた手を固く握り締めた。

その時ズボッというような音を立てて、こけしの頭が順子の腸内に埋没した。

肛門の開口部を濡らしていた夥しい男達の愛液が潤滑油の役目を果たして、子供の握り拳程もあるこけしの頭をスルッと内部に滑り込ませたのであった。

突然肛口を押し開けて直腸内部を襲った異物の引き起こす激痛に順子が猿轡を詰められた口からくぐもった悲鳴を上げた。それよりも浦川家の母娘の方がこの悲惨な光景に甲高い悲鳴を上げた。

「へへ、なんだかんだ言ってもご令嬢の見事な尻穴は、この大きなこけしの頭を飲み込んだじゃないか。」

こけし人形の頭の部分は完全に腸内に没入し、胴体の部分も数センチ以上肛門内にめり込み、その余りの太さに菊花の皺は完全に伸びきり、艶々したピンク色の粘膜を押し広げ、人形の胴の部分の隙間無くピッタリと啜え込んでいた。この無残なたたずまいに、こけし人形を無理矢理ねじ込んだ男の方が恐怖感を感じたかのように、流れ出す額の汗を拭った。

「どうだ？痛いかな？それとも気持ちが良いかな？・・・何とか言ってみろよ」と、地面に突き立てられた太い杭のように、巨大なこけしを深々と尻穴に突き立てられたままのボリュームのある双臀を男が平手でピシャピシャと叩いた。

こけし人形は順子の尻から20センチ以上も胴体が飛び出していたが、ぴっちり順子の体内に啜え込まれているため男が手を離しても落ちることはなく、苦痛に直腸が痙攣するためか、ピクピクとその先端が蠢いており、見る者に卑猥な感慨を与えた。

「どうだ？じっとしたままでは面白く無いだろう？少し動かして欲しいかな？」

男が床に押し当てた順子の顔を覗き込むように尋ねた。

ただ尻穴に啜えているだけでも、その余りの太さにジンジンするような熱を持った痛みを絶え間なく感じているのに、この上それを前後に動かされたらどうなるだろう、と思うと恐怖に駆られたような悲鳴を上げて、イヤイヤをするように激しく首を振った。

「がっちり啜え込んで動かないな」

男がこけしの胴体を掴んで動かそうとするが、隙間無く腸内に食い込んだこけしは男が力を入れても容易に動かない様子であった。

男は更に力を込めて、少しずつ前後に動かし始めた。

男がこけしを体内に押し込むと、肛門の周りの粘膜がこけしの胴体に引きずられてすり鉢状に体内に引き込まれ、こけしを引き出すと周囲の肉もそれにつられて引き出されテントのように盛り上がった。

腸壁を引きずる苦痛に、順子が顔にビッショリと汗をかきながら苦悶した。

ガッチリと尻穴に食い込んでしまい、このままでは梃子でも動かないように見えたので、男が刷毛に油を吸わせて、こけしを咥え込む尻穴の周囲に塗り立てた。

微妙な神経が集まる肛門の周囲を柔らかく刷毛でなぞられて、順子がビクッビクッと体を振るわせた。

男がこけしの胴体に潤滑の油を塗したこともあり、また大きく押し広げられた肛門も次第にこの緊張に慣れて来たのか、やがて、動きが滑らかになり、男の操作するままにこけしが深く浅く順子の体内を出入りするようになってきた。

「なんだかんだ言っても、貴族のお姫様のケツ穴はこの大きなこけしをスムーズに受け入れるようになって来たじゃないか？」

男が額に汗を浮かべながら、卑猥な笑みを唇に浮かべて呟いた。

こけし人形の滑らかな動きが、当初占めていた苦痛と打って代わって何やら怪しげな快感を順子にもたらししていた。

巨大なこけしの頭部分が擦れる腸壁のドクドクとした血管の鼓動が、下腹部全体に響き渡り、女性の神経が集中した芽の部分勃起させ、花芯が潤って来るのを感じていた。

それに気付いた男が、こけしを抽送する手を休めて、牝芯に在る大きく屹立した突起に指先を這わせた。

突然敏感な部分を指先でなぞられて、ヒィと小さく悲鳴を上げて体を硬直させた。

「へへ、お前は尻穴を騷られるのが、本当に気持ちが良いんだな？商売女でもこんな所を騷られて感じないぜ！この恥知らずな女め！こんなに露を溢れさせてやがるぜ！」

男は右手の親指で勃起を摩りながら、左手の指を愛液を溢れさせる華洞に差し入れた。

順子の陰部は最大限に開ききった肛門により、膣口を押しつぶし指一本受け入れるだけで精一杯な状態であった。巨大なこけしによりはち切れそうになっている後門をそのままにして、豊かな潤いを示す前門に無理矢理指を差し入れられてまさぐられ、順子は一瞬気が遠くなりかけた。

男は、前門から薄い粘膜の壁一枚を通して、本来排泄のためにそなわっている管をはち切れそうに満たしているこけしの状態を確かめるかのように膣壁越しに暫くなぞった後、そ

のまま指を抜き取ると、愛液にたっぷり濡れた指を、誇示するように浦川家の母娘に見せ付けた。

膣内をまさぐっていた人差し指と親指を合わせて開くとその間にキラキラ光る一筋の粘液の糸が出来た。

女達は信じられないと言うような恐怖の籠もった目で艶々と濡れ輝る指先を見つめた。

男は再び烈しくこけしの抽送を始めた。

この烈しい苦痛を超越した快感が、今や順子を襲っていた。

ああ、このままお尻でイッてしまう・・・と観念した瞬間、男は人形を引き出し、ポンと大きな音をさせて順子の体内から引き抜いてしまった。

後には絶頂をお預けされ、情念の炎を燃え上がらせたまま、鎮火する機会を逃してズブズブと残り火を燃え立たせたままの順子がかしげにブルブルと体を震わせていた。

こけし人形を抜き取られた跡には、人形の直径そのものの大きな孔が開き充血した赤黒い腸内の様子を見せていた。

普通の女を相手にしていたら見ることも出来ないような、大きく開いたままの開孔部を一目見ようと男達が、順子を取り巻き、その大きく開いて赤黒い内部を覗かせる肉の祠を血走った目で見詰めた。

赤線街の娼婦でも見ることは出来ないような、恥ずかしい姿を眺め回しながら男達が次々と聞くに堪えないような卑猥な言葉を並べ立て、互いに肩を叩いて笑い合った。

男達や浦川家の母娘の前に惨めな姿を晒す羞恥に、拘束台にガッチリと縛りつけられ身動き出来ない体を悶えさせた。

「おい！誰か懐中電灯を持ってこい！」

ポツカリと開いた肉の虚ろを覗き込む男達が、その内部の佇まいを更に詳細に観察しようと懐中電灯を持って来させた。

「おお！見えるぞ、見えるぞ！中の様子がはっきりと見えるぞ！」

懐中電灯を手に血走った目で覗き込む男が歓声を上げた。

懐中電灯の光が腸内の柔らかな粘膜を炙る様な錯覚を覚えて、順子が身悶えた。

大きく開口した腸内に外気が入り込み、上気した体温により腸内の独特の臭いを周囲に立ち昇り始めていた。

「へへ、ウンコの臭いがするぜ。高貴なお姫様でも臭いウンコをこの穴から放り出すんだな？」と、最初の男と交代した男が、渡された懐中電灯で照らしながら鼻を大きく開いた

孔に近づけ、その部分から発する異臭をクンクン嗅ぎながら言った。

そんな恥ずかしい臭いを嗅がないでと抗議するように、順子は床に接する上気した顔を必死に振りたてていた。

「淑女の嗜みだ。そんな下品な臭いをまき散らしていたんでは、しょうが無いだろう。」

と、リーダー格の男が香水の入った瓶を持ってくると男に手渡した。

男は香水のスプレーの吹き出し口を大きく剥き出しになった腸内に向けると、香水の瓶から垂れていたポンプのゴム球を握り潰した。

香水がノズルの先から霧のように噴き出され、たちまち芳香が周囲に広がった。

巨大なこけしに責められて、傷ついていた腸壁が香水に含まれるアルコール分により刺激されて順子が激しい悲鳴を上げた。

「さて、また続きを始めようか・・・」

男が別のこけし人形を取り出した。

今度のこけしは前のこけしより更に一回り大きな物であった。

男はこけしの頭や胴体に油を塗すと再び、順子の尻穴にあてがった。

前よりも一層太いこけしの侵入を順子の肛門を構成する筋肉は反射的に拒んだが、男の巧みな動作により、いなされて筋肉の緊張が一瞬緩んだ隙を逃さず、強い力により再びズンと体内に埋め込まれてしまった。

その限界に達していた肛門の筋肉を無理矢理押し開き、直腸深く突き立てられた強い衝撃に一瞬順子の背が仰け反り、呼吸が止まるのが分かった。

その最初の強烈な刺激が治まり、華奢な体で尻穴に打ち込まれた激痛を受容しようとするかのように額に玉の汗を浮かべ、眉根に皺を寄せて、ハアハアと荒い息を吐き始めたのを見計らって男が再びゆっくりとこけしをゆっくりと操作し始めた。

そして、再び順子はその大きさに順応し、苦痛を快感に変えて、絶頂を迎える寸前まで責め立てると、再び体内から音を立てて抜き取ってしまった。

激しい苦痛とそれが転化した凄まじい快感による絶頂をお預けされたままのストレスで、台の上で順子は涙を浮かべたまま激しく頭を振り、臀をもどかしげに振り続けていた。

苦しげに息をする口に固く食い込まされた猿轡の間からは唾液が溢れ床を塗らしていた。

そして開いたままの花園の華洞からは幾条もの粘い透明な液が床に糸を引いて垂れていた。

陶器で出来た人形のような日頃の順子の姿からは想像も出来ないほど、いまや順子の肛門

は大きく開き、直径6センチ以上は有ろうかと言うほどの大きな丸い開口を臀部の中心に見せていた。

少し、間をおいてから男は再び新たなこけし人形を手を取った。それは更に大きく、頭の部分は男の握り拳ほどもありそうであった。

浦川家の女達は最早涙も涸れ果て、悲鳴を上げる声も無くしたのか、ただガクガクと体を震わせて、呆然とその巨大過ぎるこけし人形の頭を見つめていた。

男は再びその巨大な丸い頭を、順子の尻穴に押し付けた。その巨大過ぎる直径に順子の肛門は固く拒んだが、男はまたもや体内に埋没させることに成功した。

その瞬間順子はギエッと言うような低い悲鳴を上げて四肢を硬直させた。

浦川家の女達も震えながら、この凄まじい光景を呆然と眺め続けた。

その巨大なこけしは順子の快感を呼び起こすには、余りにも大き過ぎたのか、男が人形を動かす度に、順子は顔に皺を寄せて苦しそうな喘ぎ声を上げた。

苦しい責め苦の時間が長く続き、苦痛にのたうち回る順子の体力が限界を超えた頃、漸く男はこけし人形を抜き取った。

跡には更に大きな孔となって残った。

こけしを抜き取られても依然その巨大な圧迫感が下半身に残るのか、順子はまるで水を浴びせられたように全身にビッショリと汗をかいて台の上で苦しげに息を吐き続けていた。

男は順子の背後に仁王立ちとなり、そんな順子に様子を見下ろしながら、次に自らからの右腕に油を塗り始めた。

男は腰を下ろすと、油に塗れてテカテカ輝る右手を順子の尻穴に押し付けた。

それを見た女達が男の次の行動の目的に気付いたのか、その貴族育ちの女達の想像を絶する行為に蒼白となり悲鳴を上げ、「お願いします！もう止めて下さい！」と絶叫した。

悲鳴を上げる女達を無視して、男のすぼめた四本の指先が、見る見る順子の尻に出来た祠にめり込んで行った。

そして四本の指の付け根までが見る見るその暗い影を落とす空洞の内部にその姿を隠し、そのまま親指の指先も含めた五本の指が順子の体内に埋没した。

五本の指に押し広げられ、順子の肛口は周囲の皺を完全に押し延ばされ、これ以上無い程大きく開いていた。

後門から襲い来る激痛に、床に押し付けられた順子の顔は、水を浴びせられた様に額に汗

を浮かべ、苦しげに眉根を寄せ、噛み込まされた猿轡をギリギリと噛みしめていた。

そして男の腕力に抵抗するようにビッシヨリと汗を浮かべた順子の双臀がブルブルと震えていた。

今や浦川家の女達は声も上げず、目をかっと見開いて、憑かれたように、この異様な光景を見続けていた。

ここが先途と男は力を緩めず、親指の付け根の掌の最も太くなる部分を押したり引いたりしながら、ゆっくりと、しかし更に力を込めながら懸命に押し込もうとしていた。

浦川家の女達が見るに堪えられず下を向いた瞬間、突如、「入った！入ったぞ！」と男が嬉しそうに大きな声を上げた。

ふと顔を上げると、男の太い手首がまるで順子の肛口から生えたようにすっぽりと咥え込まれており、右手手首の根元までが順子の肛門内に姿を隠していた。

男は温かく血管がドクドクする直腸内で拳を回転させたり、指を握り締めたり、大きく指を開いたりして腸内を掻き回して、その感触を楽しんでいるかのようであった。

自分の腸内を刺激する、激しい男の動きに終に堪え切れなくなった順子は、ギェ！と蝦蟇蛙のような妙齡な娘とも思われないような低い声を発すると、そのまま白目を剥いて、口から泡を出して意識を失ってしまった。

その刹那、順子の柔らかな花卉がそっと開きツツと愛液が床に滴り落ちた。

男は満足したように、手を抜き出すと、その汚れた手を浦川家の女達に見せ付けた。

女達はただガタガタを震えてその手をじっと見つめた。

やがて女達は、この順子の尻穴を責めていた男が、牛田と言う名前の、女との肛交が大好きな残酷な男であることを知ることになる。

意識を完全に失い、死んだようにぐったりとしている順子の体から、高手小手に厳しく縛っていた縄が解かれ、猿轡も外された。

それでも意識を取り戻さない順子を男達は、部屋の隅まで引きずって行くと、全裸のまま大理石の床の上に放置した。

この家の女主人が退場し、客人だけとなった部屋で、全裸の男達が浦川家の女達を取り囲むように立った。

男達全員は相変わらず全裸のままで、何かを期待する様に股間の醜い肉塊は真上に向かって高々と屹立していた。

何人もの男達の男性器から立ち昇る獣じみた臭気と熱気が部屋の中に立ちこもっていた。

「本日、お前達をお茶に誘ったのは、実は俺達だ・・・」

女達の正面に仁王立ちしたリーダー格の男が口を開いた。

女達は、この男が中島という名前であることを後に知る。

「もっとも、紅茶でもお濃茶でもない、もっと濃いザーメン茶だがな・・・」と中島が言うと、取り囲む男達が面白そうに笑い声を上げた。

「さて、これからお前達にザーメン茶を振る舞って上げようか・・・口から飲むだけでは無く、下の口にも俺たち全員で、たっぷりとご馳走して上げような・・・」と、中島がニヤニヤ笑いながら声を掛けたので、女達を取り囲む男達は、包囲の輪を縮めて、一斉に飛びかかり、その薄い夏物の衣類を剥ぎ取ろうと身構えた。

「お許し下さい！」

晴子が恐怖に堪えかねたように口を開いた。

「娘は菱井銀行の頭取のご子息との縁談が決まっていますのです！この縁談が破談になったら浦川家は破産してしまいます！どうかお慈悲をお掛け下さい。」

と、涙を流しながら悲痛な声でこの残酷な男達に哀願するのであった。

「そうかい？それは御目出度う。それなら俺たちで腕に撚りを掛けて、その銀行家のボンボンが離れられないような床上手な女に仕上げてやろうじゃないか！」

男達は晴子の悲痛な叫びが耳に届かないかのように冷酷に受け流した。

今にも娘達に手を下そうとするかの様な男達の様子に堪えかねたように、

「止めて下さい。私が皆様のお相手をします・・・ですから娘には手を触れないで下さい！」

晴子が男達を睨みながら毅然として言い放った。

「お前が一人で娘達の分も俺たちの責めを受けようと言うのか？」

晴子の必死の形相を見ながら中島が聞くと、恐怖と羞恥にガタガタを体を震わせながらではあったが、晴子は毅然とした態度でコックリと大きく肯いた。

「お母様！」と不安に駆られた二人の娘が母親にひしと抱きついた。

晴子は娘達の不安を少しでも軽くするかの様に、両手で娘達を抱いた。

中島は晴子の必死の態度に少し考え込むような間を置いてから、

「大年増のお前に、若い娘に負けないような魅力が在ると言うのか？年取って弛んだ体を見せられても俺たちの食指は動かないぜ・・・先ず体を見せて見ろ。」と厭らしい目の色をしながら、冷たく言い放った。

「分かりました。」と、一言言うと晴子は男達の輪の中でゆっくりと立ち上がった。

「止めて、お母様！」二人の娘が泣きながら母親に取りすがった。

「良いのよ、あなた達のことは私が守るから・・・」

と、二人の娘に優しく声を掛けると、キッとした目で男達を睨み付けた。

歳は40歳を幾つか過ぎているが、侯爵夫人としての気品が身についている。

体の大きさも大き過ぎず小さ過ぎずで、全体のプロポーションも日本人にしては非常に良いと、夏の訪問着の上から内部を見通すように中島が全体を眺めた。

「それでは、着ている物を全部脱いでその体を見せて貰おうか？」

中島が顎を手で摩りながら命じた。

「つまらない体だったら直ぐに娘達を裸に剥き上げるからな！」

これまで夫以外に裸身を見せた事が無い、そして夫にさえも暗くした部屋でしか相手をしたことが無い晴子にとって、明るい陽の光に照らされ男達の監視の下で自らの裸身を曝すなど気が遠くなるほどの恥ずかしさであった。

しかし今は何としてもこの凶悪な男達の毒牙から娘達を守らなければならないという必死の思いで、断崖から身を投げ出す思いで、一步を踏み出そうとしていたのだった。

紫の組紐で織り上げた、高価な帯締めをキュキュと衣擦れの音をさせながら解くと、手を背後に回して錦糸を織り込んだ豪華な帯を解き始めた。

長い帯がとぐろを巻くように大理石の床に落下した。

白地に淡く若草を染め上げた夏の訪問着が支えを失い、前がはだけで、その下の薄く浅黄色に染めた長襦袢が男達の目に触れた。

中島が顎を杓って、早く着物を脱ぐように促した。

これを受けて晴子夫人が鼻を吸いながら、訪問着を脱ぎ去った。

柔らかな絹に麻を織り込んだ夏服の訪問着が肩から滑り落ちるように床の上に落下した。

下には長襦袢だけの姿となった。

薄い浅黄色の長襦袢を通して晴子夫人の体の線が一層良く判るようになった。

長襦袢を通して見る限り体の崩れは見られず、歳の割に張りの在る良い体をしていると思った。

着物を優雅に着こなしていた外観から、柳腰の美熟女と見ていたが、ほっそりとした体つきに似合わず大きな乳房をしているようであった。

男達の喉がゴクリと鳴った。

早く着物を脱げと言うような男達の無言の目線を受けて、全て思いを断ち切るように、意を決して、紐を解き長襦袢をはだけ、脱ぎ去った。

後には白い半襦袢と鴝色の湯文字が体を覆うだけとなった。

男達の熱い視線を全身に感じて、羞恥に全身を朱に染めながら、これ以上自分の手で脱ぐこともままならなくなったように体を小さく前屈みにして立ち尽くす夫人であった。

ジリジリとして次の動作に移らない夫人に業を煮やして、

「早く肌襦袢と腰の物を取って素っ裸になるんだ！」男達が声を上げた。

「お願いします！部屋を暗くして下さい！」

夫にさえも明るい光の下で裸身を曝したことの無い夫人が羞恥に堪えかねて、涙を浮かべて必死に哀願した。

「ならねー！娘に代わりをさせようか？」

中島が大声を上げて脅した。

娘達が「お母様止めて！」と悲鳴のような声を上げた。

夫人は諦めたように半襦袢に手を掛けて脱ぎ去り、裸の上半身を男達の目に晒した。

半襦袢を脱ぐと直ぐさま両手で白い乳房を隠したが、男達は一瞬夫人の白くふくよかな乳房を目に焼き付けた。

「早く腰の布切れも取るんだよ！」

中島が大声で命じた。

野卑な男達の前に乳房を晒すだけでも上流階級育ちの夫人には気も狂いそうに成る程恥ずかしいことであったが、更に女として最も大切な所を覆い隠している衣類を脱ぎ去るように命じられて、今にも意識が白く飛んでしまいそうであった。

ただ今はこの身を犠牲にして娘達を守らなければならないと云う、母性本能だけが狂い出しそうになる意識を食い止めていた。

何もかも諦めたかのように、夫人は乳房を覆っていた両手を外し腰巻きの紐に指をかけるのと羞恥に震える指で解き始めた。ハラリと鴝色の湯文字が腰から滑り落ち、最早夫人の体を隠す衣類は一切なくなってしまった。

右手で股間を隠し、左手で乳房を隠し、体を縮めるようにして少しでも男の視線を遮ろうとしている夫人がいた。

「手を退けて、そのおっぱいと、股の間を見せるんだ！」

手にした竹刀で、夫人の良く張った尻を叩き付けて、大きな声で怒鳴りつけた。

竹刀がタツプリとした脂肪を置いた尻の上で撥ね、柔らかな尻の肉がブルンと波打った。憲兵時代に何度も被疑者を拷問に掛け、容赦なく打ち据えてきた中島は手加減する事無く夫人の双臀を捉えた。

いきなり、強烈な打撃を受けた夫人は、その瞬間激しい痛みに一瞬頭が白くなり、喉の奥から悲鳴を上げた。

「いいか？これは女郎の顔見せと同じだ！少しでも俺たちの気に入らなかったら、直ぐに娘に代わりをさせるからな！」

と、夫人を脅しつけた。

中島から与えられた激痛に恐怖を憶え、夫人は唇を噛みしめながら、おずおずと股間から手を退けた。

男達の目に意外にも濃密に股間を覆う下草の姿が映った。

「何だ、これは？モジャモジャじゃないか！」

「貴様！貴婦人の嗜みを知らんのか？下の毛を手入れしたことは無いのか？」

と、夫人の下腹部全体を黒々と三角形に覆う濃密な繁みを指さして散々揶揄した。

男達の揶揄を受けて羞恥で腰を屈めようとするのを

「何をそんなへっぴり腰をしておる！もっと胸を張ってピンと立たんか！」と、男達が咎めた。

中島から臀を鞭打たれ、男達に命じられて、無理矢理気を付けの姿勢を取らされた。

両腕は体の両横に着けさせられ、手で乳房を隠すことも股間を隠すことも出来ず、男達の監視の中で直立不動の姿勢を取らされていた。

男達の卑猥な視線に曝される夫人は恥ずかしさで全身を赤く染めブルブルと震えていた。

隠すことを禁じられ、屈辱と羞恥で涙をすすり上げる夫人の姿を楽しそうに、崩れを見せていない白い豊かな乳房や良く張った腰回りや漆黒の下草に覆われた股間を穴の開くほど眺め続けるのであった。

そんな母親の姿を見かねて、娘達は俯いて嗚咽を続けていた。

「股の間の大事な所が見得んぞ！もっと股を広げろ！」

男達が野卑な命令を続けた。

「厭なら娘達に代わりをさせるぞ！」

と、脅かされて、気が遠くなりそうな羞恥をぐっと堪えて、直立姿勢から男達の眼前に脚を左右に広げ始めた。

羞恥でふとすると股を閉じそうになるが、男達に命じられて、男達が良いというまで大きく股間を広げさせられた。

ギラギラする血走った目付きで凝視する男達がグルリと取り囲む中心に立った夫人は人の字型に大きく両脚を広げていた。

男達は、一斉に夫人の股間に躍り寄り、腰を下ろして、その開かれた股間を下方から注視しようとした。

娘達が恐怖に怯えて互いに抱き締め合い、泣き声を上げていた。

「モジャが邪魔で肝心なお宝が良く見得んぞ！貴様両指で良く搔き分けて中身を見せるんだ！」

濃密な陰毛に隠されて、貴族夫人の女性器を眺めることが出来ないことに腹を立てた男達が、何と夫人自らの指で陰毛を搔き分けて女性器を露わにするように命じたのだ。

「イヤー！お願いします。もう許して！」

これまでの行為だけでも気が変になりそうな程の恥ずかしさであったのに、更にこの上、自らの努力で女体の中で最も恥ずかしい部分を野卑な男達の目に晒すように命令されて、堪えきれず悲鳴を上げた。

娘達も堪えかねて悲鳴の様な鳴き声を上げた。

ここで再び娘に代わりをさせるぞと脅され、懊悩の極みに追い込まれた晴子夫人は、羞恥の限界を超えて発狂しそうになる意識の中で、体の両側にぴたりと着けていた両腕を外すと、おずおずと股間に近づけ、ブルブルと震える指で陰毛を搔き分け始めるのであった。

「おお！見えて来たぞ！」

「いよいよ天の岩戸のご開帳だ！」

この光景に男達が次々と好き勝手の言葉を口走った。

「貴様、女郎の分際で何を恥ずかしがっておる！両手を使ってもっとパツクリと中身を見せるのだ！」

と竹刀の先端で夫人の尻を叩いた。

いつの間に貴族の夫人から女郎に格下げされたのか知れないが、気を失いそうになる白い霧のかかったような意識の中で、最早何も考えることも出来ず、男達に命じられる儘に自

らの指で陰唇を摘んで更に大きく押し広げ、男達に羞恥の花園を曝す貴婦人がそこに居た。夫人のこれまでの性生活は意外と淡泊であったのか、年の割に色素の沈着も無く美しいピンク色をしており、娘を二人も産んだわりには性器の変形も少なく若い娘のような形を維持していると中島は感心した。

「どうだ？ 恥ずかしいか？ お豆が恥ずかしげにフルフルと震えておるぞ！」

「ボボの入り口がピクピクしているぞ！」

と男達が令夫人の花園を厭らしい目で凝視しながら盛んに囁し立てた。

ギラギラする男達の視線が痛いほど、自分の秘めた所に突き刺さるのを感じていた。これまで長時間に渡り、この世の物とも思えぬ変質的な男女の交合を見せられ、精神がすっかり錯乱していたところに、今また自分の身に淫靡な責めが架され、羞恥心の極限を彷徨い、錯乱し発狂しそうになる意識の中で、何時の間にか夫人は羞恥を越えた不思議な愉悦感に支配され始めていた。

まるで睡眠術の暗示に掛けられたように、男達からもっと股を広げろと言われたら大人しく股間を広げ、後ろを向いて腰を突き出すようにしろと言われたら男達に向かって尻を突き出して、

「ああー、恥ずかしいわ。・・・ああー、もっと晴子の恥ずかしい所を良くご覧になって・・・」

と、媚びをうるような甘い声を出して、自分の股間が一層良く見えるような姿勢を取った。この女は自分の性器を男達に見られる羞恥が昂じて限界を超え、その行為に感じ始めているのか？

ガクガクと身体を震わせ抱き合う娘達が、貞節な良妻賢母として慕っていた母親の豹変した姿を信じられない思いで見続けた。

中島は潤いを帯び充血し赤く膨潤し始めた女の花園を見つめながら思った。

貴族の夫人として耐え得る羞恥の限界を超越してしまったこの女は、錯乱状態に陥って、逆に下賤な男達から自分の秘め所見られることに快感を感じるようになったのか？

男達の見守る前で、自らの指で大きく寛げられた秘奥の粘膜が赤く充血し、グッショリと湿り気を帯びて来たことに気付いた。

ここでただ、この女を抱くだけでは、この女の閉ざされていた性的本能を満足させるだけであり、高慢な貴族女の鼻っ柱をへし折り、その気位を粉々に打ち砕き完全な性の奴隷に改造すると言う自分の残酷趣味に合わない、自分に言い聞かせた。

「お前の裸は良く見せて貰った。ただ、それだけでは娘二人を許してやることにはならない！」

中島が羞恥の懊悩の中で憑かれたように秘められた花園を男達に目に開陳する晴子夫人に声を掛けた。

「どうだ俺たちとお前の体を使って賭をしないか？その賭にお前が勝てば、お前達に指一本触れずこのまま帰してやろう・・・」

夫人も中島の言葉で催眠術の呪文が解かれたように、ふと我に帰り、両手で恥ずかしい股間と乳房を隠して、自分が男達に示して来た破廉恥な行為に悲鳴を上げた。

「どんな賭をしようと言うのですか？それに勝てば私たちは許して貰えるのですか？」と、夫人は床にしゃがみ込み体を縮めて、両手で恥ずかしい所を覆いながら、中島の目を見つめて尋ねた。

「何、簡単な賭さ・・・」

おい！と中島は首をしゃくると男達に何やら目で命令した。

中島の命を受けた男達が部屋から出て行った。

そして暫くすると、何やら太い材木を組み合わせて作った大きな物を六人掛かりで部屋に持ちこんで来た。

それは太い角材を組み合わせて作った大きな踏み台の様な形をした物であった。

何段かの階段がありその一番上は大人が余裕を持って立てるほどの広さがあった。台の一番上は地上から1メートルほどの高さとなっていた。そして台の一番上には高さ1.2メートルほどの衝立のような板が打ち付けられており、初めは、女達の中からその衝立の裏の様子は見えなかった。ところが男達が部屋にその台を運び込むため向きを変えた時、その衝立の裏の様子が女達の目にまざまざと映った。

そこには何と男性が小便をする時に使う、朝顔と俗称される白い陶器で出来た便器が取り付けられていた！そして便器に排泄した後の液体を流すためか、便器の底の部分に当たる衝立の正面側には1メートル半ほどの飴色のゴムホースが垂れて、男達が台を運ぶ度に怪しく揺れていた。

「お前達を歓迎するに当たり、何をしようかと皆で無い頭を絞って考えたんだ。こんな物を注文した時、大工の野郎は目を白黒してやがったぜ・・・」

と中島が面白そうに笑った。

「賭と言うのは、お前に公衆便所になって貰うことさ・・・」

中島が啞然とする晴子夫人を見つめながら平然と言った。

床に置かれた台から垂れ下がった飴ゴムのホースに嘴管を差し込みながら中島が説明した。

「これから俺たちで、この階段を上って台の上に立ち、朝顔に向かって小便をする。便器に流れ込んだ小便はこのゴムホースを伝って下に流れ落ちる。そしてこのゴムホースの先をお前の尻の穴にねじ込んでおけば、お前の尻に小便が流れ込むってえ寸法だ。つまりお前はこれから俺たちの便所になるんだ・・・ここにいる全員の小便を流し込まれて30分間堪えたらお前の勝ちで、娘もお前も全員許して上げよう。ただし30分間保たなかったら、お前の負けでそれを合図に全員で娘に襲いかかるってことだ。」

中島の言い出した賭がどんなに陰虐なものか見当も付かないが、兎に角中島の言うことを聞かなければ自分たちが助かる道は無いように思われた。

男達は木で出来た背負子のような物を持って来て床に立てた。

床に立てた背負子の両端には前後に木製の棒が出ており、床と接して背負子の板が倒れないようになっていた。

男達は全裸の夫人をその床に立てた背負子の方に連れて行き、背負子に縛り付けようとした。その縛り付ける姿勢を知って夫人は恐怖した。体を上下逆に固定され体重を肩と前に曲げた首で支えるように麻縄で縛り付けられ、大きく上を向いた脚は思い切り開脚されて体の前に折り曲げられた。

俗に云うマングリ返しの姿勢であるが貴族の夫人がそんな下品な言葉を知るはずも無かった。

脚の付いた背負子のような道具は、マングリ返しのまま女体を固定して転倒を防止するための支え板であった。自分の最も恥ずかしい二つの穴が隠すことも出来ず真上を向いて固定されてしまった事態に夫人は恐怖し激しい羞恥を覚えた。

上半身も手足も背負子のような支え板にガッチリと縛り付けられ固定され、身を振る事さえ出来なくなっていた。

全身がしっかりと固定され身動き出来ないことを確認すると、中島は夫人の傍に例の便器付きの台を運ばせた。

「随分と毛深いオコだな。それにケツの穴の周りも毛だらけじゃないか。」

と、揶揄して夫人の羞恥を掻き立てつつ、剥き出しになり真上を向いた夫人のバックリと

開いた陰部をまさぐった。

肛門の周囲を被っていた陰毛をよく掻き分け押し広げ、その菊の花弁にも似た淫靡な粘膜を充分露出させてから、右手的中指でワセリンを瓶から掬い上げ、羞恥と恐怖で固く閉まった菊の蕾の回りをマッサージするように無言でさすり始めた。

男の指先が無防備な隠微な場所に突然触れた事で、夫人が体をビクッと硬化させた。

「どうした？此処の通りを良くしておかんと、この太い嘴管が痛くて入らないぞ！」と、ゴムホースの先に取り付けられた嘴管を晴子に見せ付けながら言った。

それは、通常の浣腸器の嘴管より遙かに大きく、大人の指ほどの太さと長さがある真鍮製の管で、俗にタケノコと呼ばれるゴムホースを差し込むガス管部分のように抜け止めが施されていた。

そのような禍々しい物が自分の肛門に挿入されるのかと怯えた目で見詰めたが、中島は構うことなく、慣れた手付きで、緊張と恐怖で固く収縮した菊の蕾の皺の一本一本を伸ばすように、指先でワセリンを塗り込めていった。

医者にも診せたことのない不潔な排泄孔の周囲を男の太い指先で撫で回される嫌悪感に夫人が床に後頭部を接したままイヤイヤと首を振った。

繊細な神経を散りばめられた肛門に丹念にワセリンを塗す、中島の優しい手技により、これまで経験した事も無かったような妖しい刺激を与えられ続けて、何時しか夫人は嫌悪感を超えた不思議な快感を呼び起こされていた。

鼻の頭に薄く汗を浮かべて、何時しか身じろぎもせず、中島の指先の動きに神経を集中したような夫人の姿があった。

これまで体内の汚物を排泄するだけの役割と思っていた不潔な孔の周囲からの、信じられないような隠微な快感を受け入れたまま、瞼を薄く閉じて、甘く吐息を吐いて中島の指先の動きに委ねてしまっていたのだった。

ムクムクと隆起を始めた女核をもう一方に指先でゾロリと撫で上げた。

その瞬間晴子はヒッと悲鳴を上げて身体をビクッと硬化させた。

この女も尻穴で快感を感じる種類の女かーと、目の前で充血を始めた牝芯を見詰めながら中島がほくそ笑んだ。

今や中島の手技により、菊花は柔らかく膨らみ、受け入れの準備が整ったように思われた。改めて中指でたつぷりとワセリンを掬い上げると、そのままズブリとすっかり柔らかくなった肛門を破って直腸内に指を突き立てた。

ヒッと悲鳴を上げて晴子が、晴子が快感に委ねて弛緩していた下半身を反射的に緊張させた。

強い肛門の筋肉が痛い程中島の指を締め付けた。

その強い緊縮力に中島は、頼もしい物を見付けたようにニヤッと笑った。

晴子の身悶えにも構うことなく、腸内を指先で掻き回し、指を前後に出し入れさせた。

中島が掻き回す指先に、幾つもの固形物の塊が触れた。

この女は、今日はまだ、廁を使っていないようだ。

それと元々便秘がちの体質の様で大量の硬化した便塊を腸内に貯留していることを確認すると、これから繰り広げられる汚辱に充ちたショーが、凄まじくも残酷なものになると期待を込めて薄笑いを浮かべるのだった。

中指の腹で腸内の便塊を捏ね回される、恥ずかしい刺激に、晴子が涙を浮かべて悲痛な声を上げた。

自分の指を痛い程喰い絞める、良く絞まる元貴族の夫人の後門を開発する楽しみも発見したことに満足した中島は指を抜き取り、その部分に同じ程の太さがある金属製の嘴管を埋め込んだ。

スベスベした金属の管のひんやりとした感触を、中島に掻き回されて熱く充血した腸内に感じて、晴子が体を震わせた。

突然粗野な男の手で金属の筒を肛門にねじ込まれる羞恥に夫人が悲鳴を上げた。

中島が、筍のような形をした、根本が広がって抜け止めの付いた嘴管をすっかり潤滑された肛門の内部に無言で送り込んだ。

ゴム管を引っ張って容易に抜けない事を確認した中島は、天井を向いたボリュームのある夫人の双臀を平手でパンパンと叩いた。

こうして全ての準備が整うと、

「へへ・・・実はさっきから大分溜まって我慢していたんですよ。」

と、一番手を志願した男が、階段を駆け上って台の上に立つと、自分の分身に手を添えて便器に向かい激しく放水を始めた。

便器で受けた小水は便器の下に集められ、ゴムホースを通して下で待ち受ける、夫人の腸内に流れ込んだ。

半透明のゴムの管の中を黄色い液が泡を浮かべて駆け下り、次々と夫人の身体の中に吸収

されて行く様子が見えた。

自分の腸内に逆流して来る温かいような冷たいような男の小水の異様な雰囲気には夫人はおぞましさに鳥肌が立つような感じを持った。

次に台に上った男は大男で、排泄の量も大量であった。周囲の男達もその量の多さに盛んに揶揄した。何時終わるともなく腸内に流れ込む大量の小水に夫人は恐怖を感じた。

三人目の男は大量の酒を飲んでいたので、階段を上る足取りも危なっかしく、尿の中にも大量のアルコールを含んでいるようで、アルコールに弱い夫人にとって腸壁を通して体内にアルコールが摂取されるような、腸壁が熱くなるような感じを持った。

こうして代わる代わる次々に男達が台に上り、真上から夫人の腸内に小水を流下した。

排尿が終わった後、朝顔に向かってペツと痰を吐いていく男もいたが、それらの不潔な粘液も尿に混じって夫人の体内に流れ込んで行く様子がゴム管越しに見えた。

尿意を堪え切れなくなった男達が自分の順番を待つ事も出来ず、一度に二、三人で台の上に登り押し合いへし合いで、一斉に放尿することもあった。

既に何人もの排泄物を流し込まれ、はち切れそうになり苦悶する夫人の腸内に、一度に数人分の大量の尿を押し込まれ、その苦しさに堪え切れなように悲鳴を上げた。

二人の娘は今は言葉も出ず、互いに震える身体を抱き締めながら蒼白な顔となってその光景を見続けた。

中には昂奮の余り満足に排泄できない若い男も何人かいたが、20人分の小水と唾と痰を大腸内に受け入れる頃には夫人の腹は、まるで妊婦のように大きく膨れあがり、内部からこみ上げる膨張感に苛まれる夫人がいた。

「フフ・・随分腹がせり出して来たじゃないか？」

中島が周囲にも分かる程張り出した夫人の柔らかい腹を撫でながら言った。

最後に中島が台の上に上った。

最早夫人の大腸には新たに水分を受け入れる余裕は全く無くなっていたことは誰の目にも明らかだった。

中島は上手に自分をコントロールしてチョロチョロと少しづつ流して、長い時間夫人に苦痛を与えた。そして台の上から下にいる夫人の表情を眺めながら、少量ずつの受け入れに夫人の内臓が慣れて来たと見るや、堰を切ったように、膀胱に残っていた小水を一度に解放して夫人に断末魔の苦しみを味合わせた。

真っ赤な顔になって内部から突き上げる苦痛に耐えながらも、夫人は何とか全員の排泄液

を体内に収めることに成功した。

「さあ、今から30分だ。30分我慢が続けば、お前の勝ちで全員許してやろう」

中島が苦悶に歪む夫人の顔を見つめながら言った。

全身に汗を浮かべながら永遠に続くかと思われるような、苦悶の時間が続いていた。

「さあ、5分経った。後25分だ」

苦しそうな夫人の顔を見つめながら中島が時を読み上げた。

「さあ、10分経った。後20分だぞ」

と中島が告げた。

最初の5分ほどは夫人を苦しめていたのは腸内に大量に注ぎ込まれた男達の小水のもたらず腸壁への強烈な圧力であったが、10分を迎える前からその小水が大腸内の内容物を溶かし、それを外部に排出しようとする蠕動運動に代わっていた。

その腸内で渦を巻くような強烈な蠕動運動は激しい腹部の痛みとなって夫人を襲い始めていた。

排泄への生理の欲求に伴う激しい腸の収縮運動はグルグル、ゴロゴロという腹の音になって夫人の周囲を取り囲む男達に響いていた。

母が我慢仕切れなくなったらそれを合図に自分たちを犯すーと、宣言している男達に恐怖を感じつつも、娘を守るために全身に冷や汗を流し、呻き声を上げながら必死に責め苦に耐える母に申し訳ないと明子や聖子は思った。

「お母様、無理をなさらないで、私たちの事は気にしないで下さい・・・」

と、涙を流しながら口走るのであった。

「随分と我慢が続くじゃないか？さあ、15分だ。後半分だぞ！後15分我慢仕切れるか？」

蠕動運動は今や激しい痙攣となって現れ、夫人に地獄のような苦しみを与え続けていた。

少しで気を抜けば、そのまま粗相をしてしまいそうであった。

しかし、ここで自分が我慢しなければ、娘達が男の餌食になってしまうと思うと、限界を超えた苦しみではあったが、何とか堪えようとした。

これ見よがしに床に置かれたブリキのバケツをボンヤリと見詰めながら、自分が我慢出来なくなっても、この女体を残酷に責め上げる事に喜びを感じる男達が、素直に自分をトイレに連れて行く事は無いだろうと感じていた。

恐らく、そのバケツに跨らせて、男達の見守る中で排泄を強制されるのでは無いだろうか

と想像した。

娘達の処女を奪われる事だけは、何としても防がなければならないが、同時に獣じみた男達の前で恥ずかしい排泄姿を晒すことも耐え難い屈辱であった。

なんとか30分間我慢し続け、賭けに勝利して解放されるまで我慢出来るだろうかと思うと絶望的な思いに苛まれる夫人であった。

中島達は夫人の驚異的な忍耐力に舌を巻いた。

男達の目の前で無様な排便姿を晒すという耐え難い羞恥を避けようとする貴婦人としての強いプライドと、娘を守りたいという強い思いで本当に30分間我慢しきるのでは無いだろうか不安を感じるようになって来た。

夫人の腹の音は一層激しく大きく周囲に飴していた。ビクビク体を蠢かせて死に者狂いで堪える夫人の腹は周囲からも分かるほど激しく波打っていた。

中島がビッショリと汗に塗れ怪しく蠢く下腹に手を触れると腸内で液体が高速に渦を巻いていることが分かった。

真っ赤に溶けた鉄が腸内を駆け巡るような灼熱感と腸の内部から掻き毟られるような激痛が堪えることなく晴子を襲っていた。

この苦しい責め苦を受けるくらいなら今此处で命を絶てることが出来たらどんなに楽だろうと苦痛にのたうち回る意識の中でかすかに感じていた。

「20分だ、あと10分我慢できるか？」

意識が飛びそうになる激痛の中で中島の悪魔のような笑い声がガンガン頭の中で響いた。

後10分、アアッ、後10分この発狂しそうな苦しみに耐えられるであろうか？と思うと絶望的な気持ちとなって来た。

“もし自分が我慢できなかったら、娘はあの男達の餌食となってしまう。

そして、あの男達は無慈悲に女体を蹂躪することに喜びを感じるような残酷な男達であることもこの目で見ている。何としても娘をあの残酷な男達から守らなければならない・・・ああ・・・でも、もう堪えられそうにない！・・・お母さんを許して！・・・“、地獄のような苦痛の中で夫人は哀しい決断をした。

「お願いします！もう我慢が出来ません！トイレに行かせて下さい！」

夫人が堪えきれず蒼白な顔で中島に哀願した。

「後7分だぞ、もう我慢出来なくなったのか？」

中島の問いに夫人が激しく首を縦に振った。

おい！と中島が後ろの男に目配せした。中島の命令を受けた男は、急いで何やら手に持ってやって来た。それは鉄で出来た開口具であった。中島の命を受けた男は、有無を言わず無理矢理夫人の口にその頑丈な開口具をねじ込み、レバーを捻って無理矢理夫人の口をこれ以上開かないほど押し広げた。そして別の男が夫人の頭を少し持ち上げると、床と頭の間に鉄板で出来たスタンドのような物を差し込んだ。差し渡し40センチ程の鉄板には2枚の鉄板が直角に溶接されており夫人の頭はその二枚の鉄板の間に挟まれて固定され、口を全開にして真上を見上げたまま動かすことが出来なくなってしまった。

ここで夫人は、男達の底知れぬ残酷さを理解し、血の気が引いていくのが分かった。

このまま堪えきれず粗相をした場合、腹の中の物は高く真上に放出され、それはそのまま自分に向かって落ちてくるだろう。そしてその落ちて来た物を顔を振って避けることも出来ず、大きく開いた口で受けることになる・・

既に、限界を超えて久しいが、自分の吹き上げた汚物を全身で受け止め、自分の大便と男達の小便が混じり合った濁流が開き切った口内に流れ込む姿を想像すると、落下微塵の恐怖に煽り立てられ夫人は崩壊しそうになる堰を必死の力で守り続けていた。

既に夫人の顔は蒼白となり、白目を剥いて、人間としての意識は飛んでしまっているように見えた。

開け放たれた口からは、断続的に動物的な呻き声を発するだけとなっているが、何かに取り憑かれたような必死な形相で最後の瞬間を必死に堪えていた。

「後3分だ」と、中島が口にすると共に心の中で、“拙いな、崩壊への恐怖で夫人が必死に堪えて本当に後3分堪えきれぬかも知れないな・・”と、不安になった。

「待つて・・私にもオシッコさせて。」

さっきまで部屋の隅に置き去られ、死んだように倒れていた順子がフラフラと体を起こすと、そのように口した。

これを聞いて中島がニヤッと微笑んだ。

「裸のまま寝ていたから体が冷えたのだろう。そうだな、約束ではこの部屋の全員の小便を流し込んで、堪えられればということだったからな・・順子もこの部屋の一員だ！」

たちまち隅に片付けられていた便器付きの台が夫人の傍に再び置かれセットされた。

ピクピクする夫人の固く閉じられた肛門を割るように金属の嘴管が無理矢理植え込まれた。

ふらつく足取りで全裸のままの順子はその階段を上って行く。

浦川家の娘は、なぜ順子が敵側の男達の味方をするような真似をするのかと訝った。

台の頂上に立つと、便器に向かって思い切り腰を前に突き出した。剃毛されて剥き出しとなった、つやつやした隠す物の無い陰部がこれ見よがしに男達の視線に曝された。

「へー、女も立ち小便する時はそんな格好をするのか？」

と台の下で男達が囁し立てた。

さらに両手で女の花園を左右に押し広げると、華洞とその直ぐ上の尿道口が男達の目に剥き出しとなった。

淑女としての恥じらいも見せず、男達の見守る前で、本当に放尿を始めようとしている順子の姿を信じられないというように見詰めながら、「あー、止めて下さい！順子様！」と聖子と明子が同時に悲鳴を上げた。

腰を思い切り前に突き出し、更に花芯に両手の指を添えて思い切り押し広げ、上に向けて引っ張り上げた。

下から見上げる男達に本来厚い肉壁の陰に隠れて見えない秘密の部分が露わになった。

その中心の膣孔の上に位置する尿道が少し膨らんだかと思えた次の瞬間、尿道口を破り順子の股間から放物線を描いてレモン色の液体が便器に向かって放出し始めた。

男達の哄笑と娘達の悲鳴と夫人の断末魔の叫び声の中で、長く長く順子の放水は続いた。

「浮かぶか、沈むか、ぎりぎりの船に麦藁一本載せただけで沈んでしまうと言う話があるが、まさにその状態だな・・・」

新たに順子の尿が流れ込む度に、蒼白の顔で悲痛な呻き声を立て、身を振る夫人を冷たく見つめながら中島がポツリと言った。

限界を遙かに超越した所に、更に衝撃を加えられて、夫人には最早自制する力は微塵も残されていなかった。

夫人の目は既に焦点を失い、瘡に罹ったようにブルブルと体を震わせ、ただ断続的に怪鳥のような不気味な呻き声を上げるだけであった。

見守る男達には、満々とした濁流を蓄え、既に各所に亀裂が生じて、今まさに決壊しようとしているダムに、更に新たな洪水が激流となって押し寄せたようなものだと感じられた。崩壊が間近に迫った事を確認した男達は、夫人の肛門に植え込まれたゴムホースを途中で断ち切り、夫人の周りから台やその他散在していた物を大急ぎで取り除いた。

中島が腕時計を見ながら告げた。

「後 30 秒だ！」

夫人は発狂しそうになる意識の中で最後の瞬間を少しでも遅らせようと尻に力を入れた。

「とどめだ・・・」

と、中島が冷たい笑みを浮かべて言うと、夫人の尻から垂れているゴムホースの先を摘み思い切り引っ張った。

夫人が最後の部分を止めている栓を外されるのを拒むように肛門の筋肉を励まして最後に残された力を振るわせて抵抗したが、中島に引かれたゴムホースは一杯に切り伸び切り、男の力には抗し切れず、遂に夫人の腸内に埋め込まれていた嘴管はズルズルとその姿を体外に見せ始めた。

そして、そのままスポッと音を立てて体外に飛び出すと同時に、詰められていた栓を抜かれたように、支えを失った肛門がモリモリと大きく開き、中から堪えに堪えていた褐色の汚水が噴水のように吹き上がった。

「おお凄いい！」

男達が歓声を上げた。褐色の汚水は夫人の尻から 2 メートルも吹き上げ、頂点に達して、落下して来た汚水は土砂降りの雨のように床を激しく叩き、夫人の色白の体を茶褐色に染め上げ、上を見上げ全開に開かれた口内に流れ込んだ。

この惨状に娘達が、狂ったような悲鳴を上げた。

しかし、夫人の最初の放出は、大量に注ぎ込まれた小便と直腸内の便の一部を排泄したに過ぎなかった。

夫人の体内では大腸の奥深くに溜め込まれた大量の汚物が出口に向かい一機に駆け上り始めていたのだった。

ビビビッと言う布を引き裂くような大きな音を立てて、間髪を入れず二度目の噴火が巻き起こり、大量の粘状の固形物を含む汚水を高く吹き上げた。

男達の小水によってドロドロに溶かされた大腸内の固形物が天井近くまで吹き上がり、周囲にドロドロした汚物をまき散らした。

「うわー！こいつは臭くて堪えらんぜ！」と部屋の中に広くまき散らされた排泄物の臭いに咽せた男達が、全身汚物塗れになっている夫人を揶揄した。

夫人は白目を剥いて意識を失っていたようであったが、口腔内に流れ込んだ大量の汚物を生体反射により咳や吐瀉物と共に外部に吐き出し続けていた。

その口の内に溜まった汚物を吐き出す姿は、肛門から排泄しながら、まるで、もう一方の口からも排便しているように映った。

激しい発作が治まり、辺りが一瞬静かになった。

夫人はあまりのショックに暫く呆然としていたが、意識が戻ったのか突然涙を流し大声で泣き始めた。これにつられたように二人の娘も大声で泣き始めた。

「どうした？これでお終いか？」

嘔吐も止まり、泣きじゃくる夫人の顔を見て、中島が問い掛けた時、再び地震で山が揺れるように下腹がブルブルと激しく痙攣を始めた。

夫人のまるで獣のいななきのような呻き声で異変を感じた中島が夫人から後退った。

既に汚物で汚れきった肛門が、再びモリモリとめくれ上がると、ブシューという音と共に大量のガスの放出を伴った便塊の嘔吐が始まり火山の噴火のように高く吹き上げた。

これまでと違う悪臭に男達は鼻を摘んだ。

こうして、大腸の深部から蠕動運動により次々と内容物が運び上げられ、その後も男達の哄笑の中で断続的に放出が続けられた。

都合5回の排泄を行い、最後の方では、最早高く吹き上げる力を失い、火口から流れ出る溶岩のようにドロドロとした液状便をダラダラ流し続けるだけとなった。

いまや夫人の体は自ら放出した排泄物に塗れ、大理石の床の上に置かれた巨大な糞塊のピラミッドのように見えた。

大腸内の汚物を全て排泄し終えても、激しかった腸の蠕動運動は未だ止むことが無く、夫人の腹を苛んでいた。

腸の内壁から搾り上げるような間欠的な激痛が夫人を襲い、泥を厚く積み重ねたような陰部の底で肛門孔がパクパク激しく大きく間欠的に開閉を繰り返す様子が、汚濁の液面の上からも覗うことが出来た。

物を言うことの出来ない口からウーッ、ウーッというような低い途切れ途切れの呻き声を上げ続けていた。

最後の排出を終え暫く経って、夫人を取り囲みながら男達は、自らが産み出した汚物の山の中に沈む夫人を見つめながら、

「どうやらこれで腹の中のものは全て出し終えたようだな・・・」

と呟いた時、途切れ途切れだった夫人の呻き声が再びウーッというような連続した呻き声に代わり、苦しげに眉根を寄せると、再び便の沼の中に沈んでいた夫人の肛門がピクピク

クと動き出した。

そして、体内から太い蛇がゆっくりと這い出るようにとぐろを巻きながら太くて柔らかい便を体外に送り出し始めた。

腸内の最も奥深くに止まっていた最後の便が、外界に送り出された瞬間であった。

柔らかくて長い便が、途中で幾つにも千切れて、激しく上下する腹や胸の上に溢れた。

「おやおや、また放りだしたぞ!」、

「全くどれだけ出せば気が済むんだ?」

いつ果てるとも知れない、その浅ましい排泄図を見詰めながら男達が呆れたように叫んだ。

「お前、一ヶ月くらいウンコを腹の中に溜めていたんじゃないか?」

と、男達は残便の名残を惜しむかのようにゆっくりと体内から最後の便を押し出し続ける夫人のその部分を見つめながら口々に揶揄し続けた。

男達の哄笑の中で腸内の全ての汚物を排泄し終え、静寂に戻った夫人は、腹の中の物を全て出し終えた為か、最初と比べて随分と胴がペシャンコになりスマートになったように見えた。

強烈な排便に伴う痙攣により、いまだに夫人の肛門はヒクヒクと弛緩と収縮を繰り返していたが、僅かばかりの腸粘液の泡を噴くだけとなり、何度もの放出の末に最早排泄するのは体内残されていないように思われた。

ここで突然夫人の下腹が再びブルブルと震えて、前の孔から黄色い噴水を吹き出し始めた。最早、痺れ切った下腹の筋肉の制御能力を失ってしまった夫人にとって、押し止めようの無い小水の放出であった。

夫人が苦しい呻き声を上げて、涙を流した。

このまるで後産のような排泄姿に男達が思わず歓声をあげ、笑い声を上げた。

体内から排泄された黄色い液が、筋となって体表の汚物を洗い流して行き、その後に白い肌を露出させた。

貞淑な貴婦人の演じる激越な羞恥のショーのフィナーレを飾るような黄色い放水に男達が手を叩いて笑い転げた。

「残念だったな、後7秒我慢出来ればお前達の勝ちだったが、この賭は俺たちの勝ちだな・・・」

余りのショックの大きさに呆然とする夫人に向かって中島が声を掛けた。

「約束通り、娘は俺たちで頂くぜ・・・」

とポツリと言うと、それを合図にしたかのように男達が一斉に娘に向かって襲いかかった。娘達の悲鳴と、結局娘を守ることが出来なかった晴子の後悔の鳴き声が部屋に甞した。

屈辱の姉妹

子羊に襲いかかる狼の群れのように、飢えた男達は浦川家の娘達に一斉に襲いかかった。娘達は必死に抵抗したが、男達の力と数に敵わず、数人掛かりでバタバタと藻掻く手足を押さえ付けて抵抗を封じ、残りの男達が衣服を引き裂くように次々と奪い取って行った。数と力に圧倒的に余裕があるので、単に衣服を脱がすだけでなく、その間に厭らしく娘達の体を撫で回し、しっとりとした若い柔肌の感触を楽しみ、悲鳴を上げさせた。真夏ゆえ、外出用の薄いワンピースを纏っただけの女体は、たちまち男達にワンピースを奪い取られ、スリッパを引き裂かれるように剥ぎ取られた。

「おや？お前達もパンティとブラジャーをしているのか？」

と、戦後流行し出した女性用下着を着けているのを見付けて声を上げた。取り囲む男達が見下ろす中で、両手両脚を男達に押さえ込まれた、パンティとブラジャーだけに脱がされた娘達がいた。

姉の聖子は成長した若い女性らしく、乳房も大きく育ち、腰回りも良く張っていた。その蠱惑的な体型は母親の体つきに似ていた。

妹の明子はまだ成長途上であり、体は華奢で胸もまだ小さく全体に幼さを残すからだであった。

娘達は、野蛮な男達の目に素肌を晒すことに、恐怖と羞恥を感じ、泣きじゃくりながら必死に体を縮めようと身を振ったが、手足を押さえ付ける男達に完全に動きを封じられていた。

男達の目には下着の薄い生地を通して、女達の羞恥に赤く染まった肌が透けて見えるようであった。

完全に余裕を持った男達は、一機に下着を脱がせようとせず、まるで猫が鼠をいたぶるように羞恥に打ち震える娘達を弄だ。

ブラジャーの薄い生地の上から厭らしく乳房を撫で回し、時々その頂上にある乳首を生地ごと摘み上げて女達に悲鳴を上げさせた。

薄い生地を通して乳房に散々悪さをされて、女達が叫び疲れたのか少し静かになったのを見計らって一機にブラジャーを剥ぎ取った。

取り囲む男達の目に、白くこんもりと盛り上がった形の良い乳房の上の桜色の乳首が目飛び込んで来た。

聖子の乳房は殆ど成熟した大人の乳房になっており、ボリュームの在る紡錘型をしていた。

一方明子の乳房は、まだ成熟の途中であり、伏せたお椀のような小振りの弾力のある乳房をしていた。

二人の娘は隠す物を奪い取られた乳房を野卑な男達に舐めまわすように眺められて、恥ずかしさに盛ん身を振っていた。

じっくりと生身の乳房を晒す羞恥に身悶えしている間に、一人の男が、聖子の下腹を覆い隠していたパンティを少しズリ下げた。パンティに指を掛けられた時聖子は大きな悲鳴を上げ反射的に身を振った。ズリ下げられたパンティの下から柔らかい腹の中心に形の良い臍が姿を現した。

別の男達が面白半分に子指を露出した臍の中に突き立て、指先で内部を掻き回したので、聖子はまるで焼け火箸を押し付けられたような悲鳴を上げて身悶えた。

男達はわざと一機にパンティを脱がさず、少しずつ押し下げ、その都度露わになった柔らかい白い肌を撫で回した。

今や恥ずかしい繁みを露わにする寸前まで、下に下げられていた。

一寸刻み五分刻み少しずつ降ろし露出した柔肌を撫でながら、羞恥心を一層盛り上げていくような、そんな男達の悪さに姉妹は涙を浮かべて身悶えした。

男達はこんもりと盛り上がった股間を布地越しに見詰めながら最終状態に移ろうとしていた。

「そうかい、そうかい、そんな悪戯するより早く腰の物を脱がしてくれと言っているんだね？」と、男が言うと、姉妹が激しく首を振るのも構わず一機に膝までズリ下ろした。

「アアーッ！」「イヤァッ！」と、姉妹から悲鳴が上がった。

姉の聖子はまもなく女盛りを迎える成熟した体に相応しく、艶々とした繁みが股間に飾られていた。妹の明子はまだこれから開花する蕾のように柔らかい春草が頼りなげに股間を隠していた。

「母親の方は股の間が見えない位モジャモジャのジャングルの様だったが、娘達の方は随

分とお淑やかに生やしているじゃないか？」と、女達の下の毛を見比べながら言った。

「こいつらも男の精をタップリと吸えば、ああ成るのさ！」と、一人の男が物知り顔で言った。

「成る程、それは楽しみだ！」と、姉妹の股間を穴が開くほど見詰めながら別の男が言った。

娘達は両脚を掴んで思い切り開脚させる男の力に抗すべくも無く、顔を振って吸りながら恥ずかしい繁みを男達の鑑賞に晒していた。

男達は抵抗が弱くなったのを見計らって、足首を掴んでいた手を離して、パンティを抜き取った。これで女達は何も覆い隠す物の無い全裸の体を、野蛮な男達の目に晒す事になった。

ピッタリと閉じた太股の柔らかい下草は男達の視線に怯えるかのようにフルフルと震え、その下に秘密に隠しておいた花園が微かに見えた。

「さて、いよいよ弁天様のご開帳と行こうじゃないか！」と、男が待ちかねたように叫ぶと、それにつられて喚声を上げた姉妹の両足首を掴んでいた男達が、姉妹の意志に反して両脚を思い切り広げ始めた。

これまで誰の目に触れる事も無く隠されていた秘密の花園が、この獣のような男達の目に晒すことに悲鳴を上げて、全力を込めて股と閉じようとしたが、男の力には敵わずジワジワと押し広げられていった。

「おお、これは何て綺麗な花卉だ！」「綺麗な桜色だ！」と、男達が露わに開脚された娘達の秘部を見詰めて有らん限りの賛辞を送った。

恥ずかしい部分を見詰められる羞恥に姉妹は顔を真っ赤にして涙を吸り上げた。

左右に扇の様に大きく広げられた股の中心には、色素の沈着がまるで見られない綺麗な肉の襞があった。

それは、まるで清楚な白い蘭の花卉を連想させた。

まるで何かの美術工芸品の様な妙齡な貴婦人のその美しい肉の花卉を男達は生唾を呑み込みながら何時までも飽かずに眺め続けていた。

男達の熱い視線をその部分に痛い程感じて、男達の力の前に抵抗を封じられた哀れな姉妹は項垂れたまま涙を流し続けた。

ヒッ！と、突然姉妹が身体を硬化させた。

男達が股間に手を伸ばして、最奥の襞を指に摘むとそのまま左右に押し広げたのだった。

そこには濃いピンク色に充血した女の肉の祠が遂に男達の眼前に露わになった。

その華洞の入り口部分には最後の守りとするように半透明の膜で被われていた。

日頃は処女膜など遠の昔にすり切れてしまった売春婦しか抱く機会の無い男達は、めったに見ることの出来ない神秘的な薄膜に閉ざされた乙女の証に、言葉も上げられずジッと目を凝らすのであった。

「アアーッ！イヤー！」

遂に自分達の最奥の部分まで暴き立てられてしまった、娘達が羞恥に泣き叫んだ。

「どうした？恥ずかしいか？隠して欲しいか？」と、一人の男が言ったので姉妹は激しく首を縦に振った。

男達は足首を掴む力を緩めて、姉妹に股を閉じさせた。

そして完全に股間を閉じた次の瞬間再び足首を掴む手に力を入れて、股間を大きく押し広げたので、気を緩めた姉妹が再び悲鳴を上げた。

「それ！パクン、パクン」と、男達はリズムを取りながら、娘達の脚をピッタリ閉じ合わせたり全開に開いたりして、姉妹をいたぶった。

何度も股間が閉じたり開いたりする度に、股間の花卉は変形した姿を現し、卑猥な姿を男達の前に晒した。

男達の陰惨な悪戯に姉妹が悲鳴を上げる気力も無くなりぐったりとしたころ、この姉妹をいたぶっていた兄貴分の牛田が、

「そろそろ、頂こうか？」

と、ポツリと言ったので姉妹を取り囲む男達が身を乗り出した。

「止せ止せ！こんな糞尿のプンブン臭う所で、娘の処女を頂いても気分が出ないだろう？」

と、中島が止めに入った。

娘達をいたぶっていた若い組員は今にも娘達に襲いかかりそうなほど興奮が高まっていたが、ボスの中島に言われて仕方なさげに諦めた。

「まず、この糞まみれの母親を良く洗って、床を掃除だ！」と、中島が変わらずマングリ返し姿勢で固定された晴子を見ながら指示した。

中島から命令を受けた二人の若い男が、強烈な悪臭を発する夫人の方に近づいた。

全身を糞尿に塗れさせ耐え難い臭いを立ち昇らせる夫人に二人の若者は思わずたじろいだ

が、中島の命令は絶対であり、旧軍の様な組織の中で逆らう事は出来ないと、眉を蹙めながら汚物に汚れた夫人の身体に怖ず怖ずと手を寄せた。

夫人の身体を固定していた縛めが解かれると、半ば失神した様にグッタリと床の上に崩れ落ちた。

口にねじ込まれていた開口具も取り去られ、ゲエゲエと口腔内に流れ込んだ汚物を吐き出し続けていた。

苦しい姿勢から解放されたが、放心したようにグッタリと床に横たわったままの夫人の両手を左右から取って抱え上げる様に立ち上がらせた。

まともに立って歩く事も出来ない夫人は、裸の若い二人の男から両側を抱きかかえられるように風呂場に運ばれて行った。

グッタリとした身体を両側から支えられながら、口内に残った排泄物を少しでも吐き出そうとするようにゲーゲーと嘔吐を繰り返していた。

時間が経っていたのでかなり乾燥しつつあったが、全身を覆う糞尿の悪臭に、肌を未着させて晴子を支える二人の若い組員は顔を顰めた。

「お前達は、母親の撒き散らした糞尿を掃除しろ！」

と、男達の輪の中に残された姉妹に命令した。

目の前の床一面に広がる、悪臭を立ち上らせる排泄物の海を見て、不潔な物に対する強い恐怖感を持つ姉妹は、猿のように身を縮めて両手で前を隠しながら、悲痛な表情で中島の方を見詰めた。

「どうした？自分達の母親がヒリ出した物じゃないか？汚くなんか無いだろう？」

中島が冷酷な笑みを口の端に浮かべて冷たく命令した。

娘達は逃れられぬ運命と諦めたように、両手で股間と胸を隠しながら怖ず怖ずと糞尿の海の前に進み出た。

「どうした？両手が塞がっていたら掃除が出来ないだろう！」と、中島に怒鳴られて、諦めたように手を解くと、床にしゃがみ込んで、命じられるままに、両手で母親の腸内から噴き出したドロドロする糞便の固まりを掴み、男達の用意したバケツに移して行った。

体を前に屈める度に、股間の隠しておきたい部分が後ろから見詰める男達の目に露わとなった。

この嘔吐を催すような悪臭の中で不潔で羞恥を伴う作業に、姉妹は涙を浮かべて気が狂い

そんな気持ちになりながら床の清掃を続けていた。

中島達が風呂場に入った時には、夫人は先の男達に体を洗われて、全身を纏っていた糞便は洗い落とされ、元の光沢のある白い肌を見せていた。

口内を満たしていた汚物も何度も口を漱いで清められ、全身に何度もお湯を掛けられ、身体を被っていた汚物は洗い流されていた。

「ほら！股をもっとオッピロげるんだよ！」

二人の若者から脚で乱暴に太股を押し広げられても、グツタリと放心したままの夫人は抵抗を示さなかった。

「こんな所にも糞を付けやがって！まったく貴族の奥方ってのは、手が掛かるぜ！」

扇の様に左右に大きく開脚した付け根の部分の微細な構造をした襷を指で摘んで大きく引っ張りながら影に隠れて取り切れなかった汚物を指先でなぞるように洗い清めっていった。この穴の中にもウンコが詰まっているんじゃないかと、左右に大きく開いた襷の中心にある肉の孔に指を突き立てた。

「此处は後で俺たちがオ███ンを入れる大事な場所だから清潔にしておかないとな！」
深く指を沈めて侯爵夫人の内部をまさぐったが、時折微かに反応を示すだけでまるで人形のように身体を横たえたままであった。

「これを使え」

突然小島が消毒薬の入った茶色の硝子瓶と硝子の浣腸器を二人の若者の前に差し出した。夫人の身体に悪さをするのに夢中だったので何時の間にか背後に居た中島達に気付かなかった若者が慌てた様子を示したが、小島が手で制した。

そして手にした硝子浣腸器に茶色の薬瓶から消毒薬を満たして、無言で渡した。

小島の意を理解した男が、浣腸器の嘴管を肉の孔の中に突き立て、思い切りガラスシリンダーを押した。

浣腸器の先からはまるで水鉄砲の様に消毒薬が噴き出し、膣内に充満した。

消毒薬が薄い粘膜を内部から搔き筆りその焼ける様な刺激に悲鳴を上げ、反射的に身体を振った。

激痛の前に反射的に収縮した肉壁の圧力により、胎内に流し込まれた消毒液が噴水の様に表に噴き出した。

その中には自らが排泄した小さな便塊も含まれていた。

肉奥の内部まで完全に消毒するよう、その後何度も洗浄液を流し込まれ、哀れな公爵夫人は涙を流して身悶えた。

「こちらも消毒して置いてやろうか？」

と面白がって、後ろの穴にも浣腸器を突き立て内部に流し込んだ。

腸壁を襲う激痛に夫人の悲鳴が上がった。

「そら！口の中も消毒してやるぜ！一杯自分の放り出した糞を咥えやがってよ！」

グツタリとしたままの夫人の口をこじ開け、肛門に突き立てていた嘴管を咥えさせた。

グッとシリンダーを押し込むと消毒液の強い刺激臭が腔内に拡がり、反射的に嘔吐を繰り返した。

その間にも腸内に注入された消毒液がビュッ、ビュッと押し出されて来た。

「へへ・・・さっきので完全に腹の中のモノを出し切ったみたいで水しか出てこないぜ」

下腹をピクピクと痙攣させながら溢れ出る排出液を眺めながら呟いた。

このようにして、夫人の全身の三つの穴は全て消毒されていった。

糸が切れた操り人形のようにぐったり横たわる夫人の身体からはクレゾールの臭いが立ち昇っていた。

二人の若者に米国製の芳香の強い石鹸で髪の毛から恥毛に至るまで全身を隈無く洗われ、体に染みついた糞尿の臭いはすっかり消え失せていたが、男達の暴力に屈して、放心した状態のままの夫人は、誰かが体を支えていないとくずおれてしまいそうであった。

お湯で石鹸の泡を綺麗に流した後、中島達3人と交代した。

大島が夫人を抱きかかえるように湯船に入り、中島と小島が続いて湯に漬かった。

温泉好きの金田伯爵家の風呂はまるで湯治場の湯船の様に大きかったので、大人四人が同時に漬かっても余裕があった。

大島が背後からぐったりとした夫人の身体を抱きかかえながら、撓わに垂れた乳房を揉み扱いた。

夫人の無抵抗を良いことに、中島と小島が左右から夫人の大腿や下腹を撫で回した。

男3人に湯船の中で同時に悪戯されても、夫人は相変わらず放心状態のままであった。

秘所の柔らかい肉たぶを無理やり押し広げ、小島は前方から中島は後方から、夫人の肉洞を弄んだ。

湯船の中で夫人の秘所を撫で回す指に、濃密な陰毛が藻のように絡みついた。

暖かい湯が男達の指で押し広げられた胎内に流れ込んでいる筈であるが、それでも夫人は意識が戻らないのか、死んだように無抵抗であった。

「こうしていると、金田家の女達を風呂に入れて、アソコの毛を剃り上げた事を思い出すな・・・」大島が昔を思い出すように呟いた。

「やるか！」と、小島が大声を上げると、二人の男もニヤッと笑って肯いた。

夫人を湯船から上げると石を敷き詰めた洗い場の上に横たえさせた。

仰向けに寝かせて、両脚を思い切り左右に開いても夫人は、まるで人形の様にぐったりとしていた。

小島が夫人の股間を覆っていた豊かな繁みに石鹸の泡を立て、大島がカミソリを手にした。先ほどは、自らの指で男達に披露した秘所であるが、この濃密な下草を全て刈り上げられ、大きな蛤の様にプックリと成長した豊かに脂肪を溜めた白い肌の間の亀裂を剥き出しにして、その奥に秘められたその赤黒い肉襞を常に露出させられたらどの様な卑猥な姿を晒す事だろうとカミソリを手にしなが想像した。

夫人を運び込んで綺麗に洗い終えた若い二人の男が、今はやる事も無く手持ちぶさたそうにしていたが、何が始まるのかニヤニヤしながらその様子を眺めた。

下腹に当てたカミソリをスッと引くと、カミソリの通った後に道が出来るようにスベスベとした白い地肌が露出した。

「この立派なモジャモジャの毛が綺麗さっぱり剃り落とされるんだ・・・」

小島が舌なめずりしながら大島の操るカミソリの刃先を見詰めた。

死んだようにジッとしていた夫人であったが、男達の見守る前で剃毛されているという事態に気付く、我に返ったのか、羞恥のあまりヒイッと小さく悲鳴を上げて体を^{すく}めようとした。

「こら！体を動かすと大事な所に怪我をするぞ！」

中島と小島が咄嗟に両足首を掴んで、脚が閉じるのを防いだ。

大島が夫人の大きく開いた両股の間に体を入れて、中島と小島が太股を押さえて夫人の抵抗を防いだ。

その間にも大島の作業は進んでいた。

「お前は、大層立派なおケケをしていたが、綺麗サッパリ剃り落として、娘達より若くなるんだ！」

ほとんど陰毛を削ぎ落とされ、隠しようも無くその姿を晒す夫人の股間を嫌らしい目で見詰めながら、小島が楽しそうな声で笑った。

野卑な男達により、次々と秘部を覆い隠していた羞恥のベールを剥ぎ取られ、卑猥な言葉を浴びせられ続け、両手で顔を押さえて啜り泣いていた。

良く伸びる肉付きの良い髷を指に摘んで、カミソリの刃を柔らかな髷に沿って這わせながら、最後の一本まで綺麗に剃り落とされ、夫人のすべすべした股間は童女のように姿を変えていた。

そして、その中心には童女にしては、余りにも熟れ過ぎた女性器が隠す事も敵わず堂々と姿を晒していたのだった。

石を敷いた洗い場の上に横たわったまま泣きじゃくる夫人の様を男達がじっと見下ろしていた。

大股を扇のように大きく開いたまま、男の目から大切な部分を守ろうとする気配も見せず、夫人が両手で顔を覆ってむせび泣いていた。

容赦無く次々と加えられる残忍な責め苦に、男達の目から羞恥の中心部を隠す気力も喪失したかのようであった。

男達が注視する視線の先には、すっかり茂りを喪失した、蒸かしたての饅頭を連想する柔らかそうな肉付き良く盛り上がった女の丘があった。

そして豊かな盛り上がりを見せる秘丘の直ぐ下には、柔らかい肉厚の髷を割って、ピンク色した最奥の髷が垣間見えていた。

両脚を抱え上げられ、赤ん坊がオシメを取り替えられる時の様な屈辱的な姿勢をとられ、肛門の回りに密生していた恥毛も綺麗に剥ぎ取られて行った。

豊かな肉を置いた双臀を左右から男の手で搔き分けられ、その中心を淫靡な視線に晒しながら、大島は丁寧な手付きでその恥ずかしい菊花の周りに生え揃った黒い草を刈り取って行った。

セピア色した菊の花弁を一枚一枚引き伸ばす様にしてカミソリの刃先で一本一本周囲の毛を剃り落としていく男の粘っこい指の動きと秘所にジッと注がれる熱い視線を感じて、夫人の奥底に秘められた被虐願望が目覚めようとしているのか、直ぐ上の桃の花弁はしっとりと充血し女の匂いを立て始めていた。

そんな、女の本能に基づく身体の変化に夫人はまだ気付いていないのか、女の最も大事な

前ばかりでは無く、最も人に見られたく無い後ろまで、被うべき陰りを失い露出させてしまい、余りの屈辱と羞恥に両手で顔を押しさえてオイオイと泣き続けていた。

先程、あれだけ体内に溜まった汚物を放出し続けた、後ろの孔も今は嘘のようにピッタリと閉ざし、一切の陰毛を失ってスベスベとした白い肌の中心に清楚な白菊にも似た花卉を見せていた。

「どうだ？腹の中にいっぱい溜まっていたウンコを全部放り出して、随分とすっきりしたんじゃないか？」

中島が何事も無かったようにピッタリと閉ざされた菊花を親指の腹で撫でながら聞いた。今は、男達は晴子の脚を掴んでいた手を離していたが、もはや大きく開き切った股間を綴じ合わせる気力も失ったのか、しどけなく開けたまま秘奥を男達の鑑賞に晒していた。

「あんなに糞を撒き散らしやがって・・・一体何時から糞を溜め込んでいたんだ？」

小島が笑いながら声を掛けた。

「腹もすっかりへこんで、スッカリしたようじゃないか？」

大島が中身を全て放出してへこんだ腹を撫で回しながら聞いた。

「それじゃ、俺たちの方もスッカリさせて貰おうか？」

中島がギリギリと天を突くように膨張した、自らの怒張に手を添えると、大股を上げたまま横たわる夫人の上に、ゆっくりと体を重ねていった。

風呂で暖められ、血行の良くなった、蒸し饅頭の様に柔らかい良く熟れた肉を押し広げるように、中島の逞しいモノが夫人の股間に没入して行った。

度重なる責め苦に、抵抗する気力も体力も喪失していた夫人は、ただ無抵抗に中島のモノを受け入るだけであった。

これまで厳粛に貞操を守って来て、夫のモノしか知らない夫人が、生涯において始めて突き入れられた夫以外の男性器であった。

そして、それは夫のものとは比較にならない程、太く固く熱い肉塊であった。

「どうした？旦那とは暫くご無沙汰だったのじゃ無いか？」

中島が前後に腰を振って怒張を突き立てながら、まるで処女のように良く絞まる膣孔のもたらす感触に目を細めながら聞いた。

事実、夫人は若くして二人の娘を産んで、肉体的にも成熟し女性の喜びを熟知し始めた頃

から、夫から性交渉を求められる事も無く、内に性欲を秘めたままこれまで過ごして来たのだった。

肉欲の疼きに眠れない夜もあったが、自分から口に出して求めることは、はしたないことだと堪えて来たのだった。

夫人は夫が外に愛人を作り、最早自分の体には興味を失っていることを感じ取っていたが、夫の愛人に嫉妬の炎を燃やすことは、下世話な庶民の女がすることと、厳然とした貴夫人のプライドが許さず黙って過ごして来たのだった。

夫への愛情は既に失っていたが、あるいは結婚した時から愛情を感じたことは無かったのかも知れないが、それよりは貞節な妻であり二人の娘の厳格な母を演じる方が、今後貴婦人として育っていく二人の娘に取って重要と、貴族の一員としての理性で女体の欲望を押し隠して来たのだった。

しかし、その長い間秘められた性欲が、中島の逞しい男のモノと卓越したテクニックにより、今まさに、深奥から表に引きずり出されようとしていた。

敗戦により貴族としての地位を失ってしまった今となっても、夫への愛情は遠の昔の冷めていていたとしても、賢夫人は二夫に交えずという貴族の夫人として矜持を二人の娘に伝えて行こうと固く決意していたのであったが、今ここに、夫以外の男性を受け入れることになってしまい、貞操を守り通すことが出来ず、二人の娘に範を示す事が出来なかった哀しい気持ちとなったが、激しい中島の腰の動きは、そんな決意を押し流してしまいそうであった。

「ふふ・・・これが侯爵夫人のオ●●●●●●か・・・」

中島が腰を突き立てながら、感嘆したような声を上げた。

女体の最盛期から性交渉をもっていない夫人の体は、その最も熟れた女陰をそのまま封印してあったようなものであった。

既に肉体的にも精神的にも疲弊していた夫人であったが、自分の繰り出す性技の前に徐々に女体が反応を始めていることに、中島は気が付いていた。

貞節を守り通すことが出来ず、野蛮な男に犯されているとはいえ、心では、決して負けることなく拒み通そうと、眉間に皺を寄せ、必死に堪えていた夫人であったが、長い性の封印を解かれた女体は確実に夫人の信念を裏切りつつあった。

何時しか、中島の繰り出す責め棒を豊かな愛液で迎え、内部の柔らかい壁で優しく包み込むように締め付け始めようとしていた。

幾度か激しく突かれる内に、夫人がウッと小さな呻き声を上げて体を反らせた。膣奥から熱い愛液が噴き出し、亀頭を濡らした。

夫人が最初に小さく気をやった瞬間だった。

「もっと強く抵抗するかと思ったが、意外に早く絶頂に達したな・・・恐らく長い間秘めていた女の欲望が、最早抑える事が出来なくなって来たのだろう・・・」と、夫人の肉洞の筋肉に自分のモノを気持ち良く締め付けられながら思った。

その後も色々な体位を夫人に取らせ、濃厚なテクニックで夫人を背徳の性の世界に懊悩させた。

「ああ・・・いい！　ああ・・・出すぞ！」

中島が深く分身を夫人の体内に埋めながら、乾いた呻き声を出した。

中島がこのまま体内に射精しようとしていることを察して、抑制の利かなくなった体のなかで冷静な状態にあった脳の一部が、このまま中島の精を受け入れては、完全の貞節を失い、ふしだらな庶民の女と同じになってしまう！と恐怖して、

「嫌！止めて下さい！」と、悲痛な声で哀願した。

そんな夫人の悲痛な叫びにも躊躇せず、熱い体液を激しく体内に放出した。

自分の膣内に熱い男の精液を受け入れたことを自覚した夫人は、この悪鬼のような男に完全に穢されてしまったことに目眩に襲われたように体から力が抜け、意識が薄らいで行った。

そんな夫人に暫くの休みも与えることも無く、中島は夫人を揺り動かして意識を取り戻させると、夫人の目の前にまだ勃起したままの二人の愛液でヌラヌラと輝る肉棒を突き出した。

これまで、夫のものでも間近に見たことの無い夫人は、まだ朦朧とする意識の中で、自分の秘められた性欲を引きずり出した肉棒を不思議なものを見るようにじっと見詰めた。

中島は構わず、夫人の柔らかい唇に怒張の先を押し付けると、そのまま口内にねじ込んだ。

これまで口腔による奉仕など経験の無かった夫人ではあるが、中島の暴威の前に、恐る恐る二人の精液と愛液の混じり合った肉棒に舌を絡めて、清め始めた。

未経験の舌技は拙いもので、中島を失望させた。

「お前にも順子嬢のように鍛え上げて、ちゃんとした舌使いが出来るようにしてやるぞ！」

と言うと夫人の顔を押しつけた。

中島に代わるように小島が夫人の体に覆い被さって来た。

そして貴婦人としての貞節にこだわる夫人をあざ笑うかのように、その得意な技を繰り広げ、きりきり舞いに舞い上げ追い立て、最後に熱い樹液を胎内に放出した。

小島が満足げに身体を離れた後、間髪を入れず大島が夫人の身体に武者ぶり付いた。

そして老練な小島とは打って代わった若い力で休むことなく夫人を責め上げ、何度も激しい悲鳴を上げさせた。

三人が終わった時には、激しい性交に押し流されるように汚物に塗れたショックは消えて去っていたようであるが、代わりに男達から与えられた酷い肉体的疲労に苛まれていた。

糞尿に塗れた夫人を風呂に運び全身を洗い清めた若い二人にも中島は褒美として夫人と交わる事を許した。

喜び勇んだ若者は3人の猛者から陵辱を受けグッタリと横たわったままの夫人の傍に蹣り寄った。

疲れ切った身体で薄目を開けてボンヤリと男の方を見たが、股間に醜いモノを隆々と押し立てる若者の獣のようにギラギラした眼に射すくまされたように、「お願い・・・もう許して・・・」と、か細い声で哀願した。

「さつきは俺の事をまるで猿でも眺める様に蔑んだ目で見詰めて、派手な溜息まで吐きやがったくせに、何だ？自分のザマは？」

毒づく男に朦朧とする意識の中で、この男が自分がこの屋敷で最初に出会った精神薄弱の使用人かと疑った男だと思い出した。

「貴族の奥方様と威張っていたが、何だ？下賤な男達の目の前で大股広げて自分で腰を振りながら前の穴と後の穴を晒して、その上大勢の見守る前で大グソを垂れやがって・・・口にも一杯自分の出した糞を頬張りやがって！お前こそまるで豚じゃないか！」

「ああ・・・もう仰らないで・・・」

自らの演じた恥ずかしい行為を思い起こさせ、傷口に塩を擦り付ける様に心を踏み躪り、口を極めて非難するこの若者に夫人が涙を浮かべて哀願した。

「この生意気な貴族女には、こうしてやる！」

と、前技も無くいきなり隆起したモノを押し入れた。

その若者の大きさに夫人が身体を仰け反らせて悲鳴を上げた。

もう一人の男が、夫人の身体に手を掛け、ゴロンと横に向かせるとそのまま、秘肉に突き

立てたままの若者の身体の上に押し上げた。

疲れ切り全身に力が入らない夫人は、二人目の男に持ち上げられるままに最初の男の上に覆い被さる形となった。

力を失い開いたままの股間には逞しい男のモノが深々と突き立てられており、男が抜き差しする度につられた様に後ろの門もピクピクと痙攣していた。

暫く、その様を観察していた男が、自分の逞しく盛り上がった部分に手を掛けて、夫人のその部分にあてがった。

二人の若者から前後を貫かれた瞬間、侯爵夫人はこの世の終わりの様な絶叫を上げた。

こうして二時間ほどに渡って、中島達三人と、夫人を風呂に運んだ若者二人の計五人分の精液を胎内に放出されて、ようやく陰風吹き荒れる風呂場から解放されたのだった。

姉妹により、床に散らばった便塊は全て除去し終わっており、今は全裸のまま雑巾で汚れた大理石の床を拭き取らされていた。

四つん這いの姿勢となり、頭を低くして雑巾で床を擦る度に、下を向いた乳房が揺れ、尻が高く上がり、尻奥の隠しておきたい部分が露わに露出した。

男達は腰を屈め後ろから、拭き掃除に合わせて姉妹の尻が柔らかく動くの眺めながら、涎よだれを垂れ流がさんばかりに、楽しそうに姉妹の背後に回ってその姿を目に焼き付けていた。ふと自分達を取り囲む男達をチラッと見て、見てはならない物を見てしまったように姉妹が顔を伏せた。

全裸の男達の股間は毒蛇のように鎌首をもたげ、今にも自分達に襲いかかり、順子のように蹂躪されてしまうのでは無いかと思うと恐怖で体がガタガタと震えた。

その時、「おお、随分と綺麗になったじゃないか！」と、中島達が夫人を引き連れて風呂から帰って来た。

娘達の掃除姿に夢中になっていた男達は、若い組員から両腕を掴まれて連行されて来た夫人の股間に気が付いて喚声を上げた。

「どうだ？ちょっと見ない間に、母親の方が、娘よりずっと若返ったと思わないか？」

と、小島が可笑しそうに大笑いしながら驚いたようにこちらを見詰める男達に言ったので、取り囲む男達が爆笑した。

床に四つん這いになったまま、ふと母親の方を見上げた娘達は、母親の豊かな肉付きを見

せる股間から濃密な繁茂が消え失せ、柔らかく脂肪を載せた股間の中央でこんもりと成熟した左右の肉の襞が暗い影を作って、くっきりと深い溝を間に刻んでいる事を見付けて、見てはならない物を見てしまったかのように、思わず顔を背けた。

「この女、モジャモジャの下にこんな立派なビラビラを隠し持っていたのに、ケチ臭く手で隠そうとするから、両手を後ろに縛ってやった。」と、小島が笑いながら説明した。

男達に引きずられるように現れた晴子は後ろ手に縛られており、隠したい部分を隠す事も出来なかった。

腰を屈めて少しでも露出を減らそうとするのを両側に立つ男達に体を掴まれて無理矢理体を正面に向けさせられ、青白く剃り跡を残す股間を男達の視線に晒すのであった。

新たに加えられた辱めに顔を紅潮させ体を震わせていた。

しかし、夫人が何より恐れたのは、貴族の夫人として、模範的な貞節な妻として、娘達から畏敬の目で見られていた自分が、男達に犯されて貞操を守り通すことが出来なかったのを知られることであった。

五人の男達に連続して暴行を受け、腰は痺れたように力が入らず、左右の男達から支えられていないとくずおれてしまいそうであった。

夫人が恐怖したのは、胎内に注ぎ込まれた男の大量の精液が、疲労して力が入らない股間の割れ目を通して漏れ出て来て、二人の娘に目撃されることであった。

「どうだ？サッパリ邪魔な物を剃り落とした所で、中の様子をこいつらに見せてやったらどうだ？」

羞恥に身を揉む夫人を見詰めながら小島が言ったので、そんなことをされれば、膣内に残された精液が溢れ出し、娘達に目撃されてしまうーと、夫人が青ざめて悲鳴を上げた。

二人の若者に支えられ立ち尽くす夫人の背後に回った小島は、腰を床に落とし両手を前に回すと、見物の男達に良く見えるように夫人の肉襞を左右に押し広げ、その内部のたたずまいを凝視する男達に示し始めた。

夫人を取り囲むように腰を落として、血走った目で下から凝視する男達の視線が痛いほど、夫人の股間に突き刺さった。

夫人が低く呻きながら、全身を赤く染めて恥ずかしそうにナヨナヨと体を揺すった。

床に腰を下ろした小島の目の前には夫人の良く発達した豊かな双臀が在った。そして羞恥に身を染めて体温が上昇すると共に、直前の夫人の股間からは甘い牝の体臭が立ち昇って来るのが分かった。

風呂場で散々男達から責め立てられ燃え上がった女の残り火が、小島の手慣れた手技により再燃を始めたのか、秘所の周りで良く動く、小島の指先の動きに合わせるように啜り泣くような甘い声を立て始めた。

「この女、今日一日でこんな事に感じるように成ったのか？それとも生まれつきそのような素養が在ったのか？」と、次第に強くなる牝の性臭を嗅ぎながら小島は思った。

夫人の花園を拵げて、その外側や内側を撫で回していた指をそっと夫人の肉洞に差し入れた。その瞬間夫人がビクッと体を硬直させた。

夫人の肉洞内は、男達の残した愛液と今又小島の指技より搔き立てられた甘美な密で潤っているのが、内部を指でまさぐる小島に分かった。

小島に指で責め立てられ羞恥に身悶えする夫人を男達は声も上げる事が出来ずじっと見詰めていた。

一層強くなって来た牝の匂いをもっと嗅ぎたくて、小島は顔を夫人の双臀に押し付けると、鼻柱で柔らかい臀肉を押し分け匂いの根源に迫った。

羞恥の源泉に男の鼻を押し付けられて思わず、「アアッ」と、甘い悲鳴を上げた。

全身から力が抜け、思わず崩れそうになるのを両側の男が支えた。

夫人の乳首が硬く凝っていくのが、固唾を飲んで見守る男達に分かった・・・

巧みな手技に股間の緊張が緩み、ドロリとした白い大量の粘液が、小島の指によって押し広げられた秘孔を割って流れ出し、太股を伝って滴り流れた。

まだ知識の無い明子にはそれが何を意味するか解らないようであったが、姉の聖子は良妻賢母の鑑と尊敬していた母親の貞操が無慈悲な男達により、既に踏みにじられてしまっていた事を理解して、激しく鳴き声を上げた。

姉の激しい鳴き声に、ようやく理解したように明子もつられて泣きじゃくり始めた。

夫人は貴婦人としての貞操も守れず、娼婦のように男達に身を任せてしまったことを、娘達に知られてしまった悔しさに唇を噛んで咽び泣いた。

「さて、何時までも我々がここにいと人目に付く恐れがある。一先ずご令室とご令嬢方を新居にお連れしようか・・・」と、中島が言った。

何時の間にか長かった夏の陽も落ちて、周囲に夕闇が迫っていた。

ギラギラとした肉欲に燃えた目をした男達に取り囲まれ、羞恥と恐怖に怯え、床の上に蹲ったまま猿のように身を寄せ合う三人の女に、麻縄を手にした男が、縄をしごき上げなが

ら近づいた。

恐怖に怯えて必死に抱き合う母娘を、力尽くで引き剥がして、一人ずつ床の上に正座させると両腕を無理やり背中に捻り上げた。

両手首を併せて、麻縄で括り上げるとその縄を首の前に通した。

高く持ち上げられた両手首を下げようとする、首が絞められ呼吸が困難となって、女達が悲鳴を上げた。

「ほらほら、もっと胸を前に突き出さないと息が詰まってしまうぞ」

男達に脅され、羞恥に駆られながらも、胸を前に突き出した。

それを良いことに男達は、麻縄を継ぎ足すと、前に突き出した乳房の上下に二重三重と縄を掛けて行った。

乳房の上下に掛けられた縄によって女達の乳房は、括り上げられ前方に向かって卑猥に突き出していた。

床に正座したまま、乳房を前に突き出す扇情的な女達の姿に、周囲を取り囲み男達が舌なめずりをした。

街灯も無く、住人もほとんどいなくなり、真っ暗になった、かつてのお屋敷街の闇を縫うように一台の大型トラックが現れ金田邸の裏口に横付けされた。

「さあ、さっさと歩くんだ！」

取り囲む男達に臀を蹴り上げられて、全裸の母娘が裏口から表に連れ出されようとしていた。

人目の無い闇夜とは云え、全裸のまま屋外に連れ出される羞恥に女達は恥ずかしそうに身を揉んでいた。

「お願いします！何か身に着ける物を下さい！」

「裸で外に引きずり出されるのは、嫌だということか？しかし、お前達の着て来た服は、明朝闇市の掘り出し物として、陳列するため箱詰めしてしまったしな・・・」

何と中島達は元貴族の母娘から奪い取った豪華な着物からシルクの下着までそのまま闇市で売り捌くつもりだったのだ。

目に涙を溜めて哀願する女達に、一人の若者が声を掛けた。

「可哀想だから、俺の褌を暫くの間お貸しするぜ。どうせ俺たちはズボンを履いてりゃ分らないからな・・・」と、言うときズボンを膝まで下げて、自分の身に付けていた長い布地

をクルクルと解き始めた。

これまで華美な服しか身に付けて来なかった貴族の令婦人に、薄汚れた褌をさせようという魂胆に男達が大きな笑い声を上げた。

そして、その男の真似をして他の男達も次々とズボンを下ろすと自分の褌を解きにかかった。

「俺のは越中だが、お母様にお貸しするぜ！」

まだ温もりの残る脱いだばかりの布地をヒラヒラさせながら夫人に迫った。

自分の恥ずかしい所を野卑な男達の目に晒し続けることは堪えられないが、男の不潔な臭いがする汚い褌をされるのも耐え難い屈辱であった。

女達が涙に咽んで、心を決め兼ねている内に、男達が寄って集って、無理やり、解いたばかりの男の体臭を残す布切れを素肌に押し当てて来た。

男達は寄って集って、女達に屈辱の縛めをさせる作業に取り掛かっていた。

一人の男から脚を掴まれて上に持ち上げられ、その隙に別の男から、獣の臭いのような不快な悪臭が漂う様な不潔な布を股座に通され、女達はまるで男達から着衣を奪われる時のような悲鳴を上げた。

「それ！そこをもっと搾れ！」、「まったく、女の褌ってのは、絞めても絞めても、何処までも限りなく食い込んで行くぜ！」

男達は長い間の垢が染み込んで褐色の染みを浮かべた、汗に濡れてすえた臭いを発する不潔な布地を、白くて柔らかい娘達の下腹に押し当て、無理やり股間を開かせ、キリキリと搾り上げながら有無を言わせず装着させて行った。

力尽くで搾り上げられ固いロープのようになった布地が、男の力で容赦無く股間の割れ目に埋め込まれていった。

今の今まで野卑な男が身に付けていた、不潔な布を無理やり股間に押し付けられながら、まるで男達に犯されているような恐怖を感じていた。

男達の変態的行為に、溜まらず娘達が鳴き声を上げた。

こうして、二人の娘には六尺褌が、母親には越中褌が無理やり着せられた。

高手小手に縛られているため、手で覆い隠すことも出来ず、男達の正面を向いた女達の股間には、ついさつきまで男達が身に付けていた薄汚れた不潔な布切れが、股間を挟むように巻き付けられていた。

シミ一つ無い白磁のような令婦人の柔肌に薄汚れた男の下着が食い込む様子は、如何にも

扇情的な姿を作り出していた。

母親の方は、越中褌であったので、褌の前垂れで、剃毛された最も恥ずかしい所を隠す効果はあったが、二人の娘は、柔らかな脂肪を載せた股間の柔肉を押し分ける様に、薄汚れた布が極限まで食い込み、縄のように細く振られた布により押し出されるように局部の肉がはみ出す様子は、何も身に付けていないより一層卑猥な感じがして、男達が隠微な笑みを口元に浮かべて舐めるように眺め回していた。

三人の女の姿を背後から見ると、細く絞った布地が臀肉の間を深々と挟り、豊かな尻の丸みを一層強調しているようであり、扇情的な姿を晒していた。

「オッパイもこれで隠してやろう」と、別の男の脱いだ六尺褌でサラシのように胸の周りを巻き上げて行った。

無理やり所々に黄色い染みの残る褌を胸に巻かれて、女達は涙に咽びながらも男の汗と小便の臭いが鼻腔を襲うような気味の悪い感じを持った。

「女達が騒ぐとうるさいからこれを嵌めておけ。」と、中島が3個の猿轡を手にして男達に渡した。

「随分面白い形をした猿轡ですね」と、手渡された猿轡を繁々と見詰めながら、若い組員が中島に問い掛けた。

「何でもボールギャグとか云うアメリカ製の猿轡だ。順子のアメリカ人の愛人が順子を責める際に使っていたそうだ。」と、中島が応えると、

「へえ、これは姫が使い古したお下がりですか？」と、頓狂な声を上げた。

大小の合成樹脂製の球体を女の達の口をこじ開け押し込むと、ボールに取り付けられた革ベルトで緘口具を手早く固定した。取り付け作業が終わり、女達の小さな口を割って食い込ませた大小色取り取りのボールが取り付けられ、拘束用の革ベルトのデザインも少しずつ違う猿轡を男達がジッと見詰めた。

夫人の緘口具はやや小振りであり、黒い硬質ゴムのボールは口内に完全に没入し両端から延びた革ベルトが後頭部で結び合わされていた。

口の端をこじ開ける様に延びた革紐の間から涎が流れ落ちていた。

姉の聖子の口中に押し込まれた青いボールの直径は余りにも大きく、顎を精一杯に開けさせても口内に収まらず、大半が露出しており、ボールの左右の鉄鑲に取り付けられた何本もの革ベルトにより口から飛び出さないようにガッチリと固定されていた。

2本のベルトは顎下にまわり、もう2本のベルトは、鼻梁の両側を通り額の当たりで一つに纏められ後頭部に回っており、左右に取り付けられたもう2本のベルトと共にまるで覆面を被せるように後頭部でガッチリと固定された。

妹の明子に取り付けられた緘口具は母と姉の間くらい大きさであったが、表面には沢山の穴が開いており、半分程露出したボールの穴からは唾液が滴り落ちていた。

「ヘッ！美人は得だぜ！猿轡で綺麗な顔が歪んでも、また何かそそられるじゃねーか？」猿轡を噛まされて歪んだ顔に加虐者達は蠱惑的な魅力を感じていた。

後ろ手に縛られ両胸を前に突き出し、猿轡を嵌められた扇情的な姿に男達の股間が熱くなった。

「さすがグラマンやB29を作ったアメリカだ！こんな物まで日本製とは違う！」と、猿轡を嵌められて苦悶する女達の姿に、大声で感心する組員もいた。

女達は、全裸の体の上に薄汚い褌を掛けられただけの体を高手小手に縛られ抵抗を封じられ、口には猿轡を詰められて悲鳴を封じられていた。

男達の前で直立する女達の両腕を括り上げた麻縄は、首に回って縛り上げられてため、息苦しさ胸を前に突き出すような姿勢となっていた。

更に、背中から前に回された縄に乳房を上下から挟むように括り上げていたため、男達の前にこれ見よがしに形の良い胸を突き出すような格好となっていた。

扇情的な姿を晒す女達に男達の目が釘付けとなっていた。

上半身を高手小手に縛られているため、自らの羞恥の部分の隠すこともできず、口にはボール状の猿轡を詰められた痛ましい姿を晒していた。

周囲を取り囲む男達は、秘所に厳しく布切れが食い込むという、ある種全裸より恥ずかしい股間を隠す事もまま成らず立ち尽くす母娘を卑猥な目でじっと見詰めていた。

「さあ！行くんだ！」と、トラックの荷台を覆っていたオリーブ色の帆布の幌が開けられ、女達を運ぶ準備が整ったトラックに向かうように命令された。

真夏故に寒さは無かったが、屋外を引き立てられた白い肌に、夜気が突き刺すように感じた。

トラックまでの短い距離を歩くだけでも股間に食い込んだ布地が女達を意地悪く責め苛んだ。

女達が悲鳴を上げて歩みを止めると男達が尻を蹴り上げて歩行を促した。

男達に臀を押されるようにトラックの荷台に押し上げられると、何人かの男達も一緒に乗り込んで来て、母娘の間に割り込むように座った。

表から幌を閉じられると、荷台は真っ暗となり外の様子は全く覗うことは出来なくなった。

女達に体を密着させる男達は、皆押し黙ったまま、女達に手を出そうとはしなかったが、不気味な雰囲気狭いトラックの中の闇を支配していた。

全ての準備が整ったトラックが何処とも無く走り始めた。

真っ暗闇の道路をトラックは止まること無く走り続けた。

途中舗装されていない道路も幾つか走り過ぎ、その都度揺れるトラックの荷台で女達は転げそうになり、両側の男達から支えられた。

揺れる車内で姿勢を崩す度に、股間に通した布が敏感な箇所に意地悪く刺激を送った。

実際に走った時間は1時間にも満たなかったが、女達には永遠に長く続く時間のように感じられた。

トラックが到着したのは中島が仕切る闇組織『太平洋マーケット』の倉庫兼事務所であった。

港に近いこのあたりは商業街で、戦前は、多くの商店や倉庫が通りを挟んで軒を連ねていたが、焼夷弾に焼かれ爆弾で破壊され、今は中島の占拠するコンクリート製のビルを残しただけで、周囲は焼け野原と化しており、そこにいくつかのバラックが建てられ仲間の闇商人達が寄り添うように暮らしていた。

鉄筋コンクリート製3階建ての中島のビルも壁面は焼け焦げ、3階の屋根は爆風で吹き飛び、屋根にトタンを敷いて何とか風雨の侵入を防いでいる状態であった。

「着いたぞ！降りろ！」と、幌を塞いでいたゴムバンドが外され、表から幌を開けられて声を掛けられた時、3人の女は長時間蒸し暑い狭い車内に得体の知れない男達とすし詰めにされていた恐怖感と疲労感でぐったりとしていた。男達は命令されているのか、車内で女達に悪戯することは無かったが、暗闇の中で押し黙ったままの男達に取り囲まれて気が休まる余裕などなかった。

開け放たれた荷台の中に夜気が入り込んで来た。蒸し暑い空気であったが、それでもすし詰め荷台よりは良いのか男達がホットしたように背伸びをした。

すっかり憔悴し切った女達は自分で歩くことも出来ず、男達に抱き抱えられるようにトラ

ックから降ろされた。

焼け野原の中に、壁面が焼け焦げ半分壊れたようなビルが漆黒の闇を背景にして建ち、女達に不気味な不安感を与えた。

「さあ、これからお前達の新居にご案内しよう」と、猿轡で言葉を封じられた女達を一瞥すると中島が先に立って歩き始めた。

今回留守番役にまわされた若い組員達が、中島達が到着したことを知ると、ビルからドヤドヤと駆け寄って来た。

そして、トラックから担ぐように降ろされてきた恥ずかしい姿をさせられた美女に、目が釘付けとなり思わず歓声を上げた。

すっかり憔悴して歩く事も出来ず、男達に抱き抱えられて女達が、ビル一階の倉庫の中の迷路のような積荷の間を進んで行った。

大勢の男達が興味深げにその後に続いた。

建物の一番奥まで進むと突き当たりに物置小屋ほどもありそうな大きな木箱が置かれていた。

その重そうな木箱を男達が3人掛かりでズルズルと引きずるとその下に、地下に続く階段が現れた。

「ここが、お前達がこれから暮らす新居だ！お前達の豪邸の様に豪華では無いがな。」

と、中島が怯えたように真っ暗な地下室に続く階段を見詰める女達を眺めながら、面白そうに声を掛けた。

先に階段を降りた若者が電灯のスイッチを入れたので、地下室全体がパッと明るくなった。

怯えた目で地下室を見下ろす女達に、早く階段を降りるように命じた。

男達に取り囲まれるようにして、フラフラする足つきで階段に脚を踏み出した。

一歩脚を伸ばした時に、股間に硬く食い込んだ布地が強い刺激を与えて、思わず悲鳴を上げた。

「へへ・・・何をモジモジしてやがんだよ！早く降りねーか！」

階段の途中で立ち止まってしまった女達をニヤニヤ見詰めながら声を掛けた。

男達の身に着けていた不潔な布切れが深く食い込んだ股間の佇まいを薄ら笑いを浮かべながら下から見上げる男達もいた。

「降りれねーなら、手伝ってやろうか？」と、周囲を取り囲んでいた男達が、胸の縛めや

縄を掴んで女達の身体を持ち上げるようにした。

柔らかな肉体に強く縄が食い込む激痛に女達の悲鳴が上がった。

取り囲む男達から様々ないたぶりを受けながら、ようやく地下に達した。

裸電球が照らす地下室は何も無いコンクリートを打ちっ放しにしかただけの簡素な作りであった。

そして、だだっ広い地下室の端には鉄格子で仕切られた幾つもの部屋が監獄の檻のように作られていた。

コンクリートを打ち放しにしかただけの床にしゃがみ込んだ母娘は、その不気味な佇まいに怯えた目をしてじっと見詰めていた。

中島が顎をしゃくって、子分達に母娘の猿轡を外すように命じた。

口の中に無理矢理ねじ込まれていた大きな合成樹脂製のボールをようやく外され、女達はようやく人心地付いたが、男達は外した母娘の唾液に濡れたボールの匂いを嗅いだり、舌を出して表面を舐めたりして面白がるのを見て、まるで自分の唇が奪われているような気味の悪さに襲われ、小さく悲鳴を上げた。

依然高手小手に縛り上げられたままであったが、女達は少し精気を取り戻し始めたのか、晴子が中島の方に哀願の表情で見詰めながら、

「お願いします！もう私たちに酷いことをしないで！私たちを帰して下さい！」と、鳴くように叫んだ。

女達の哀願をニヤニヤと薄笑いを浮かべながら聞いていた中島は、

「そうはいかな・お前達は賭けに負けたんだ。」と、冷たく言い放った。

順子との掛け勝負

中島の冷酷な宣告に、母娘達は身を振って泣き叫んだ。

女達が悲嘆にくれる様子に少し哀れみの感じたのか、

「そうさなあ・賭けに挑んで負けたのはお前達の母親だから、母親は許す訳にはいかな・お前達の母親は賭けに負けた責任を取って、賭の代償としてこれから順子のように男達の慰み者になるんだ！」

中島の非情な宣告に晴子が悲鳴のような悲痛な声を上げた。

自分達が実際にこの目で目撃した、順子を容赦無く責め罵る残酷な男達の行為が蘇り、

「アアッ！可哀想なお母様！」と娘達も涙を流した。

「しかし、賭けに挑んで負けたのはお前達の母親一人だから、母親は仕方無いとしても、お前達も賭の贅にするのは可哀想かも知れないな・・・」

と、顎を手で撫でながら考える様にして、

「・・・どうだ？お前達もう一度、自分自身で賭けてみないか？勝てば勝った娘だけは、許して帰してやろう・・・」と、言った。

この男達の事だから、また恐ろしい事を考えているのではと思ったが、もし一人でも中島が提案する賭けに勝てば、約束通りこの地獄のような場所から帰して貰えるかも知れない！

そうすれば警察に駆け込んで救助を頼めるかも知れないーと、言う期待に、賭を受けると言ってしまった。

どうすれば良いのですか？と問い返す娘達に、

中島はニヤニヤと笑いながら

「何、簡単な事さ・・・」

と、床に蹲る聖子と明子の下腹を撫でながら、

「お前達、今日お通じがあったか？」と尋ねた。

突然の不躰な質問に二人の娘は顔をカーッと赤らめて俯いてしまった。

二人とも最近便秘がちでここ数日の間も便通が無かったのだ。

「どうやら無いらしいな？」と、娘達の仕草で読み取った中島が卑猥に片頬を歪めると、便秘も直ってここから無事出られる方法があると言った。

そして、後ろを振り返ると

「おい！姫はもう着いているか？」と手下に聞いた。

「今着いたところですよ！」と、階上から牛田の声がして、鞭が女の柔肌を叩く音と女の悲鳴が階段から聞こえて来た。

ふと見上げると地下に通じる階段を首に犬の首輪を付けられた全裸の順子が牛田に首輪に付いた鎖を握られて降りて来た。順子は後ろ手錠をされている為、恥ずかしい正面の部分を隠すことも封じられ、剃毛された艶々と輝る童女の様な様子を晒すくつきりとした割れ目を隠す事も出来ず、階段の下から見上げる男達に、階段を降りる足運びの度にその秘めら

れた内部構造を晒していた。

順子の足の運びが遅くなると、牛田は右手に持った先が幾つにも割れた革製の鞭を振り上げ、容赦無く順子の尻を叩いて、鋭い打撃音と順子の悲鳴を上げさせた。

終戦を間近に控えたあの日、金田邸に押し入り想像を絶するような、淫らな拷問を金田伯爵の母娘に加えて以来、アメリカ人の愛人から日夜尻を鞭打たれ、順子の尻は鞭で鞣されたように大きく肥大して、幼かったあの時の面影は消え失せ、まるでベテランの娼婦のように熟れた体付きになって来たな—と、牛田に押されるように階段を降りてくる順子を見詰めながら中島は思った。

「賭と言うのは他でも無い・・・この順子が最後に小便を流し込んだ事によって、お前の母親は賭けに敗れお前達の体は俺たちが貰う事になった。・・・言わばこの順子はお前達の憎い仇では無いか？」

と、床に蹲る浦川侯爵家の母娘を見回しながら中島が言った。

浦川家の女達は頭が混乱して、どう答えて良いか判らず黙って下を向いていた。

確かに順子様が私たちをお茶に招待しなければ、こんな事態には成らなかった。これは順子様が私たちに仕掛けた罠では無かったのか？

でも、私たちが訪問した時には順子様は言語に絶するような暴行を男達から加えられていた—だから順子様も私たちのように犠牲者なのでは無いか？

でも、順子様が最後にあんな事を為さなければ、私たちは賭けに勝って無事に帰る事が出来たのでは無いか？

言わば、順子様はこの男達の協力者なのでは無いか？

でも、今また全裸で鞭打たれる順子様がこの男達の協力者であるとは信じられない・・・

と、女達は今日一日起きた余りにも異常な事態が走馬燈の様に頭の中を駆け巡るのであったが、頭が混乱するばかりで考えがまとまらなかった。

中島はしゃがみ込む女達の前に蹲踞して、女達一人一人の目を覗き込むようにしながら、「そこで、順子と勝負するんだ！・・・二人とも順子に勝ったら二人とも、このまま返してやろう。一人が勝って一人が負ければ、勝った方は返してやろう。負けた奴はここに止まる事になって男達に身体を委ねる・・・て、言うのはどうだ？」

と、女達が混乱した頭を振り続けて沈黙しているのも構わず、中島が喋り続けた。

ひょっとすると無事ここから逃げられるかも知れない！と、一縷の希望を掴んだかのよう
に娘達の表情が明るくなった。

中島と呼ばれるこの組織のボスは、お母様は賭けに負けたのだから、このまま組に据え置き、順子様が受けた様な暴行を加えると言っているが、もし、どちらかでもここから逃れることが出来れば、直ぐに警察に連絡して、お母様を救出することが出来るかも知れないと考えた。

「分かりました！賭を受けます！・・・どうしたら良いんですか？」

姉の聖子がキッパリと言った。

「なに・・・簡単な賭けさ・・・お前達の母親が受けた様に、順子を含めて、お前達3人に同時に浣腸をする。浣腸の苦しさに耐え切れず順子より先にぶちまけたら、お前達の負け。順子が我慢出来なくなっても、お前達がまだ我慢出来ていればお前達の勝ち。どちらか一人でも順子より我慢出来れば、そいつだけはそいつは許してやろう・・・」

浣腸と聞いて、母親が晒した凄まじい崩壊を思い出して娘達の顔が強張った。

その不安げな様子を見て、中島が、

「心配するな。お前達の母親が受けたのとは違うただの浣腸だ。あんな大きな道具は3つも無いさ・・・」と、言うのと、子分に何かを命じた。

早速、子分が3つの紙箱を抱えて戻って来て中島に手渡した。

紙箱を女達の目の前で開くと中には大きな注射器のようなガラス製の浣腸器が入っていた。浦川家の母娘はその巨大なガラス製の器具を不気味な物を見るようにじっと見詰めた。

「200CCの浣腸器だ！お前達はこれを2回、都合400CCぶち込まれることになる。たったの400CCだ！お前達の母親がぶち込まれた量の十分の一位さ・・・」と、中島が怯える娘達を見詰めニヤニヤ笑いながら言った。

怯えた目をした晴子がオロオロと娘達の方を見た。

「やります！」と、中島の目を見詰めて聖子がキッパリと言い放った。

浣腸責めが女にとってどんなに恥ずかしい責めか想像は出来るが、それに堪えることが出来れば救出される可能性がある一と、思うと谷底に身を投げ出すような悲壮な決断で宣言したのだった。

聖子の気丈な表情に中島は満足げに肯いて、うつむき続ける明子にも確認した。

明子も諦めたように、気弱げに同意した。

賭が成立しことに満足した中島が、立ち上がり子分に準備を命じた。

「こんなモノを絞め込んでいたら、浣腸も出来ないからな・・・」と、男達が、娘達の羞恥の部分隠していた布切れを緩め始めた。

「アア！イヤ！」唾棄すべき男達が身に付けていた不潔な布とはいえど、剥ぎ取られて元のように恥部をこの恐ろしい男達の目に晒すことになる！と羞恥で女達が悲鳴を上げた。

「そうは、行かんさ！お前達に褌をお貸ししたお陰で、俺たちのチ●●ンはズボンの中で収まり所が無くてブラブラしているんだぜ。いい加減に返して貰わないとな・・・」

母親からも褌を剥ぎ取り、三人の貴族の女は、素肌にかけられた縄を除いて、元通りの一糸纏わぬ全裸姿を男達の目に晒すことになった。

母娘から奪い取った、まだ温みの残る布切れを手にししながら、「おや！なんだか湿っぽいぞ？」と男達が頓狂な声を上げた。

男達が女性の大切な部分に接触していた布地の部分を拵げながら繁々と観察した。

「これは、汗か？小便か？それとも・・・」

十分な舗装もされていない道路をトラックの荷台で乱暴に揺すられて、ここまで連れて来られて、その間、股間に固く食い込んだ布の刺激を受け続け、思わず胎内からの分泌液で濡らしてしまった事を思い出し、娘達は顔を赤くして俯いた。

「妹の方は、小便臭いぞ！」

男が明子の股間に触れていた水分を吸った染みのように部分を拵げて、自分の鼻の傍に持って来てツンとする臭いを嗅ぐ仕草をした。

「馬鹿！それはお前の小便の臭いだろう？」

と、別の男が声を上げたので皆で大笑いとなった。

「おや、母親の方はザーメン臭いぞ！」

晴子に貸していた褌を、取り戻した男が、イヤらしい目付きで夫人を見詰めながら言った。

胎内に留まっていたままの五人分の精液が流れ出し、褌を濡らしていたのだった。

「こんなネバネバする褌を着けられるか！良く洗って貰おう！」と言うと男は晴子の口を無理やりこじ開け、褌のその部分を口内に押し込んだ。

自分を犯した男達と、着古した褌に染み込んだ男の不潔な臭いが、口内に充満し思わず目眩がするようであった。

「このまま口の中で綺麗に洗濯が終わるまで、口の中に入れておけ！」と褌を夫人の口内に押し込めたまま、娘達が絞めさせられていた褌で、夫人が吐き出さないように猿轡のように縛り上げてしまった。

娘達の分泌液が染みとなって残る大きく拵げられた布地が鼻柱を覆い、鼻腔からも愛娘の甘い香りと男のすえた臭いが交ぜとなって流れ込んで来た。

一方では準備は着々と進められ、汚物が飛散した時の準備のためか、子分達が総出で床の上には新聞紙を敷き詰め、その上にゴム引きのシートを敷いた。

その傍らでは、別の男達がブリキのバケツの中に茶色い硝子瓶に入った透明の液体を注ぎ込んでいた。

ガラス瓶にはグリセリンと書かれたラベルが貼り付けられているのを女達は見ていた。

二本の硝子瓶の中の液体をバケツの中に入れると、空き瓶に水を詰めてバケツの中に入れてグリセリンを原液の2倍の薄さに薄めて浣腸液の準備をしていた。

男達は浣腸器を手にとると、それをバケツの中に突っ込んで、攪拌棒代わりにして中身を良くかき混ぜて浣腸液作りを終えた。

床上のゴムシート張りも終わり、裸の三人の若い美女達がその上に一列に並んで正座させられていた。

浦川家の娘達は相変わらず両手を後ろに高手小手に縛り上げられた上体で順子は後ろ手錠のままであった。

牛田を初めとする3人の若い男が、それぞれ1本ずつ浣腸器を手にとると、何やら楽しげに話しながら、グリセリン浣腸液の入ったバケツを取り囲み、一斉に浣腸器をその溶液の中に漬けて中の液を吸い込み始めた。

溶液の吸引が終わると浣腸器を上に向けて、先端に溜まった空気を押し出し、それぞれ200CCずつの浣腸の準備を終えた。

中の液を溢さないように女達の前に戻って来るのを確認して、女達の傍に控えていた男達が、正座していた女の上半身を支えてゆっくりと前に押し倒した。

顎と胸が床に着いて上体を支えて、両脚を少し開いて尻を高く上げた姿勢になるようにした。

後ろ手に縛られているため、両手で上体を支える事が出来ず、尻を高く上げて前に屈む姿勢となり、秘部が丸出しに成る屈辱的な姿勢を取らされて、女達が羞恥に顔を真っ赤にした。

自分達で賭を受ける事を約束したのではあるが、その余りに屈辱的で恥ずかしい姿勢に姉妹は、涙を浮かべてイヤイヤと首を激しく振った。

真上から照らす裸電球の明かりで、女達の二つの恥ずかしい部分は煌々と照らされて、

その柔らかい花園の襞や菊花の皺の一本一本までが丸見えとなり、女達の後ろに立つ男達は、舌なめずりしてその部分を凝視していた。

「順子姫様には俺がぶち込んでやるぜ！」

牛田が順子の高く掲げた尻の後ろに立った。

聖子と明子の後ろには、別の若者が浣腸器を手を持ち、位置に着いた。

中島が肯くのを合図に、男達は同時に浣腸器の美女達の肛門に突き立てた。

ヒィー！アアイヤッ！と浦川家の娘達が悲鳴を上げた。

女達の悲鳴や悶絶にも躊躇すること無く、男達は柔らかい蕾を挟んで嘴管を深く突き刺すと、力強く内部に蓄えられて液を、女達の体内に注入し始めた。

生ぬるい液体が、腸内に逆流してくる違和感に娘達が悲鳴を上げた。

牛田は、浣腸器が空になるとスポッと音をさせて抜き取り、後ろに立つ男に手渡した。浣腸器を受け取った男は嬉しそうに、浣腸液の入ったバケツに小走りに走り、中の液を硝子容器内に吸い上げ始めた。

聖子と明子に浣腸していた男達も、空になった浣腸器を後ろの男に渡し、浣腸器のリレーを完了した。

浣腸液を満たしたガラス器具を受け取った男達は、楽しそうに嘴管の先で若い女の尻穴を蹂躪し、女達に羞恥の悲鳴を上げさせながら、その中身を思い切り注ぎ込んだ。

こうして、女達は男達から都合2回、合計400CCの浣腸液を注ぎ込まれたことになる。

濃厚なグリセリン溶液はたちまちその効果を現し、女達の腸内をゴロゴロと刺激し始めた。最初の内は腸全体が動くようなゴロゴロとした刺激やグルグルと腸の鳴る大きな音を周りを取り囲む男達に聞かれることに恥ずかしさを感じていた娘達であったが、次第に大きく激しくなって来る腸の痙攣に顔を苦悶に歪め始めた。

女達が全身を真っ赤にして、身を屈め、腹を揺するのを見て、男達は今女達を内部から襲っている苦痛を想像して厭らしい笑いを浮かべた。

今や、女達は全身に汗を浮かべて、腸を焼くようなグリセリン液の誘発する排泄の衝動と戦っていた。少しでも気を抜けば直ぐにでも肛門を割って内部から噴き出しそうに感じていた。

何としても堪えに堪えて、先に順子様が恥ずかしい様を晒すまで耐え抜かなければならないと娘達は必死の思いで、順子の方を見詰めた。

順子も今は高く掲げた尻をビクビクと揺さぶり、汗まみれとなって、苦悶の呻きを上げて

いた。

本来隠して起きたい恥ずかしい場所を男達の目に堂々と晒して、羞恥心もかなぐり捨てたかのように汗に塗れて秘部をピクピクと痙攣させる、そんな女達の断末魔の身悶えぶりを、涎を垂れ流さんばかりに男達が見詰めていた。

「アアッ！ もう漏れてしまう・・・お願い！ 栓をして・・・」

順子が牛田の方を見詰めて媚びを売るように哀願した。

順子の媚びを含んだ潤んだ瞳に見詰められ、牛田はぞっとするような色気を感じて思わず、「良いとも、良いとも・・・」と、言う、足下に置かれていた木箱の中から何やら張り型のような物を取り出した。

それは、まるで画鋲を大きくしたような形をしており、画鋲の針の部分は太い張り型となっており、根元の部分は画鋲の鏝のように平らな円盤となっていた。

そして、その長くて太い張り型は先が丸みを帯びた円錐を3個差し重ねたような形状をしており、ガスのゴムホースを刺すガス管部分の戻り止めの形状を更に誇張したような構造となっていた。

その三段の円錐は根本に行く程太くなっており、一番下のキノコに似た傘の開いた極端に大きな部分の直径は優に8センチはありそうに見えた。

ガス管に刺したゴムホースが戻り止めの効果で容易に抜けないように、その醜怪な物を女の後門に差し込めば容易に抜けない事が想像された。

牛田はその太い張り型部分を順子の悶える菊花に押し当てると、思い切り力を込めてズブズブと順子の腸内に押し込んで行った。

その太い張り型の挿入による強い圧力を後門に受けて、床に顔を押し付ける順子が白目を剥いて体を悶えさせた。

順子の肛門の周りの肉を引きずりながら、最初の戻り止めの太くなった部分が、関門を通過した時、順子が思わずウッと声を上げ尻を痙攣させた。牛田はこれに構わず力を込め続け次の戻り止めも押し込もうとしていた。

順子の苦痛にも躊躇することなく、完全に張り型部分を腸内に挿入し終わると、牛田は、腸内の圧力で栓が飛び出さないように、後ろ手錠をした順子の両手で鏝の部分を押さえさせた。

順子が牛田の手により肛門に栓をされていく様子を見ていて、浦川家の娘達は不公平だと

思った。肛門に蓋をされた順子の方が自分達より圧倒的に有利だと思った。

しかし、自分達にはあのような太い物を受け入れることは到底不可能だとも思った。

「どうだ？お前達にも尻の穴に栓をしてやろうか？」

中島が娘達の考えを見透かすように尋ねた。

手には順子の肛門に押し込んだような張り型を手にしていた。

しかし、中島が手にする肛門栓の大きさは先ほど順子に押し込んだ物と比べて遙かに細く、画鋲の針の部分に当たる軸の直径は最も太い部分で2センチ程であり、柔らかなゴムで出来ており、途中に抜け止めの突起の無い筒状であった。

あれなら自分達の肛門でも受け入れる事が出来るかも知れない、と娘達は思った。

良く見ると張り型の先の方から中間に掛けて、柔らかな薄いゴム膜で出来た直径6センチほどの帽子の鏝のような物が3枚付けられていた。

中島は娘達にその肛門栓を示しながら面白そうに説明し始めた。

「どうだ？良くできているだろう？この先端から真ん中に掛けて張り型に取り付けられたゴム膜が直腸に押し込んだ後、中で開いて液漏れを防止するようになっているんだ・・・」
中島の長広舌の説明の間にも、肛門を引き絞って噴出を先延ばしするのは限界に達していた。今この瞬間にも吹き出しそうな切羽詰まった状況に置かれて、良く考える余裕もなく、

「お願いします！早く、私たちにも栓をして下さい！」と、悲鳴のような叫び声を上げた。

中島は女達がこちらの用意した罠に掛かったと内心ニンマリとほくそ笑んだ。

中島の意を受けた男達が、そのおぞましい器具の先端に油を塗すと、娘の背後に回り、ひくつく肛門に張り型の先を押し当てた。

直径2センチほどの先端が丸くなった柔らかいゴム製の棒であったが、初めて受け入れる異物に肛門が激しく抵抗した。

「おら！少しケツの穴の力を抜かないか！・・・と、言っても力を抜いたら中から糞が飛び出してしまうか？」

と、男が口元に卑猥な笑みを浮かべて、聖子の菊の蕾を押し開く様に力を込めながら、腸の内部から突き上げるような抵抗を楽しんでいるかのように徐々に押し込んで行くのであった。

先端が菊花の中に沈むと、その直ぐ下に取り付けられていた薄いゴム膜の鏝が傘が萎むように肛門の中に消えていった。そして更に二枚目、三枚目のゴム膜が周囲の肉を引きずる

ように内部に没して行った。

隣では悲鳴を上げる明子の菊花を割ってもう一人の男が肛門栓を力尽くで押し込んでいた。尻を男達の方に突き出し、苦痛に耐えながら、肛門に太い杭のような栓を押し込まれて行く娘達を母親の晴子は涙を浮かべながらじっと眺めていた。

男達は無理矢理力づくで張り型を押し込み、とうとう根元の鏝の部分までねじ込む事に成功した。

ところがしばらくすると、直腸を突き上げるような強烈な内圧に負けて、娘達の股間に根元まで突き立てた張り型の鏝の部分が、ジワジワと押し上げられ始めた。

「ほら、しっかりと表から押さえていないと、折角嵌めた栓が抜けてしまうぞ！」と、肛門栓を突き立てる作業を終えた男が、内部からジワジワと迫り出して来る肛門栓を見詰めながら言った。

「・・・と、言っても両腕を高手小手に縛られていたら、鏝を押さえることも出来ないか・・・」と、笑いながら言った。

「姉妹で互いに鏝を押さえさせると言うのはどうだ？」

中島が口を挟んだ。

「姉妹で尻を突き合わせて鏝の部分を重ね合わせて押し合うのだ！」

と、中島が具体的に方法を指示した。

明子と聖子の傍に立つ男が肛門に嵌められた栓を飛び出さないように手で押さえながら、姉妹の位置を少しずつ変えて、互いの尻が接するように位置取らせた。

腸内の強い水圧を直腸内で広がったゴム膜で受け止める状態となっているため、圧力に押されてジワジワと肛門栓全体が押し出されようとしていた。

その二人の腸内の強い圧力に対して互いの肛門栓の鏝を重ね合わせる事により対抗させようとの考えであった。

二人に腸内圧力が等しかったのか、触れ合い、重なり合った肛門栓の鏝は二人の丁度中間の位置で止まった。

内部からの圧力によりジリジリと押し出されていた肛門栓が、突然強い力で外部から押し返されて、その強い反作用に姉妹は体をビクッと震わせて短い悲鳴を上げた。

「そうだ！そうやって二人で栓を押し付け合っていたら、栓が飛び出すのを防ぐ事が出来るだろう。」

と、見守る男達が互いに尻を押し付け合いながら身悶える姉妹に声援を送った。

姉妹は既に限界を超えて、腸内から突き上げる苦痛と闘っていた。

聖子の肛門の周りが膨らみ菊の皺を伸ばすように肛門が迫り上がるのに伴って栓がジワジワとせり上がって来て、互いの鏝でつながり合った明子の張り型を明子の肛門内に押し込んだ。

この時押し込まれる肛門栓に引きずられるように明子の肛門の周りも徐々に内部に押し込まれて行った。

そして、これにより外部より栓を押し込まれたことにより腸内の圧力が急増した明子の腸内では急激に蠕動運動が活性化され、より強い圧力を発生し、外圧に抗して肛門栓を押し返し、逆に聖子の内部に張り型を押し込んだ。

そして、明子に押されると今度は聖子の腸内の活発化し、強い圧力を誘発して、これに抗して押し返した。

張り形の根元に当たる鏝の部分を互いにピタリと密着させ、まるで一つの器具の様に接したまま姉妹の肛門を挟む二本の肛門栓が二人の尻の間でまるでピストンのように往復運動をし、その都度互いの肛門周りの栓を食い絞める筋肉を引きずり出入りしていた。

そして、肛門栓が姉妹の間で行き来する度に、互いの腸内圧力を増幅させ、便意を更に一層高めて行くのだった。

その間、表からは見えない、直腸の内部では傘のように開いた薄いゴムの膜が直腸内部の圧力を受け止めて腸腔一杯に広がり、姉妹の腸を擦り上げ、内部からイヤらしく刺激するのであった。

「姉妹が互いに助け合って崩壊を堪えるところなんか、中々美しい姿では無いか。」

中島がニヤニヤ笑いながら、互いに尻を高くもたげ、油汗を流し、顔を苦痛に歪めながら互いの尻を押し合い、必死の努力を続ける姉妹の姿を眺めながらからかったのも、周囲の男達が爆笑した。

姉妹はそんな男達の野卑な笑いに気を回す余裕も無く、気が狂い出しそうな苦痛の中で必死に互いに肛門内に挿入されたピストンを押し合っていた。

一方、順子も激しく荒れ狂う腸内の圧力に責め苛まれていた。

後ろ手錠された両手で必死に肛門栓が飛び出す事を押さえながら、体内から怒濤のように押し寄せる苦痛に、全身蒼白となりゴロゴロとシートの上に身を転がして悶絶していた。

順子が不自由な手で栓を外から押さえ付けようとしても、強い腸の圧力に押された栓はジワジワと外部にせり出し、一つ目の尻止めが肛門を見る見る開いて外部に飛び出し、あ

と少しで二つ目の戻り止めも飛び出しそうになるのを、最後の力を振り絞って必死に内部に押し込んだ。

荒れ狂う腸内圧力に抗して外部から押し込まれたことによる圧力に順子が苦悶の呻き声を上げた。

順子は既に限界を迎えている様子であり、あと少しだけ互いに頑張り合えば勝てるという希望を感じた晴子が、禪の猿轡を填められているため声にすることは出来なかったが、「頑張って！あと少し我慢すれば勝てるのよ！」と、苦闘する姉妹に心の中で声援を送った。不自由な後ろ手の体勢では、強烈な圧力で押し出されてくる栓を何時までも押さえ付けて置く事は出来ないと感じた順子は、ふらつく上半身を起こして尻餅をつくような姿勢を取り、肛門栓の鏝を床に押し付けて、一機にしゃがみ込み、自分の全体重を肛門栓に掛けた。そのため、太い張り型が一機に深く腸内に沈み込み、腸を突き上げる激痛に激しく悲鳴を上げた。

出口を失った腸内の汚物が内部で荒れ狂い、その苦しさに順子は口を大きく開いてハアハアと息をしながら、背中を掻きむしり、全身を激しく悶えさせていた。

浦川姉妹の尻の間のピストン運動は次第にその大きさと速さを増しつつあった。

そして、それが現在の姉妹の苦痛の強さを現している事が見守る男達には分かった。

姉妹は肛門を必死の思いでギュッと締めつけても、浣腸液により溶かされた内部の液体は肛門栓と肛門壁の間を通して外部に染み出始めていた。

そしてこの液体が潤滑するように互いの肛門栓のピストン運動は次第に滑らかな物となっていた。

腸内の液に濡れて艶々と輝る張り型が今や非常な速度で姉妹の間を往復し、その振幅も驚く程大きくなっていた。

肛門を通過する張り型の大きさと、直腸内部を柔らかく掻き上げるゴム膜により二人はこれまでの人生で受けた事の無い、言葉に出来ないような刺激を与えられていた。

二人の張り型を食い絞める肛門からは、黄色い内部液が染み出し、その下の花園に流れ込んでいた。そしてその液を受ける肉洞からは別の透明の液が流れ始めその色を薄めていた。二人の肉の襞の合体する部分に在る木の芽のような蕾がハッキリと首をもたげているのが見守る男達に分かった。

そして互いに股間を絡ませ合って、目覚め始めた欲望を慰め合うかのように、その隆起した木の芽を姉妹で無意識に擦り合わせ始めていた。

「ふふ・・・この想像を絶するような苦痛の中で姉妹が発情し始めたな・・・」

と、中島が内心ほくそ笑んだ。

尻に穿たれた栓が滑らかに出入りするようになり、苦痛の限度を遠の昔に通り越して、朦朧とし始めていた姉妹の体に、常識とは懸け離れた変化が起きていた。

限界を超える苦痛が何時しか姉妹の心に不思議な陶酔感のような物呼び覚まし、互いの窄まった肛門を激しく出入りする張り型と直腸を内部から搔き上げるゴム膜が、その陶酔感をより一層強く燃え上がらせていた。

「男を知らない処女でも尻で感じる物なのか？」

中島が感心したように姉妹をじっと眺めた。

突然、明子が讒言のような呟きを残して、そのままバツタリと前に向かって倒れた。

互いに尻を押し付け合う事により平衡していた一方の力が突然失われて、支えを失った明子の肛門から栓が内部の強い圧力により押し出され、ロケットのように飛び出し、それにつられて夥しい量の液状便が肛門を割って噴き出し、聖子の尻と背中に激しく叩きつけた。そして一方、明子の汚物を浴びせられた聖子も、最早外部から押さえ付ける力を失った肛門栓を遠くまで吹き飛ばし、シートの上に倒れ伏す明子の白い体に汚物を吹き掛けた。

この姉妹の悲惨な様子が晴子が悲鳴を上げて泣き叫んだ。

「この賭は姉妹の負けだ！」と、中島が冷酷に宣言した。

「良く頑張ったな！」

と、声を掛けられ、牛田に手を取られて中腰になった順子の尻の下にバケツが置かれた。最後まで必死の思いで耐え抜いた順子が緊張を解くと肛門栓ごと吹き飛ばすように激しく腸内の物をバケツ内に噴出した。

一方、浦川家の姉妹は死んだように身動きをせずシートの上に倒れ伏していた。

姉妹が死んでいない事を示すのは、二人の吐く荒い息で肩が忙しく動くことと、時折ビッと鋭い音を立てて互いに放出し合う茶褐色の液の噴出であった。

未だに体内に残る苦痛の痕跡を互いに間欠的に吐き出しながら、二人は互いにドロドロとした粘状の便を相手の体に吹き掛け合い、互いの白い体を穢し合っていた。

地下室には女達が放出した汚物の匂いが充満し、晴子の悲鳴にも似た鳴き声が飴していた。

恥辱のショーの予行演習

中島達が占拠するビルの中には一応浴室は在ったが、空襲で破壊されその機能は喪失しており、男達は、大きなドラム缶2本にお湯を沸かして浴室に運んだ。

準備が整ってから、汚物に塗れて、すすり泣きして、ぐったりとする娘達を数人懸かりで、浴室に連れ込んだ。

男達に何度もお湯をかけられて、背中から下半身に掛けてこびり付いていた、互いの糞便は、まるでかさぶたが落ちるように流れていった。

汚物を綺麗に落とした後、男達は石鹼を泡立て、いまだ放心したように抵抗の無い姉妹の体を洗い立てた。

「流石に、進駐軍の石鹼は泡立ちも良いし、匂いも違うわ！」

男達は前後から取り囲むように洗い場の床に腰を下ろした娘の裸身を洗いながら、ご機嫌で若い女のすべすべした張りのある裸身に触れることを楽しんでいた。

米国製石鹼特有の強い芳香が娘達の体から不快な排泄物の臭いをぬぐい去って行った。

男達は綺麗に洗い終えた娘達を、ドラム缶の湯船の中に漬けた。

「今、庶民はまともな風呂に入ること出来ず、ドラム缶の風呂を使っている人も大勢いるが、貴族のお姫様がドラム缶の風呂に入るのは初めてだろう？」と、二つのドラム缶の湯船に漬かる娘達を取り囲んで囁し立てた。

それでもお湯の温かさが、血の気を失っていた体に温もりを与え、心身が弛緩してくると共に、今日身に起きた忌まわしい記憶が蘇り、男達に取り囲まれ周囲から揶揄を浴びながら、両手で顔を押さえて泣きじゃくるのであった。

娘達の肌が、お湯で暖められ綺麗な桜色に染まったことを確認すると、男達は娘を湯船から持ち上げた。

上気した艶々と輝く若い肌で覆われた裸身を男達に支えられ、ドラム缶の縁を跨ぐ時、男達は薄い春草越に、開いた股間の奥に秘められたピンク色の処女の花園に視線を注いで生唾を飲み込んだ。

姉妹は濡れた体をバスタオルで覆っただけで中島達の前に引き出された。母親の晴子は相変わらず全裸のままであった。

「お前達は、二回も続けて賭に負けたのだ。これで思い残す事も無いだろう。約束通りお前達の体を頂く。」

宣告するような中島の言葉に女達が悲鳴のような鳴き声を上げた。

「来月、我々三島組が主催する闇市である太平洋マーケットの会員を集め、懇親と慰労を兼ねた、親睦会を開く事になっている。お前達にはその親睦会の余興のショーに出演して貰おう。」と中島が激しく泣き叫ぶ女達を眺めながら続けた。

「従ってショーまで時間も余り無いから、大急ぎで人前に見せられるような演技を身に付けて貰わないといけないから、何時までも処女のままだでは演技の指導も出来ないからな。」と冷たく言うのであった。

中島達が闇屋仲間の親睦会に予定している会場は、倉庫ビルの最上階の3階であった。空襲で焼かれ屋根を吹き飛ばされて、暫く雨ざらし状態であったため、荒れ果てた室内のまま、広い床には何も無かった。

かつてはこの倉庫の持ち主が事務所として使っていたのだろうー建物の端から端まで仕切りが無く、通しの広い部屋は、百人以上の人が入れそうな広さがあった。

取りあえず雨風を防ぐため屋根はトタン板を張っただけの状態であったが、中島の言うように来月ここを懇親会場とするために室内を修理中のためか、大工や左官が使うような梯子や足場や諸々の道具が雑然と置かれていた。

高手小手に縛られた裸の女達を連れて3階に上がった。

大勢の男達がこれから始まる女達との絡みに期待してゾロゾロとついて来た。

中島が電灯のスイッチを入れて、通しの部屋の全ての電灯を点灯すると、薄暗かった部屋が明るく照らし出された。

「ここが、懇親会の会場だ！まだ床は何も無いが当日までには畳を敷き詰める予定だ。」と中島が女達を振り返り言った。埃っぽいコンクリート剥き出しの床には、今のところ所々ゴザが敷かれているだけであった。

「宴会の余興のショーのためのステージも既に出来上がっている。」と向こう端の壁面に設えられた高さ1メートル程の台を示した。

ステージは舞台の袖を含めると部屋の横幅一杯あり、そこからいわゆる出^で臍^{へそ}と呼ばれる半円形の張り出し舞台が半島のように聴衆に向かって大きく突き出していた。

中島はそのステージの上に立って、青ざめて体を震わせる女達に向かって、「この円形に突き出したステージは回り舞台となっているんだ。まだ使った事が無いから、今日は、回り舞台のテストも兼ねてやって貰おう。」と恐怖に震える女達を見ながら言った。

娘達の体を覆っていたバスタオルを剥ぎ取ると、男達は寄って集って、泣きじゃくる全裸

の女達をステージの上に押し上げた。

当日のショーで白黒の実演をすることになっている3人の若者が、着ている物を脱ぎ捨てた。

流石に人前で、男女の営みを見せることに抵抗を感じないだけあって、全員筋肉質の引き締まった体つきをしていて、背も高く、股間から垂れ下がる男のシンボルも一際大きな物を持っていた。

三人の若者達は自分の持ち物を誇示するように、恥ずかし気も無く、胸を張って股間を開いて、集まった男達に赤銅色に日焼けした裸身を見せつけた。

これから蹂躪する女体への期待か、股間の物が見る見る硬度を増し、その角度を上げて高く突き上がった。

見守る男達はその大きさに、驚きと羨望の目を送った。

「皆、太さが1寸五分（4.5センチメートル）以上ありそうだな。あんな太い物が手入らずの娘に入るのかな？」と、これから始まるショーの予行演習が凄惨なものになりそうだと期待を込めて、益々太さを増していく若者達の肉茎をステージの下から舌なめずりして見つめながら呟いた。

中島達三人も興味深げにステージ下のカブリツキに胡座をかいて腰を下ろした。

ステージに上がった男達は無言で、自分の相手する女達に向かうと、乱暴に髪を鷲掴みにして、それぞれのステージのポジションに引きずるように連れて行った。

誰がどの女の相手をするか、あらかじめ籤引きで決めてあったのだ。

回り舞台は直径4メートル程の大きさがあり、更にその内側に独立して回転する直径1.8メートル程のステージが3箇所作られていた。

男達はその3箇所のポジションに女達を連れ込んだのであった。

ステージの足元に取り付けられた照明が点され、全裸の男女を下方から煌々と照らした。

スポットライトを操作する、組員が光の輪の中に三組の男女を浮かび上がらせた。

ステージの天井に掛けられていたカーテンを剥がすとその奥から多数の鏡が現れ、下のステージで演じられる男女の肉宴を様々な角度から映し出すように仕掛けられていた。

男達は髪を掴んで、床にくずおれる女達の上半身を立たせると、恐怖に青ざめる女達の顔を、自分の逞しい物が隆起する股間に相対させた。

怯える女達の目前に、興奮してピクピク動く、巨大な肉塊があった。その良く開いた雁の直径は優に5センチを超えていた。

「ほらしゃぶるんだ！良く潤して置かないと、後が痛いぞ！」と男達は女の髪を掴んだまま命じて、不潔な男の臭いがする肉塊を、柔らかい唇に押し当てた。

今日一日、色々な男女の絡みを見せつけられ、自分たちも裸に剥かれて恥ずかしい姿を野卑な男達に見られ、更に激しい肉体的精神的苦痛を伴う責めを受け、貴族の末裔という気位も既に喪失し、すっかり神経が衰弱していた女達は、進退窮まったように、そっと口唇を開くとその毒々しい肉塊を口内に導いて行った。

しかし、男達の太い物は、女達が口を大きく開かないと入らない程太く、奥まで達した肉茎は女達の気道を塞ぎ、絶息の呻きを上げさせた。

ステージの下から見上げる男達は、この男女の白黒ショーに目を釘付けにしていた。

ゆっくりと音もなく舞台が回転を始め、男達に奉仕する女達の姿が舞台の上で動き始めた。

見守る男達から歓声が上がった。

艶めかしい照明に照らされ、三組の男女を乗せた大舞台が回転すると共に、一対一で絡む男女を乗せた小舞台が独立して回転を始めた。

そのため、下から見守る男達の目には、三組の男女が自分に近づいて来ては、離れて行き、その中で男の股間に顔を埋める女の白い背や、赤銅色に日焼けした逞しい男の背が次々と浮かび上がっては消えて行った。

初めて男の物をしゃぶる女達のぎこちない口技ではあったが、亀頭部全体に女の唾液をまぶした男達は、乱暴に女達を押し倒すと、白い尻を高く持ち上げさせた。

両手を高手小手に縛られているため、胸と両膝で体を支えるような姿勢となり、男の方を振り向くことも出来なくなった。

男達は両手で乱暴に股をこじ開けると、尻を天井に向けて上げさせたまま両脚を扇のように開かせた。

明るい照明の下で、秘部をまざまざと男達の目に晒す羞恥に女達は悲鳴を上げたが、暴力行使者の若者達は無言で、女の唾液に濡れた肉塊を、その花園に押し当てた。

「おい、お前の旦那はここを使った事があるか？」

晴子の押し広げた股間を覗く若者が、指を女の秘孔の上に在る、深い皺を刻んだ菊の花に似た花卉に押し当てながら聞いた。

「アアッ！そんなことはありませんわ！」

男の指で不潔な器官の開口部を撫で回されることに、嫌悪感を覚えながら晴子は呻く様に

言った。

「そうか？それならここは処女だな？俺はこちらの処女を頂こう。・・・言っておくが俺のは皆の中で一番太いから、お前が娘時代に処女を失った時の痛みよりずっと痛いかも知れないぜ・・・」

男は熱鉄の様に熱く硬化した物を、晴子の菊花に押し当てると、そのままグイッと腰を押してでた。

「ああ、怖いわ、お止め下さい・・・」

既に男達に前の貞操を破られている晴子は、この過酷な運命から逃れられないと諦めたかのように、激しい抵抗も示さず、か細い哀願の声を上げた。

男が自慢するように男の開いた雁首の直径は5センチ半を超えているようであった。

グワッと晴子が絶息するよううめき声を上げた。

暴力行使者の若者は、晴子が抗議するかのように反射的に肛門の筋肉を強く閉めるのをあざ笑うかのように、メリメリと周囲の肉を引き裂き、その巨大な亀頭の半ばまで腸内に埋め込ませた。

臀部の狭い狭間から突き上げる余りの激痛に目が裏返り、息が止まった。

娘達も暴力行使者の若者に突き立てられ、乙女の純血を破られる苦痛に喘いでいた。

体験を重ねた女でもきつuitと感じるような巨大な物を、初めての肉洞に突き立てられ、冷や汗を流しながら激痛にまみれていた。

半円形のステージにかじり付くように取り囲んだ男達の目の前を、結合部を露わにした三組の男女が近づいては、離れて行った。

フットライトが下から男女の絡みを照らし上げ、組員の操作する艶めかしい色をしたスポットライトが男女の結合部を逃さず照らし上げた。

ふと上を見上げると天井に取り付けられ鏡が様々な角度から、真下で演じられる男女の肉の饗宴を映し出していた。

「これに比べれば、新宿の額縁ショーなんか子供だましだ！」

誰かが感極まって叫び声を上げた。

隠微なショーに男達の目は釘付けになった。

男の進入を拒もうとして、必死に股間に力を込める女達の努力も虚しく、今や男達は太い肉塊を根本まで女の股間に埋め込んでいた。

晴子を責め立てる男も、その太い肉茎を根本まで肛門の中に突き入れていた。

「先に浣腸をしておいて、腹の中を空っぽにしておいて良かったぜ・・・」と、強烈な力で男根を締め付ける晴子の絶妙な内部を楽しみながら、浮かれた声を出した。

他の男達も、内部まで完全に没入させると、その締め付け具合と、内部の作りを楽しむかのように、体の動きを止めていた。

やがて、その暖かく湿った良く締め付ける内部に満足したのか、男達はゆっくりと体を前後に動かし始めた。

晴子を責める男も体を動かし始めたが、その良く張った鰓で腸を引きずり出されるような摩擦に悲鳴を上げた。

事実、男が肉棒を引く時、周囲の肉を引きずって、肛門周囲が男の肉茎を柱とするテントのようにせり出し、男が体を沈める時にはその周囲がすり鉢状に体内に押し込まれた。

男達に組み敷かれ、背後から突き立てられる女達は、男達の激しいピストン運動に悲鳴を上げ、顔を舞台に押し付けて泣きじゃくった。

回り舞台の効果は、単に下から見上げる男達だけではなく、犯される女達にも発揮した。後ろから突き立てられながら、同じように背後から犯される娘達の姿があらゆる角度から、涙にかすむ母親の目に入り、悲痛な声を上げた。

姉妹にしても母や姉や妹が、結合部を露わにして、色々な角度を伴い、近づき離れて行く様を間近にして泣き叫んだ。

女体に慣れてきた男達は、その長い陰茎を内部に突き立てたまま、女達を引き起こして体位を変え、胡座をかいた膝の上に女を乗せて背後から犯したり、仰向けに横たわる女体の上に覆い被さったり、結合の様子がより一層見やすいように横向きに寝かせた女の背後から結合したり、色々な体位を取らせ始めた。

その三箇所で行われる様々な愛欲の構図に男達は目を血走らせて見つめ続けた。

突然、後ろの方で順子の裸身を撫で回しながら見物していた牛田が、順子の髪を掴むと引きずるようにステージの奥に上がって来た。

順子は、まだ後ろ手錠のままであった。

「お前も今日は朝から何度もここをいじくり回されてまだ疼いているんじゃないか？」とステージの上で順子に股間を開かせて、菊の花びらを撫で回しながら聞いた。

順子の答えを聞かず、牛田は直径8センチ近くありそうな太い張り型を手にとると、有無を言わず順子の後門に捻り込ませて行った。

「アアッ！嫌！」牛田の乱暴な行為に順子が腰を悶えさせて悲鳴を上げた。

「全くお前も大したもんだぜ・・・何もしなくてもこんな大きな張り型を尻に咥えて行くんだからな・・・」牛田は張り型を器用に操作しながら、順子の腸内に深く埋め込ませて行った。

順子も苦悶とも歓喜ともつかない表情を浮かべ、腰を振り立て、暴力行使者に協力するようにその太い器具を自らの体内に迎え入れて行った。

張り型の握りの部分まで咥え込んで、順子の後門を大きく押し広げられ、その周囲を飾っていた皺は今は伸びきり、その艶々した粘膜を露出していた。

そのため順子の前門は張り型に後ろから押されてひしゃげ、醜く変形していた。

牛田は張り型を収めた順子の秘部を眺めて満足したように頷くと、自らズボンを脱ぎ始めた。

下履きを脱ぎ去ると隆々とした肉塊が現れた。

「俺のは、彼奴ら程大きくは無いがな・・・」と、順子に膨張した肉塊を見せながら呟いたが、それでも直径5センチ近くありそうな人並み大きな怒張を順子に見せつけた。

そして腰をかがめると、地面に打たれた杭のように突き出す張り型の僅か前の変形した秘孔にその逞しいものを押し当てようとした。

「アア・・・無理よ。入らないわ。」

後ろに収めた太い張り型の圧力で最早前門には僅かな物も受け入れる余裕は無いと、順子が首を振って抗議するのも関わらず、「どうかな？やってみないと分からないじゃないか・・・」と、なおも強く男根を押し付けた。

「ああ・・・これはきつい！まるで処女の様だ！」順子の肉の抵抗を押し分けながら、自らの肉塊を押し入れる牛田が歓喜の声を上げた。

「アアッ！痛いわ！」前後から太い物で串刺しにされ、激痛に身動きも出来ない順子が悲鳴のような声を上げた。

舞台の上では、処女を失った二人の若い女と、初めての部分を犯される熟女と、前後から責められる女の悲鳴が甞していた。

男達は益々熱が入り、女達に様々な体位を取らせながら、腰を動かし続けた。

姉妹を襲う男の脈打つ怒張には姉妹の処女の証である血がべつとりと付着し、晴江を責める男の物にはその余りに太すぎる男根により引き裂かれた晴江の血が付着していた。

肉体改造の開始

翌日、不幸な母娘は地下室の檻の中で目覚めた。

姉の聖子は、夢の中で得体の知れない化け物の集団に襲われ暴行される夢を見て、うなされて飛び起きるように眠っていたベッドから跳ね起きた。

昨日、気も狂わんばかりの数々の恥辱を与えられ続けた末に、男に処女を奪われ、野卑な男達が嘲り笑う中で、長時間の陵辱を受け続けた。

最初の乙女の証を破られ時の痛みが、男達に突き立てられ煽られる内に何時しか麻痺して来た頃、頭に霞が懸かって来たように意識を失ってしまったのだった。

昨日の事がどうか悪い夢で在って欲しいと、周囲を見回したが、そこは何時もの見慣れた自分の家の寝室では無く、周囲三方を飾り気の無いコンクリートで覆われ、唯一解放した正面には鉄格子が取り付けられた檻の中であった。

その何も無い殺風景な檻の中に唯一置かれた、粗末なベッドの上に全裸で薄い毛布一枚を掛けられた状態で、寝かされていたことが理解できた。

やはり、あの恐怖の出来事は悪夢では無かったんだと、到底受け入れがたい事実が聖子の心に重くのし掛かって来た。

それと共に、股間に熱を帯びたような感じがあり、女体の中心部からズキズキするような疼痛感を覚え始めた。

恐る恐る指で股間を触ると、ジットリと湿り気を帯びていることが分かった。

裸身に掛けられていた薄い毛布をめくって、股間をなぞった指を間近で見つめると、薄く滲んだ血が指先に付着していた。

アアッ！私はもう処女では無いのだ！と悲痛な叫びが込み上がって来た。

婚約者に捧げるために、結婚式を挙げるまで大切に取っておこうとしていた、乙女の宝物を野獣のような男達に奪われてしまったことに、気が狂いそうな衝撃を受けた。

「聖子！、聖子！」

聖子の悲痛な鳴き声に、おろおろした声で母が呼び掛けてきた。

「良かった、あなたがずっと動かないからそのまま死んでしまったのでは無いかと心配してたわ！」

見ると、母は、聖子と通路を挟んだ向かい側の同じような檻の中に閉じ込められていた。ベッドには横たわず、正面の鉄格子を掴んだまま、じっと向かい側の娘達の檻の方を見

つめていた様子であった。

姉の泣き声に、眠りから覚めたのか、妹の明子が隣の檻の中で、悲鳴のような鳴き声を上げた。

檻の中は哀れな母娘の悲痛な鳴き声が何時までも弔っていた。

「おう！ようやくお目覚めか？」と、娘達を見張っていた若い男が声を掛けると、娘達が意識を取り戻したことを仲間に報告に行った。

程なくして、何人かの男を伴い、さつきの男が戻ってきた。

男達は手に食べ物を載せた盆を持っていた。

「来月に迫った親睦会のため、大急ぎで男達を喜ばせる技術を身に付けて貰わないと困るからな。今日から忙しくなるぞ。さっさと飯を済ますんだ！」

と、言うのと赤飯と冷めた吸い物と簡素な副食をのせた盆を鉄格子の扉と床との間の僅かな隙間を滑らせて、檻の中に差し入れた。

「お前達が立派に女になったお祝いに、赤飯を持って来てやったぜ！闇市の売れ残りだから、少し硬くなっているが、今のご時世じゃ満足に物も食べられない奴らが太勢いるんだから贅沢を言うんじゃないぞ！」

と、周囲を見回して笑いながら言った。

「今までお前達は、豪華な食事をノンビリ楽しみながら食べていたかも知れないが、軍隊じゃ『早飯早糞芸のうち』と言うんだ。5分後に下げに来るからな。それまでに済ましておくんだ！」と、言うのと女達を残して一端去って行った。

女達は昨日から何も食べていないため本来空腹な状態であった筈だが、とても食べられるような気分にならず、床に置かれた粗末な食べ物をじっと眺めた。

少し心が落ち着いて、周囲を見回すと同じような作りの牢が、真ん中の通路を挟んで6室ずつ、合計12室在ることが分かった。

この建物の地下室自体は戦前から在った様だが、この牢は、まだ最近作られた物の様で、鉄格子や仕切りの壁も真新しいように感じた。

そして、自分たちが閉じ込められた牢以外には、人の気配は無く、空き室のようであった。

昨日同じように責められていた順子様は、何処に居るのだろうと、周囲を見回した。

その時、さつきの男達が大声で笑い合いながら戻って来た。

女達の手つかずの食器を見て、「何だ、まだ食べていなかったのか。もう良い！調教の時間

が迫っているから、このまま飯抜きだぞ！」と女達に向かって怒鳴った。

男達が口にした『調教』と云う言葉の意味が分からず、聖子も明子もキョトンとした顔をした。

「さあ、さっさとここを出るんだ」

男達が鉄格子の扉の錠を外して、出てくるように手招きした。

「待って下さい。その前にお花を摘みに行かせて下さい。」と、妹の明子が下腹を押さえながら悲痛な声を上げた。

「何！花摘みだあ？！」

突然意味不明の言葉を投げかけられて驚いた声を上げた。

「厠に行きたいって事を上品に言ったんですよ。」

物知りの若者が、どぎまぎする男に説明した。

昨日からの間断無い責めを受け続けていたため、一度も排尿していない膀胱はパンパンに膨れ上がり、薄い毛布だけで全裸で寝かされていたこともあり、体が冷え、尿意は押さえがたい程高まっていた。

そして、その状態は他の二人の女も同じであった。

「何？厠だと！此処にはそんな気の利いた物は無い！おしっこをしたければそのバケツにしろ！」と檻の中のベットの傍に置かれた、灰白色の錆を浮かべたブリキのバケツを指差して言った。

「もっとも、紙が無いから終わった後は、股を大開きにして風に当てて、自然に乾くのを待つしか無いがな・・・」と、仲間同士で大笑いしながら言った。

男達の下品な言葉に、野卑な男達の面前で排尿するなど到底出来ず、顔を真っ赤にして、俯いてイヤイヤと首を振った。

「どうしたんだ？」

遅れてやって来た中島達が、檻を覗き込む男達に声を掛けた。

「いえね・・・女達がバケツにおしっこするのを嫌だと言うんですよ」

と、中島の顔を見ながらニヤニヤ笑いながら男達が言った。

「そうか？まあ、仕方がない。調教の準備は出来ている。早く女達を牢から連れ出すんだ。」

と、命じた。

女達は縄掛けされなかったが、全裸の体を両側から男達に支えられ、廊下を歩まされた。

昨日は男達の前に一度晒した裸身ではあったが、やはり裸を見られるのは辛く、手で股間

と胸を覆い、少しでも露出を減らすように前屈みで歩いた。

男達に支えられる様に、地下室の一角に作られた中島の云う調教室まで連れて来られて。十畳程の殺風景な室内に女達が連れ込まれた。後から物見高そうに男達が部屋にゾロゾロ入って来たので部屋は人で一杯になった。

部屋の壁に沿って、3個の木製の椅子のような物が置かれていた。

それは、椅子にしては異様に座面が長く70センチ程の長さで前に突き出していた。

まるで、ベッドを半分の長さに切った物の様であったが、横幅は僅か50センチ程しか無かった。そのベッド状の上面は、スポンジを入れた黒い革で覆われていた。

そして、椅子なら背もたれに当たる部分は座面から60センチ程垂直に立っていたが、そこには背中を支える板は無く木枠しか無かった。

木枠の上の両隅と座面の両隅の4箇所には革ベルトが固定されていた。

「これは、お前達を調教するため家具職人に作らした、特製の調教台だ！家具職人も何に使うのか考え込んでいたぜ。まあ、今回に関しては色々元手も懸かっているから、お前達もそれを無駄にしないよう、しっかりと頑張るんだぜ。」と、中島はニヤニヤ笑いながらその調教台を指差して言った。

中島の指示を受けた男達は、恥ずかしい部分を必死で隠していた女の両手首を掴んで、力尽くで引きはがし、そのまま左右から両腕を掴んだまま、調教台の方まで引きずるように連れて行った。

そして、抵抗する女達を黒革のマットが敷かれた椅子の座面のような物の上に無理矢理載せ上げた。

女達の上半身は、その長い座面の上に仰向けに寝るような形となったが、中途半端な長さのため腰から下は黒革の座面から飛び出し、両脚は床についたままであった。

そして、椅子なら背もたれに相当する部分には、調教台の脚からつながる二本の太い角材と、その二本を繋ぐ横木しか無かったため、女達の頭は木の枠から外にはみ出す形となった。

必死の抵抗に手を焼きながらも、男達は無理矢理女の両手首を座面の両端に取り付けられた手枷に括り付けた。

女達は仰向けに寝たまま、両腕を固定されてしまい、上半身の動きを封じられた。

次に男達は床に投げ出された状態の足首を掴んだ。

男達の意図を察して、イヤーッ！と、女達が悲痛な叫び声を上げた。

男達は女達の悲鳴を気にする素振りも見せず、必死にばたつかせる女達の足首を掴んだまま、両脚を高く上に持ち上げると、そのまま裸身を二つに折るように頭上に持って行った。そして、必死に抵抗する両足首を背もたれに当たる部分の上端に取り付けられた革ベルトまで運ぶと無理やり縛りつけてしまった。

女達は、まるで赤ん坊がおむつを替えられる様な姿勢で、短いベッドの上に仰臥させられてしまったのだった。

両足首を頭の上で引き絞られ、拘束台の上で身体を二つ折りの姿勢にされて、女達の豊かな尻は、ほとんど黒革のクッションから飛び出ており、両脚を大きく広げたため最も隠しておきたい秘密の場所は、隠しようも無く男達の目の前に露わとなった。

男達が双臀の下に枕を差し込んだので、いやでも自分たちの開ききった股間が目映った。

「フフ・・・良い格好にされてしまったじゃないか？」と、女達の恥ずかしい姿に満足したかのように、晴子の豊かな尻を撫でながら中島が言った。

恥ずかしい下半身を男達の眼前に、これ見よがしのように突き出した女達が横一列に並んでいた。

「どうだ・・・お前達はさっきから小便がしたくてしょうがないのだろう？」

晴子の柔らかく脂肪を載せた下腹を意地悪く撫でながら聞いた。

「イヤッ！触らないで下さい！」

中島に揉むように下腹を刺激され、今にも膀胱内に溜まりきったものが、堰を切って漏れそうな状態に追い込まれて、抗議の悲鳴を上げたのだった。

「女達による小便の飛ばしっこ・・・てのも今度の親睦会の良い余興になるかも知れないな・・・」と、体内から突き上げる圧力に苦悶する女達を見詰めて、嫌らしく頬を歪めながら言うのであった。

「あら！浦川侯爵家の母娘ともあろう人が、下賤な男達の目の前でなんて格好をなさっているのかしら！」

甲高い女の笑い声が響いて、侯爵家の母娘を取り囲んだ男達の後ろから、順子が姿を現した。

両手こそ拘束されていなかったが、相変わらず全裸のまま、首には犬の首輪を嵌められ、

首輪から伸びた鎖を若い男が掴んで先頭に立ち、男達を左右に掻き分けて三人が拘束されている調教台の前まで進み出て来た。

順子の背後にはぴったりと牛田が体を密着させて、唇を順子の頬に這わせながら、背後から順子の乳房を揉み上げ、片手を股間に這わせてツルツルに剃毛された割れ目にそって上下に指をはわせたり、掌全体を使って元貴族令嬢の秘丘を撫で回していた。

そんな牛田をまるで、首筋にじゃれ付く子犬をあやす様に、夢中で唇を這わす牛田の頭を優しく撫でるのであった。

「あなた達、これからおしっこを飛ばしっこをするんですって？」

三人の前に進み出た順子が、牛田に自由に体を愛撫させながら聞いた。

突然、豹変したような口ぶりで話掛けてくる順子の姿に三人は啞然とすると共に、得体の知れない恐怖を感じた。

「おしっこをするなら、ここがこんなに閉じていたら綺麗な弧を描いて飛ばないわよ。」と、晴子の綺麗に剃毛され童女のようになった割れ目の上を指でゆっくりとなぞりながら順子と言った。

順子の指が二つの柔肉の重なった深い溝の上を撫で下ろした瞬間、屈辱と恐怖で晴子の体がビクッと緊張した。

そんな晴子の恐怖と驚愕の混じった目も気にする様子も無く、童女とは違うぽってりと成熟した女の肉厚の陰唇を両手の指で摘んで、左右に押し広げようとするのであった。

余りの屈辱に、「お止め下さい！ 順子様！」と、悲鳴の様な声を上げながら激しく首を左右に振り立てた。

全身を真っ赤に染めて示す熟女の恥じらいを嘲笑う様に淫靡な微笑みを口元に浮かべて若い順子が侯爵夫人を責め立てた。

「ほうら・・・開いて来た。まあ！何て嫌らしい色かしら！」

焦らすように秘奥を寛げながら順子が大げさな声を上げたので、取り囲む男達が大声を出して笑った。

貴夫人の秘密の花園を外部から守っていた厚い肉のカバーは今やパツクリと押し広げられ、更に指でその奥に在る複雑な構造をした薄い襞を掻き分け始めた。

同性の若い女に秘部を掻き分けられる屈辱に

「アアー、止めて下さいませ！ 順子様！」

と、おこりに罹ったように体をブルブルと震わせ、涙を浮かべて哀願した。

母親を挟むように左右の調教台に拘束され恥ずかしい姿勢にされた娘達も悲鳴のような声を上げて、順子に哀願した。

「ほら！ここよ！ここがおしっこ穴よ！」大きく開花させられ、パツクリと開いた秘所の中心にある華芯の僅か上に在る小さな孔を指先で撫で回し、嫌らしい笑みを浮かべながら言った。

「アアー！恥ずかしいわ！」

体内からの強い圧力に責め立てられ切羽詰まった状態で、その出口に当たる細孔を指の腹で押され、まるでマッサージするように撫で回され、思わず悲鳴が上がった。

「もう出そうなのね？」隠微なマッサージにより細孔が少し押し広がり、指先に湿り気を感じて、順子が晴子の顔を覗き込みながら尋ねた。

順子の問いに答えられず、涙を流す目を閉じて、必死に首を振った。

中島がブリキで出来た洗濯バサミを順子に差し出すと、卑猥な笑みを浮かべて受け取った。

アアー！イヤ！イヤ！

ブリキの洗濯バサミで微妙な神経を散りばめた褻を挟まれる痛さより、洗濯バサミに挟まれて秘所が全開にされる羞恥に激しい悲鳴を上げた。

洗濯バサミにはゴム紐が結び付けられており、その一方を調教台に固定したため、ゴムの強い張力で最も隠しておきたい恥ずかしい部分は隠しようも無く、野卑な男達の前に露わとなってしまった。

作業を終えた順子は晴子の秘所を触っていた、指先を鼻の所に持って来て臭いを嗅ぐ仕草をした。

「まあー！臭いわ！牝のイヤらしい臭いがするわ！」と、大声を上げると、「あなたも嗅いでみる？」と、指先を牛田の鼻に近づけたので、周囲の男達も笑い声を上げた。

そんな順子の陰険な態度に、娘達が鳴き声を上げた。

「待ってなさい、直ぐにあなたたちもお母様と同じようにしてあげるからね」と、娘達の抗議も気にならないように言うと、洗濯バサミで同じように二人の娘の秘部を開け広げ、固定してしまった。

「まあ！嫌らしい女の孔が三つ丸出しよ！」と作業の結果を見聞するように母娘を見回して声を上げた。

一列に並べられた調教台にオムツを取り替えられる女兒のように拘束された哀れな母娘は大切な女の源泉を大きく男達の目に開陳していた。

「お待ち遠様、貴方たちオシッコがしたいんでしょ？もうしても良いのよ・・・」

尿意は耐えられない程、体内から突き上げていたが、無様に秘所を晒したまま男達の目の前で放尿することも出来ず、下半身をさつきからモジモジさせているのだった。

「あら、出ないの？下品な男達に見られたままでは、貴族のプライドが邪魔して出来ないというの？でも貴方たちはきっとオシッコをすることになるのよ・・・」と、怯える晴子の目をじっと見ながら呟いた。

順子は大きな鳥の羽を取り出した。

そして、その先端の柔らかい羽毛で、女芯の上に開孔した、ひくつく孔をそっと撫で上げた。

敏感な神経を散りばめた、繊細な箇所を柔らかい羽毛で撫でられて、堪らず晴子が悲鳴を上げた。

中島と小島も順子を真似て、羽の先端で聖子と明子の秘所を廻り始めた。

その痛くも強くも無い、微妙な柔らかい感触が排泄口の開孔部を、優しく撫で上げじれつたいような不思議な搔痒感が股間からジワジワと込み上げて来た。

今にも堰を切って噴出しそうに内部から高まる圧力を辛うじて押さえ付けている、肉の弁を表から優しく刺激され、その焦れたい搔痒感と内から突き上げる痛痒感に、尿道口を制御する神経は掻き乱され、今にも放出を始めそうな状態に追い詰められていた。

「アアーッ！もう止めて下さいまし！」堪らず女達が悲鳴を上げた。

「駄目よ、貴方たちがオシッコを飛ばすまで止めないわ。」

女達の悲鳴にも似た哀願にも関わらず、順子は楽しそうに毛羽先で秘孔を撫で上げ続けた。

「アアー！します！しますわ！だから止めて下さいまし。」

女達の上げる屈服の悲鳴に満足した順子は笑みを浮かべて、

「そう？だったら、男達は誰が一番遠くまで飛ばすか賭けているんだから、手抜きせずに頑張ってオシッコを飛ばすのよ！」と、甲高く笑いながら言った。

男達が全員賭け終わったのを確認すると、順子達は侯爵家の母娘の拘束された台の横に移動した。

「いいこと！一、二、三で指を離すから、指が離れたら同時にオシッコを飛ばすのよ！遅れたら後でお仕置きよ！」

順子が晴江の尿道口を中指の腹で押さえながら言った。

聖子のは中島が、明子のは小島が指で押さえていた。

女達の尿意は堪え難い程高まっており、下半身をブルブルと震わせていたが、順子が怖くてじっと我慢していた。

「それ！一、・・・二、・・・三！」

順子が秒読みをした。三まで数えたのに合わせて全員が一斉に尿道孔を抑えていた指を離した。

これまで、尿道孔を強く押さえ付けられていた、指を離されて、その秘められた穴が剥き出しとなった瞬間、女達は体をブルッと震わせたが、流石に野卑な男達の面前での放出は出来なかいのか、最後の崩壊を必死に堪えている様子であった。

「ああー！恥ずかしいわ！」女達が顔を真っ赤にして、腰を震わせながら悲鳴のように泣き叫んだ。

「何が恥ずかしいと言うの！男の目の前でオシッコなんて恥ずかしくて出来ないと言ってもうの？昨日この男達の目の前で散々ウンチを撒き散らしたくせに！」

順子の言葉に取り囲む男達が思わず笑い声を上げた。

「ほら！早くするのよ！」指を離しても放尿を始めない女達に腹を当てたように、晴江の下腹をぐっと押さえ付けた。

その、圧力に負けたように晴江の堪えに堪えた放出が始まった。

母親が悲鳴のような声を上げて放尿する姿につられたのか、娘達も激しい勢いで放出を始めた。

尻の下に枕を押し込まれて、蠱惑的に突き出した股座の中心部分をゴム紐の付いた洗濯バサミにより開け広げられて、開き切った女の最奥の秘孔から放物線を描いて熱い液体を放出し始めた時、周囲を取り囲む男達はその女達の滑稽な姿に爆笑した。

男達の卑猥な嘲笑を浴びせられても、一端収縮を始めた膀胱は、内部に溜まりに溜まった汚水を全て放出し終わるまで、その緊張を解くことは無く、女達は全身を羞恥に赤く染め、激しく顔を左右に振り立てながら、泣き叫んでいた。

膀胱内に大量に蓄えられ、下腹を内部から痛いほど膨張させていた尿が、最早止める事も叶わず激しい勢いで股間の秘奥から噴出していた。

秘孔を内部から押し広げるように吹き出した黄色い液は、腰枕により高くもたげられた股間から、斜め上に向かって噴き上げた後、噴水のような放物線を描いて、コンクリートの

床の上に落下して激しく飛沫を上げた。

「これは、これは、とても貴族のご令嬢やご令室とは思えないぜ！下品な男の立ち小便でもこんなに激しく飛ばさないぜ！もっとお淑やかに流したらどうだ！」

女達の凄まじい排尿姿を見ながら笑い合った。

大量の尿を排泄して体内の圧力が下がると共に、放出の苦しさが下がって来たのか、女達の鳴き声が弱くなって来たようであった。

大方の排泄が終わって、残尿がチョロチョロと尿道孔から流れ落ち、会陰を濡らしていた。女達の股間の真下から飛程が一筋の川のように水溜まりを造り、黒い染みとなって連なっていた。

その真っ直ぐに延びた、染みの長さを見れば誰が、一番遠くまで飛ばしたのかは一目瞭然であったが、男達は巻き尺を取り出して、飛程距離を測り始めた。

「令夫人が１１２センチだな、・・・それから、妹の明子は１３８センチだ。・・・そして、姉の聖子は何と１５０センチだ！この勝負聖子嬢の圧勝だぜ！」

賭けに勝った男が歓声を上げて、金を回収して回った。

賭けに負けた男達が、忌々しげに「お前達！恥ずかし気も無く床の上にこんなに小便を撒き散らしやがって！臭くて堪らないぜ！」

「昨日は糞を撒き散らしたと思ったら、今日は小便を撒き散らしやがって！お前達、少しは、恥というものを知ったらどうだ！」

「お前達本当に貴族の婦人か？そこらの百姓娘でも恥ずかしくって、こんな事出来ないぜ！」

とか口々に毒突いた。

そんな男達の非難に排泄の苦しさが消え去り羞恥心が蘇った女達が、泣きじゃくりながら詫びの言葉を並べた。

長時間に渡って自分の体内から責め立てていた尿意が去り、男達に毒突かれている間に、女達は貧血に罹ったように、スッと意識を失った。

「全く駄目ね！オシッコしただけで気を失って仕舞ったわ・・・」

「溜まりに溜まったモノを出し終えて、気持ちが良くなってオネンネしてしまったんだろう。」

男達が桜紙を手し、まだ小水に濡れ光る股間を拭き取りながら嬉しそうに笑い声を上げた。

薄い紙越しに大きく開花した秘裂の間を隠微に動き回る男の手の気持ち悪い動きに女達の意識が戻った。

小刻みに男の指先が女体の秘められた場所を摩っていることが分かり、悲鳴を上げ、羞恥に身悶えた。

淫靡な笑みを浮かべる男達の眼前に醜悪な姿を晒してしまい羞恥に身悶える女達に向かって、「さてと・・・それじゃスッキリした所で調教に入って貰いましょうか・・・」と、冷たく投げかけた。

「順子様、これ以上私達に何をなさろうと言うのですか！」

今や、はっきり順子は自分達を虐待する側の人間だったと思い知らされた晴子は、順子の醒めた物言いに不気味な物を感じて叫ぶように言葉を発した。

恐怖に駆られながらも貴族としての優雅な言葉遣いを忘れない哀れな令夫人に周囲からクスクスと笑い声が漏れた。

「何って、調教と聞いても貴方達には理解出来ないかしら？貴方達は、これからこの部分を男が夢中になる能力を持つように特別な訓練をして貰うのよ・・・」

自分の股間を撫でながら、冷たい視線でさらりと言ったのけた順子に、拘束台に縛り付けられたままの女達は、ゾッとする物を感じて引き攣った悲鳴が上がった。

「此所に居る中島さんは、三島組と云うこの辺の闇市を束ねるボスだけど・・・」

順子が隣に立つ中島を指し示しながら話し始めた。

「来月から今の闇市グループを統合して、株式会社三島商会と云う会社を設立するの・・・新生の三島商会では興業部と云う部門も作る予定で、男の人向けにイヤらしいショーを演じたり、男の人に身体を売る部署も作る予定なの・・・貴方達はこの部署の専属女優となって貰うからそのつもりでね。」

順子の突然の宣告に、拘束台に仰向けに緊縛されている母娘は顔色を変えて互いに見交わした。

「中島さんが三島商会の社長、こちらの小島さんが副社長、大島さんが専務よ・・・」

身体を二つ折りに固縛され、あられも無く両脚を拡げて頭の上で固定された三人の女に紹介した。

「そして、私の後ろでじゃれついている牛田が興業部長よ・・・三人ともこの人達の言う事

を良く聞くのよ！」

と、相変わらず順子の背後から身体を密着させ乳房を揉み上げる牛田の頭を撫でながら紹介した。

「この興業部には貴方達だけじゃ無くて、貴方達の良く知っているお友達もどんどんスカウトして来て上げるから、寂しくないわよ。」

啞然とする母娘を見下ろしながら楽しそうにケラケラと笑うのであった。

第一部了